

## 大 葬 記

## 靈 柩 拜 觀

エドワード七世陛下の遺骸を納めた棺は昨日バッキンガム宮殿から、エストミンスター、ホオルに移されて、昨日は午後六時から十時まで、今明兩日は午前六時から午後十時まで一般庶人の参拜を許されて居る。

エストミンスタア、ホオルといふ名前はマコウレイのヘスチングス傳の中、ヘスチングス彈劾の條で初めて耳にした名前だと記憶して居る。キリアム、ゼ、コンクエロアの子ルウフスが千九十七年に建てたもので、千二百九十一年火災の爲め大半烏有に歸したが、エドワード二世が再建し、千三百九十八年リチャード二世が擴大した、長さ二百九十呎、幅六十八呎、高さ十二呎の大きなホオルである。壁には固より柱はあるが、部屋の中には一本も柱が無い。そしてその火打梁のある檜木づくりの天井は、木材建築の傑作と稱せられて居るものである。

初期の國會を開いたのは此處であつた。ジヨオジ四世に至るまで歴代の國

王の戴冠式は此處であつた。チャアルス一世が死刑を宣告されたのも此處。クロムエルがロオド、プロクタアと名乗つたもの此處。キリアム、ワレエス、サア、ジョン、オールドカスル、サア、トマス、モア、ガイ、フオオクスの死刑宣告もみな此處。七ピシヨツブの赦免、ロオド、バイロンの審問、そしてワレン、ヘスチングスの彈劾も此處であつた。

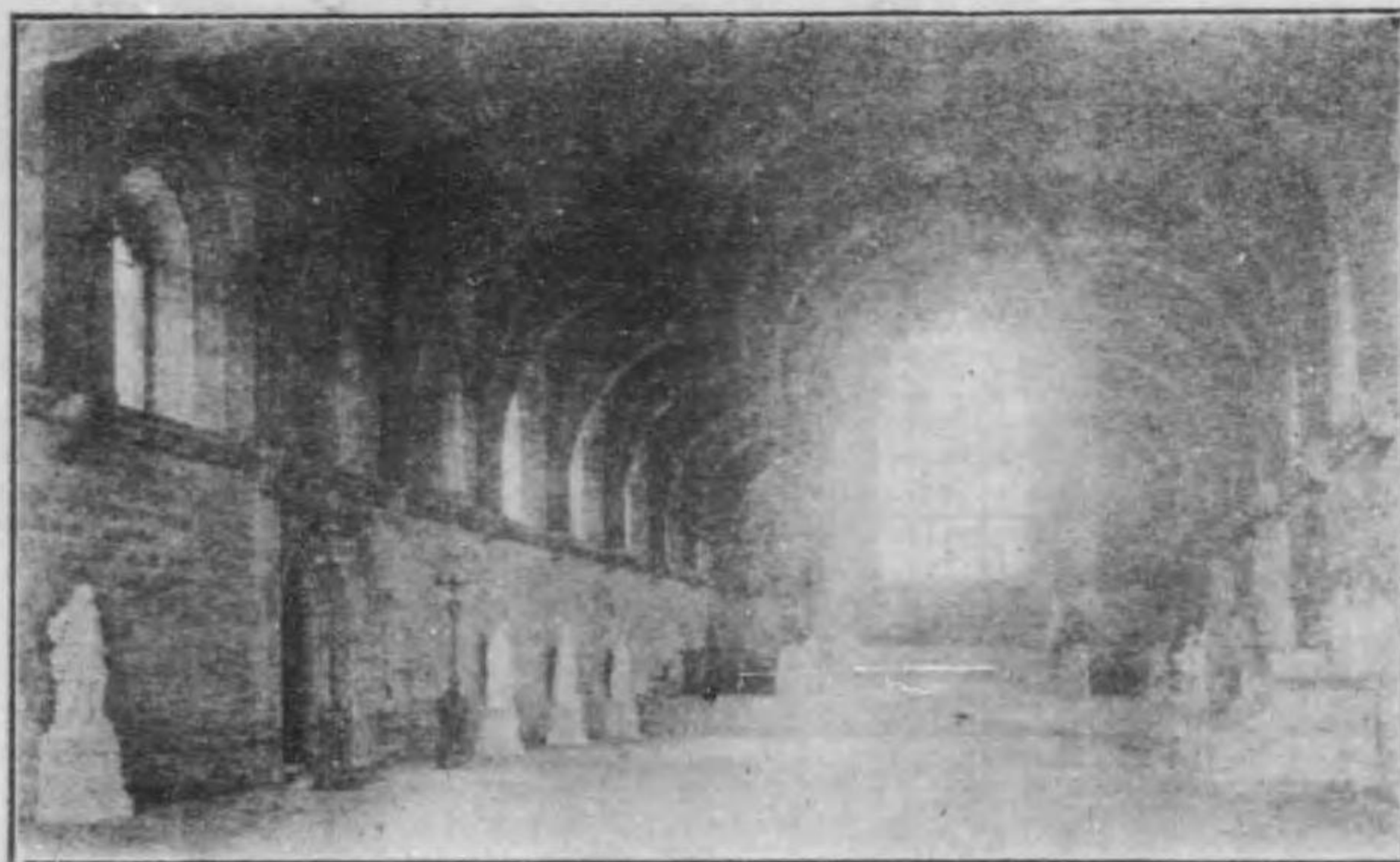
エドワード七世陛下の棺は、此の偉大なそして歴史的なホオルの中央に置かれて居る。

棺は、廣狹十疊敷許り、高さ二三寸のプラトフオオムの中央に、三段の高臺の上に置かれて居る。下の高臺は二疊敷位、一番上のは一疊位、全體の高さは四尺許りを見た。此の高臺の前部にロオレルの花冠、後部に白百合と紫色の蘭とで造つた花冠が立てかけてあつた。

棺は悉皆紫天鵝絨で巻いてあつて、更にその上に白い棺布がかゝつて、その上にまた御旗が打ちかけてある。御旗の上、御遺骸の御頭の上に當つて、燦爛たる王冠が戴つて、御胸の上と覺ばしきあたりにオルブとセプターとが置いてある。



平素のエストミンスター、ホオル



Westminster Hall

そして王冠の前方少し離れて、金の大十字架が高く突立つて居る。

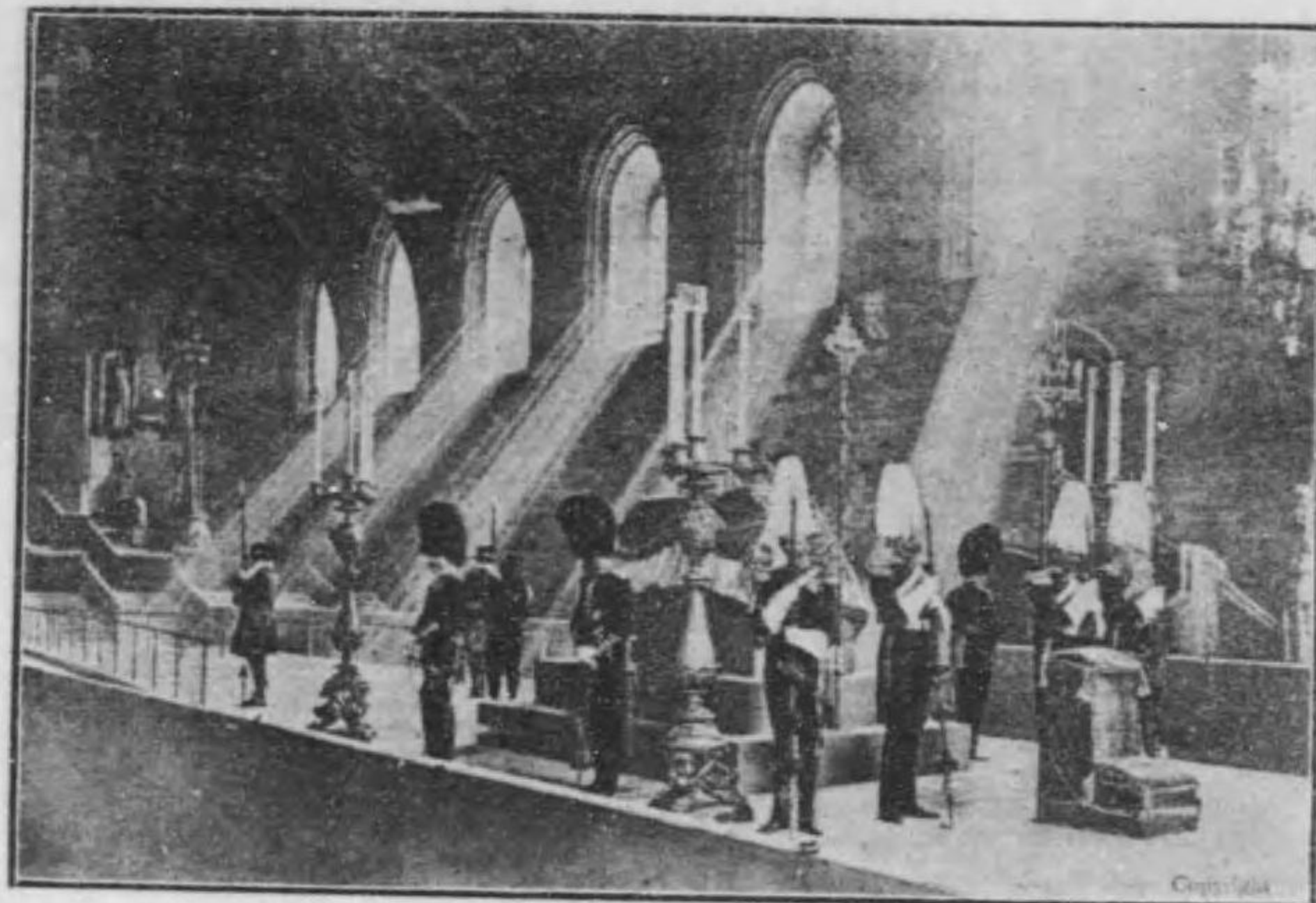
ブラトフオオムの四隅に一人づゝ何れも御棺を背にして國王護衛士プロテクトルが立つて居る。棺を倒さまに突き頭を垂れて、不動の姿勢を執つて居る。

御棺の左右兩側には、同じく棺を背にして二人づゝ熊毛の帽のグルナデイル、ガアドが立つて居る。これ亦頭を垂れ、抜刀を床ゆかに立て、柄頭に兩手を重ねて居る。

御棺の御足の向いて居る方、御棺に近く接して、これ亦御棺を脊に、一人の印度人の少佐が、同じく不動の姿勢を執つて抜刀を垂れて居る。

御頭の方の側には、四人一列を爲してゼンツルマン、アト、アアムズが立つて居る。白い長い鳥毛

國王靈柩安置の景



Lying in State, King Edward VII, Westminster Hall.

の兜をかぶつて居るのだが、その鳥毛がそよとも動かぬ。人間が全く人形と思へるほどだ。

高臺の四隅に金製の高い蠟燭立があつて大きな蠟燭が點されて居つた。總ての光景森嚴を極めて居る。

僕は十時頃にエストミンスター、アベイ近くへ行つたが、四列を爲して蟻の行列のやうに續いた群集は四哩許り距つて居るチエルシイ邊に始つて居ると聞いて、早足で其處まば抜道して行つて、やつと行列の最後へ加はつた。行列は段々長くなる許りで進行は一方向抄取らぬ。牛の歩行ウシノアヒよりか遅い。それでも午後一時過にホオルへ入ることが出来た。



そしてヨオマンの槍に觸るゝ許り近寄つて、靈柩を四五尺離れて拜することが出来た。

此日は朝の六時から十時までに一萬五千人、それから夜の十時までに十一萬五千人、計十三萬人参拜したのだといふ。参拜者の中には馬丁も居れば、赤ん坊を抱いた裏店のおかみさんも居る。服装なんか全くお構無しである。但しどんな人でも必ず喪章はつけて居るのである。

(四十三年五月十八日)

### 葬式の行列

昨夜は遅くなつてから雷鳴に連れての豪雨であつた。それが今日先王の葬儀のある朝となると、からりと霽れ上つて一點の雲翳も無い無類の大快晴となつた。

僕は五時半に起きて、朝食もせず六時に宅の前からバスに乗り、六時半にハイドバークへ着いた。マアブル、アアチ附近で葬列を拜しやうと思つたのだ。

處が公園の門をはいつて見ると、御通路の兩側の歩道ははや人の黒山だ。仕方が無い。その左側の歩道と平行した間に四五間幅の芝生を隔てた、別な歩道の、低

い鐵柵を前にして位置を占めた。人込は段々盛んになる。僕の後ろも三重四重になつた。前の芝生も、始めのうちは巡查が八釜敷言つて人を入れなかつたが、しまひには柵を越えて人がはいり込んだ。芝生の處々に大木がある。それには刺のある鐵條を巻き付けて人の登れぬやうにしてあつたが、それも一人登り二人登りで、しまひには何の木も人の鈴生りになつてしまつた。巡查も笑つて見て居るやうになつた。

棺車がエストミンスタア、ホオルを出るのは正九時五十分、ハイド、バークへ入るのが十時五十五分の豫定だから、僕は此處で四時間半立往生をしなきやならぬ譯であつた。其間のつらいこと一通りでは無い。僕の右隣には中年の夫婦者、左には二十四五の女が二人居る。まだ三時間半待たなきやならぬよ、もう三時間だ、もう二時間半だ、てな會話ばかり御互にする。木登に成功した者があると皆んなが喝采する。足を掛け損ねてすべり落ちるのがあると又喝采する。其處此處に卒倒者が出来る。巡查が駈ける。看護婦が走る。誠に以て騒ぎだ。

その中九時五十分になつたと見えて、分時砲の第一發が遠くでド、ンと響く。



その後ド、ン／＼は頻りにきこえるが行列は仲々来ぬ。

待ちに待った揚句に、すは先驅が見え出したといふ。僕等は皆んな前にして居た低い鐵柵の上へあがつた。上つたはいゝが少し身體の平均を失ふと落ちる恐がある。幸ひに、右隣の夫婦者の亭主が、柵の前へ立つて、その後の柵の上に立つた細君に肩をつかまへさして、僕にも肩を仰へて居れと言ふ。サンキユウの四五遍も繰返して肩につかまる。すると僕の左隣の女も、僕の左腕を捉へて、身體の釣合をとる。

来る／＼。

いの一番に居るのが參謀本部の一士官で、その次が近衛軍樂隊、次が士官學校代表者、次が倫敦聯隊十五大隊、八大隊、シイフオオス、ハイランダア五大隊、エルシユ聯隊六大隊、ノオフオオク、ヨオマンリイと順次行進する。いづれも小隊を代表に出したものと見えて、數は少い。僕は此處で葬列のプログラムを書く考は無。唯單に、その兵士の行列が實に立派だつたといふにとどめる。日本の兵士と違つて、こつちの兵士の服装は極めて華麗だ。深紅色の上衣に幾列かの金釦をひからし

て長い黒毛の帽を冠つたのもある。光りまばゆき鋼の胸甲をつけて、白毛の垂れた胄を冠つたのもある。空色の服に黒い肋骨をつけて、帽に黄な糸の房を垂らしたのもある。總て色が鮮かだから美觀譬ふるに物無しである。歩兵もあつたが、多くは馬上であつたから能く見える。次で異彩を放つて居たのは外國武官下その服装が紅黄白紫様々に異つて居るので綺麗とも何とも言ひ様が無い。その時つく／＼感じたのは、日本の大使館附一佐官の服装がその中で一番見すばらしかつたことである。

その次は外國海陸軍代表部隊で、埃太利騎兵、ブルガリア、瑞西騎兵、獨逸水兵、獨逸騎兵、葡萄牙騎兵、露西亞、フツサア聯隊等いづれも服装が違つて居るから、とりどりに綺麗だ。

それに次いでハミルトン中將、オリフアント中將等を首めとして將官連、キチナア、ロバアツの元帥連、海陸軍省大官、侍從武官連である。その次にノオフオオク侯を始めとして、侍從長、侍從武官長等綺羅星の如く續いて居る。肩章、大綬、勳章、佩劍、金モオルの光り、眼を射る許である。



エストミンスタア、ホオルよりパサントン停車場  
までは各國々王及び名代は騎馬なりき。



1、現英國々王、獨逸皇帝、コンノオト殿下

いよ／＼砲車に戴せられた御棺が來た。棺は紫の棺布を蔽はれて、その上に王冠と笏とリゲリアとが金光燦と光つて居る。近衛砲兵隊が曳いて居るのである。

棺車の左右は幾多の陸海軍將佐官で護もられて居る。  
棺車の後には近衛騎兵士官が王旗を持して居る。そしてゼチラル、ハミルトンが之に添ふて馬上にある。

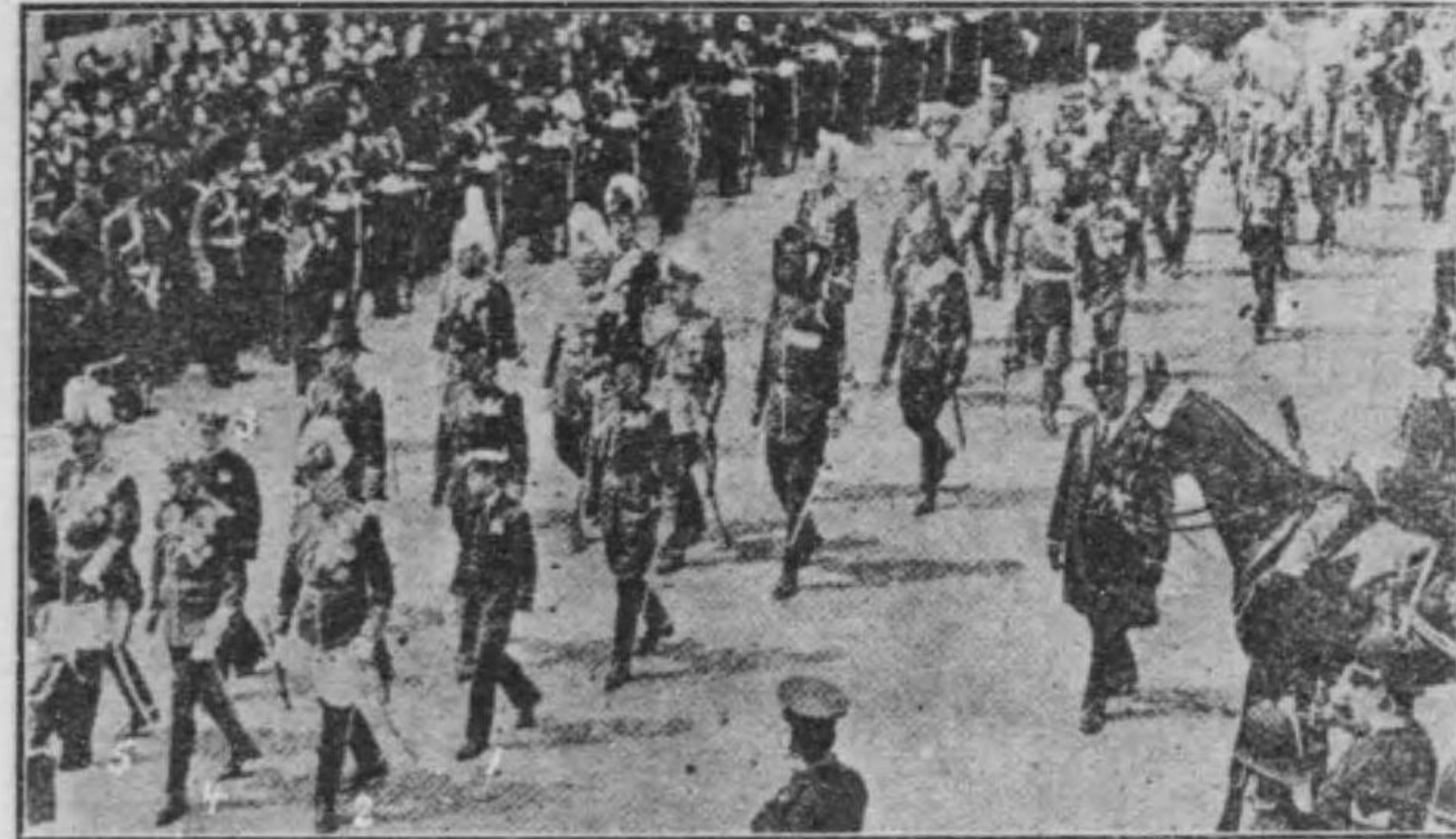
その次に無言の喪者があつた。一は故王の愛馬キルデア、一は愛犬シイザアである。その次がいよ／＼喪主たる現國王ジョオチ五世である。國王の左にはコンノオト公、右には獨逸皇帝ウキルヘルムが居られる。いづれも騎馬である。僕

は今日初めて有名な獨帝の英姿を近く拜したのである。

それに次いで三列になつて(左方から列擧すると)那威國王、希臘國王、西班牙國王、ブルガリア國王、デンマク國王、葡萄牙國王。土耳其皇太子、ベルジア國王、埃太利亞國王、伏見宮殿下、露西亞ミカエルアレキサンドロキチ大公、アオスタ侯。パソリアのルブレヒト親王、スバルタの一公子、ルウマニアの皇太子。ネザラントのプリンスヘンリイ、ウルテンベルヒのアルブレヒト公、セルキアの皇太子。普魯西のプリンスヘンリイ、ヘツセ大公、メクレンブルグ、ストレリツチ大公。サキソニイ、ジョオチ親王、サキセコオブルグ侯、ワルデックピアモント親王。埃及モハメットアリイ、支那載濤親王、瑞典チャアルス親王。シユレスキヒホルスタイン、アルベルト親王、コンノオト親王、シユレスキヒホルスタイン、ファイフ侯、カンバラントのジョオチ親王、バツテンベルヒのアレキサンダア親王、其他十八人のプリンス、いづれも馬上で徐々と従ふて居られる。畏れ多いが、壯觀とも偉觀とも言ひやうの無い光景であつた。  
その次にはまた黄金づくめの馬車が十二臺續いて居る。



#ソル停車場より#ソル宮殿への各國々王及び名代の葬列



1 皇太子 2 コンノオト殿下 3 第二皇子 4 現英國々王  
5 獨逸皇帝 6 伏見宮殿下

第一の御馬車には、露西亞先皇帝の皇后マリア陛下と、王女ロオカル、并クトリアの三人と同車して、先王の配アレキサンドラ陛下が御乗りになつて居る。黒いエメルを上げて、拜觀の群衆に對して絶えず會釋をして居られる。僕等外邦人すら、涙がこぼれる位勿體無く感じた。

第二の御馬車には、ノルエエ女王、現皇太子コンヲオル侯、王女メリイの三人と同車して現國王の配メリイ陛下が御乗りになつて居る。これ亦絶えず群衆に對して會釋をして居られるのであつた。

第三第四といづれも王家血族の女姓が乗つて居られた。確か第八の馬車に合衆國前大統領ロオズベルトが佛蘭西のビシヨンと同乗し

て居られたやうであつた。

葬列は警官、次いで倫敦消防隊で終を告げた。全長二十幾丁といふことであつた。

此の盛觀は終生僕の腦裏を去るまいと思ふ。

(四十三年五月二十日)

### 日英博覽會

#### 日英博覽會!

此の博覽會成立の來歴を知らぬ日本人々は、此の博覽會は日本政府、英國政府の協賛で開設になつたのだと思はれるかも知れぬ。處が決して左うでは無い。英國政府は何等の關係も之には有つて居らぬ。博覽會興行師キラルフイといふのが、今は殆どその所有財産となつて居る前年開設の英佛博覽會の建て物の始末に困つて思付いた博覽會で、日本政府は九十萬圓の大金を出してその建て物の一部分を借用して日本の出品をして居るに過ぎぬ。そしてこの博覽會の入場料



などは、悉く前記キラルファイイなる一私人の囊中のものになるのだと聞いて居る。悪く言ふと、日本政府は身錢を出して何の利益の分配にも預からず、この一人の興行を補助してやつて居るやうなものだ。勿論全權はこのキラルファイイなるもの、掌中にある。和田さんは其の下働きといふ體だ。エドワード七世陛下崩御に對して博覽會がジョージ五世陛下の御左右へ捧呈した悼詞もキラルファイイの名を以てして居る。開場前日本出品人の入場場のパスも悉くキラルファイイ一人の署名を有つて居る。和田さんの名前などは影にも無い。

斯んな次第であるから、英國の人民は何んだ、あんなキラルファイイ風情の興行物には出品するものか、と言つた態度を執つて居る。出品希望者が一向多く無い。日本に對して氣の毒だと言ふので、商業會議所からは、市民に對して出品勧誘の勸告状を出した。それでも市民は一向乗り氣にならぬ。尤も市民の乗り氣にならぬには他にも理由がある。それはブラッセルの博覽會だ。ブラッセルでは英國の出品は來觀大陸諸國人の注意を惹く。處が日英博覽會の見物人は主として日本の出品ばかりに注意する。出品しても多數の見物人の——英國人の注意は惹

かぬ。馬鹿／＼しいから出品せぬ、といふ氣になる。それは尤もな次第である。それで五月十二日開會式の筈のが、國王崩御の爲め延期になり、そしてジョージ五世陛下の思召とあつて葬儀も濟まぬ此の十四日から開會することになつたが、英國側の出品は豫定の四分の一も五分の一も陳列になつて居らぬ。六月の央過にでもならねば可なりと言ふ程にも揃ふまいと思ふ。

アキスブリヂの正門を入ると一號館から八號館まで賣店様のものがあるさうな。そして此のうち何處かに、日本の春夏秋冬の風景を現はした造り物もあると聞いたが、それは後日のこととして、横道から第十二號館(博覽會プロバアの)入口へはいる。ホオルの入口に

### 朱塗り金金具の大鳥居

が立つて居る。幅二間半、高さ三間はある。ホオルの兩側の高さ五間はある。壁には杉の木立が描いてある。此繪に巧に接續して、パノラマ風に木骨紙貼りの杉が左右四五本突つたつて居る。枝葉などは本物がくつつけてある。そしてそ



の杉の木立に沿ふて、同じく木骨紙貼り製の春日燈籠が二十臺づゝ左右に列んで居る。日本の田舎芝居の小道具に能く斯んな塗り方をしたのを見受けるが、胡粉のかけ様が少し白過ぎはせぬかと思つた。燈籠の間に處々立つた或は伏した鹿が置いてある。中央の通り路は碁盤目の石敷き。總て奈良春日神社樓門前の體とある。

此の四五間の石疊を行くと、朱塗欄干付の石段がある。石段を上つた處に春日神社樓門の模型(原物大)がある。Japan と記した扁額が掛つて居る。石段から樓門まで十二步。樓門を潜り抜けると、二間許り離れて正面に黒塗欄干付の高臺がある。一間半四方許りの高い硝子箱が載せてあるが、中へは何かの模型を陳列するゝのだらうと思ふ。

此の樓門の左右の廣い部屋に、壁に接して

### 日本の各時代を示す活人形 (Tableaux)

がある。先づ向つて右の部屋へはいる。

右の部屋の右側の第一番が神代である。Period of the First Emperor Jimmu, earlier

than 660 B. C. といふ札が掲げてある。前面一枚硝子、奥行一間、高さ二間幅二間はある大箱の中に立つてる人形は總て原物大で、衣裳其他總て其道の人が考證の上しつらへられたものゝことゝて、當時の様が彷彿せられる。油繪の背景には右方に草葺の小屋、そして木立の奥深く、白木の鳥居と素朴な小さな神殿が見えて居る。左方小川があつて、今しも八九人の男女が御鏡白木綿を吊るした真榊を獨木船の舳先に推し立てて川へ下ろさうとして居る。それを背に、正面に立たせらるゝは神武皇帝と皇后かと察せらるゝ。

次は奈良時代 (Nara Period, 710-784 A. D.) 背景は法隆寺。前景は小松の植はつた砂庭。小松が下には鳩が五六羽何かついで居る。人物は床几に腰して、向ひ合つて洞簫を吹いてゐると、箏篋を弾じて居ると二人。

次は平安時代 (Heian Period, 784-986 A. D.) 背景は應天門。白虎蒼龍の二樓が左右に見える。今し百官退朝の時刻。文官もあり、武將もある。カツギ姿の女も見える。右に左に向ふ牛車も見える。人物は供人二人召し連れた束帶の大宮人。今度は向ひ側の右の端へ行つて見る。



此處は藤原時代 (Fujiwara Period, 986-1159 A. D.) 遠景には右には池に臨んだ殿居。左は鶴首の船を浮べた池。人物は琵琶を弾じて居る貴人。その左右の宮女。宮女の後には極彩色の六枚折の金屏風が立つて居る。庭には黄菊白菊が咲き誇つて居る。

次は源平時代 (Genpei Period, 1159-1219 A. D.) 背景は左方遠く天守閣が見えて居て、今しも城門から旗さしもので幾百騎の甲冑武者が戰場へ繰り出る處。その先頭の槍をもつた二人が人形になつて居る。逆茂木を境に右方にも甲冑武者の人形が三つ。重藤の弓を片手に、片手に金扇をひらいて居る武將。八幡大菩薩の白旗を持つた隨將。白馬を曳き居る從卒。

次は鎌倉時代 (Kamakura Period, 1186-1338 A. D.) 富士の裾野の遠景で、卷狩を現はしてある。近景の芒枯蕨など巧に背景の油繪に接続してある。卷狩の騎馬武者は總て背景の油繪に收めてあつて、人形は鷹を手に据ゑて居る鷹司と、犬を引連れた從者ばかり。

今度は春日樓門の左方の部屋へはいる。

右の一番目にあるのが、足利時代 (Ashikaga Period, 1338-1573 A. D.) で能舞臺が出て居る。笛大小、後見、地謡も背景の油繪になつて居る。脇師もさうで、人形は仕手ばかり。仕手の足袋の皺だらけなのが眼障りであつた。

次は桃山時代 (Momoyama Period, 1583-1603.) 客殿貴人饗應の様。蒔繪の膳碗が美しくかつた。

次は徳川時代 (Tokugawa Period, 1603-1867 A. D.) 遠景は京都清水の舞臺のやうに思つた。近景は花爛熳たる櫻大樹の下で、花見幕を引き廻らして花見の宴の體。右方樹下に毛氈を敷いて、女許りの花見客がある。三味、笛、胡弓の合奏につれて、今一人の女が花傘かざして舞ふて居る。幕をそと引き上げて下郎が二人のぞき見をして居る。此等は總て油繪で現はしてあるが、人形は、今し蒔繪うつくしい籠(實物)から出て、樹下に立つて花を見上げて居る女二人。繪に現はれて居る櫻の木は十四五本ある。箱の中には實際の櫻の木も立て、これへも満開の造花がつけてある。それが旨く油繪の花に接続して居る。非常にうつくしい。

此の隣りは小さな箱で、四疊半の抹茶席が現はしてある。人物は切り髪の老人



と茶を侑めて居る高島田の娘だ。

今度は向ひ側を見る。向ひ側は足利、桃山、徳川の三期に對して一面に現代 (Present Day 1868 A. D. —) で、日比谷公園日英同盟祝賀會の光景。遠景には遠く宮城の御濠の松が見えて居る。中央に日英の國旗幾つか立て連ねた大緑門が見えてその左方が祝賀會場らしい。緑門々外には、祝賀會さして走せ來る馬車が見える。角帽袴羽織の大學生、裾模様三枚重ねの令嬢貴婦人、蝦茶袴の女學生、紺足袋紋付羽織の書生、女教師につれられて銘々日英の國旗を手にした小學生徒の一隊等も見える。會場には勳章金モオルの陸海軍人、英國人、紳士、淑女がうちやくして居る。緑門からは、櫻花と兩國々國を染め出した實物の小提燈が四方へはり渡してある空には、火花が上つて居る。非常な賑ひの光景だ。

以上の Tableaux は何れも上出來だ。そして何れも苦心の出品に相違無い。殊にすぐれてうつくしいと思つたのは徳川時代の花見の景であつた。

此處を左へ廊下を通つて第十三號館といふへはいる。十三號館は

#### 日本各府縣の美術工藝品

だ。中央の大通りを右側から見てあるく。

第一番は大阪府出品の緞通だ。價は廉いのかも知れぬが、西洋のいゝのを見慣れた僕等には一向感心が出來ぬ。

その先きの方に名古屋出品の扇子がある。いづれも西洋人向きの、彩色の手の込んだもので、陳列の仕方も上手に出來て居る。これは屹度見物人の眼を惹くに相違無い。

その先きには織物縫物がある。京都の西村、高島屋などが大きな區域を占めて居る。刺繡の屏風、袋物、衝立、窓掛等に中々いゝのがある。これも確かに西洋人の眼を惹く。

場の中央、右側に京都館といふのがある。彫刻美くしい白木の門をしつらへて、門に續く塀の外に銅器磁器等陳列してある。門は西本願寺勅使門を模したのだといふ。

この先きには染物の出品が多い。縮緬が多い。西洋人向きのものは少いやうだが、見た眼に美しいこと夥しい。



行くうちに此の十三號館の出口へ来てしまつたから、今度は後と歸りして右側をすん／＼見て行く。

出口に接した右側の第一番目に三井の陳列所がある。その裏に藤棚付の茶室が設けてある風だつたが、格別眼を惹くものが無かつたから、その次へ進む。

羽二重の陳列が多い。石川縣が中央の大通に面したい、場所を占領して居る。場所は頗るいゝが、出品の縞羽二重につけてある説明書に

此縞羽二重に付御注文又は御照會に相成り度華客諸者は……貴答申上ぐべく候敬白

葵機業場主男爵 ○○○○

とある。そして英語での説明書も佛語での説明書も見當らぬ。博覽會見物人に日本語の分るものは萬人に一人もあるまいのに、氣が知れぬ。

石川縣の裏通りに福島縣出品の白絹類がある。石川縣の方はたゞ羽二重が出てあるといふ許りで、陳列に何の趣向も無い。福島縣の方は花籠に菊、薔薇、藤、百合等の造花を盛つて、それを陳列箱の中に置いて居る。白絹の眞つ白なのと對照

して、殊に人目を惹く。つい近寄つて見る氣にもなる。

僕は何も石川縣の惡る口を言ふのぢや無いが、全體日本人の出品にはこんな具合に何の趣向も無しに陳列してあるのが多いし、説明が無かつたり足りなかつたりして居るのが多い。

京都の勅使門の眞向ひに高島屋出品の一區劃があり、京都の筋向ひに大阪の何んといふ建て物か知らんが、ゴテ／＼塗つた門とも家ともつかぬ大きな建て物がある。その隣りに同じ大阪の、唐縮緬屋の陳列所がある。手摺付きの長廊下風な座敷へ、派手な友禪を着て、花笠を持った人形が十人ならべてある。花笠踊りを踊つて居るのだらう。その人形の後ろは金梨地かなんかの唐紙がすらりと立つて、人形と人形の間、手拭掛け様のものを置いて、それへ友禪を垂らしてある。これは確かに人目を惹く。

その一二軒さきに佛壇屋の出品がある。金ビカ／＼でうつくしい。

元の入口へ近よつたから、その佛壇屋の後ろから裏通りを出口の方へ歩いて見る。矢鱈に彫りのしてある椅子、繪模様入りの産扇子、繪日傘などある。繪日傘



はうつくしい。これは屹度大賣れだらう。

此の十三號館は、中央の大通りは二間幅はあらうが、裏通りの小道は幅一間半に足るまいと思ふ。狭すぎはせぬかと思はれる。

出口を裏の廊下へ出る。石橋を渡ると、十九號館といふのがある。

十九號館は餘り大きい建物では無い。はいつて左が

### 滿洲朝鮮部、右が臺灣部

だ。全體に大きくも無い建物なのに、其中へもつて来て矢鱈に小さい建物をこしらへてある。青、紅の塗り色コチタイ狭つこい建物ばかりで、特に人目を惹くやうなものがない。壁には滿洲朝鮮風景の大寫真が無暗と吊るしてある。それもつと上の方に吊るしてあるのが多いので、何處の何の寫真だか分りかねるのが多い。滿鐵が自慢で外國人に示さなきやならぬ石炭の大塊が、惜しいことに隅つこに小さく踞んで居る。臺灣部も、色んなものが矢鱈に陳列してある。木材がある、籐椅子がある、バナマ帽がある。勸工場の出際に能く斯んなものが陳列してあるが、丁度あれだ。

滿洲部の奥正面には支那風の樓門がつくつてある。小さすぎる。臺灣部の奥正面は左右二つに仕切つて、右には茶摘女の人形を置いて茶園の景が模してあり、左には山林を遠景に男女老幼の土人の人形を前景にして蕃地の景が模してあるが不出來だ。

十三號館から二十一號館へはコリドアづたひで行ける。その廻廊の左方十三號館の左り裏に

### 日本庭園

がしつらへられて居る。區域は餘り廣くも無いが、さして狭くは無い。庭を限る柵際に、高さ六七間の板塀を設けて、これにバナラマ風に庭園の遠景が描いてある。長さ百間もあらう。随分大きなバナラマだ。晝と實際の庭との接續具合も巧く出來て居る。

庭には池がある。池には反り橋が架つて居る。橋を渡ると鳥居がある。鳥居を越すと小高みに何の社か小さな祠がある。右に池に臨んで純日本風の瓦葺の家がある。池へは山からの瀧が落ちて居る。前述の背景には山道も見える。松



山も見える。松の木の間に五重の塔も見える。京都の近郊へ行つた氣がする。然し日本庭園其ものは遺憾ながら僕には不出來に見える。第一樹木が若いしそして西洋風のが随分多い。そして石が白くてそして石山から切り出して來た許りの石で、イヤに尖んがたり角だつたりして居る。雅味なんでもものは微塵も無い。日本庭園に於る石の美といふものはこれぢや少しも紹介が出來て居らぬ。俄か造りだから仕方が無からうが如何にも残念だ。

廊下づたひに第二十一號館へはいる。館前は洋風の庭で、ロドデンドロン許り植はつて居る。こいつが皆んな咲いたら美しからう。第二十一號館は

#### 天然物許りの陳列館

だ。入つて右方が日本部、左方が英國部だ。

英國部側へ入つて見たが、鑛油だの、毛絲だの陳列した處がある計りで、まだガラ明きだ。あと返りして日本部の方へはいる。

右側の一番目に古河鑛業會社の出品がある。陳列の寫眞も旨く配置してあるし、區域も緩くりして居るから、臺灣部、滿洲部のやうに見にくくは無い。鑛山切斷

模型も人目につく。

その向ひ側が農商務省の出品で、入口の左右にタブロオがある。左側のは遠景に田植の景を現はして、春の野景色になつて居る。右は稻刈を遠景にして、右に農家の一端がつくつてある。庭には柿の木もある。鶏も居る。ヒョッコも居る。

その農家の庭先きで米を米俵につめて居る人形が出してある。

入口をはいると向ひ正面の壁に接して冬の富士の見上げる許りの模型が眞綿で出來て居るが、いやに斜面の急な富士だ。

その横の方に富士形に米俵が積んである。日本産各種果物の罐詰を並べた棚もある。米、麥の罐詰を並べた棚もある。少し行くと、品川沖海苔採取場の模型もある。漁船の模型をあつめたスタンドもある。濱名湖の模型もある。壁には地圖やら、寫眞やら、表やら一パイに掛けつらねてある。

隅の方に廣島縣の出品だつたと思ふが、牡蠣養殖の實況を示した澤山の寫眞が出品されて居る。寫眞が餘り大きくもない上に、その額面の下にぶらさげてある説明書が日本文だ。尤も英語の説明もその日本文の左横について居るが、日本文



は大きな字で書いてあつて、英語の方はタイプライターで細かく書いてある。十三號館の石川縣出品同様、愚の至りである。

出口に近く右方に麥酒、正宗などの出品がある。陳列の仕方がまづい。その前の處に日本罐詰會社が出品して居る。これは塔をつくつて、その塔へうまく罐詰物を積み上げて居る。少しは人目を惹かう。然し説明書きは眼につかぬ。

これと相對して御木本の眞珠の出品がある。スタンドは大きくは無いが、物が物だけに、これへは洋人も眼をつけるだらうと思ふ。御木本の後ろに横濱魚油會社の魚油の出品がある。これは旨く色彩を應用して巧に陳列してある。此の近邊では群を抜いて居る。

その他此の館内には漁具もあり、繭もあり、毛皮もあり、魚介もある。然し何れも説明書きの貼り札が小さかつたり、大きくても字が小さかつたり、字は少し大きくても不十分であつたりで、頗る物足りぬ。

此處を出て、今度はその先の大きな四十七號館へはいつて見る。

入口に Japanese Education and Industry とある。はいり際に

### 文部省の出品

がある。

右側のいの一に大森博士の地震計、田中館博士の強震計、今村氏のセイスマスコオプなど出品してある。入口だけに殊に人目を惹く。日本の自慢物の一つを第一番に陳列したのは其の宜しきを得て居ると言はねばならぬ。

右の方へ行つて見る。すぐ眼につくのは千八百年より千八百十六年迄伊能忠敬の使用した測地器具と貼札鮮かに讀まれて、原品が出品されて居る。これも確かに學者の眼を惹く。その右横に昌平橋の模型がある。壁には日本古來著名の人物の肖像畫、修身掛圖など隙間無く掛け並べてある。日本武士道を示す繪圖は丁度眼の高さ少し上に横並らびになつて居る。貼札の説明が、どれもこれも字體鮮明に大きく、そして簡單に出來て居る。頗る僕の意に適つた。

伊能忠敬測地器具の左の方に大學の出品がある。校外の寫眞やら、工科大学々生のワアタやらある。學士會院出品の千八百二十一年完成の二十一萬六千分の一の日本圖がある。これも確に人目を惹く。



地震計の反對の入口からはいつて左側の角には女子職業學校(?)出品の大花籠がある。使用した糊が悪るかつたのか、折角の花片や葉に大分微が生えて居る。惜しいことだ。

その左の方には、美術學校、工業學校、農學校その他各種の専門學校、師範、中學、小學、幼稚園の出品がある。出品の價格表が圓で記入してある。これは磅志に換算して記入すべきであつたと思ふ。

何處の出品か忘れたが、衣物着た人形が二つ出品されて居る。一つは絹羽織袴着の紳士、一つは紋付の空色縮緬三枚がさねの細君姿だ。共に高さ一尺四五寸位、その説明書のうちに One half of natural size とある。一寸冷汗ものだ。

東京教育博物館出品に雛人形と五月人形とがある。雛壇前に坐つて居る令嬢姿の人形が短冊を手にして居る。その短冊に認めて居る歌の英譯が、わざ／＼色紙に認めて示されて居る。しかし雛人形五月人形その者の説明は無かつた。手落ちと言ふべきである。然し概して言ふと文部省の出品は、その陳列の方法も、説明書きも、上出来だ。その道の外國人にゆつくり來て見て貰ひたいものだと思ふ。

た。それから文部省は日本現時の教育狀況を小冊子に認めて、之を來觀のその道の人に頒つことにして居る。いゝ思付である。

文部省出品部を通り過ぎて、真中の通路を行くと、右に

#### 東京府出品區域

がある。上野東照宮の模型、東京市模型、水道模型、淀橋淨水場模型、羽村引水場模型が出してある。模型の陳列も餘り接近して居らぬし、四方の壁へも餘りごちゃ／＼寫真など數多く出して居らぬから、却て見る人の注意を餘計に惹くかと思ふ。

その次は右が牙彫や鑄物だ。その次は陶磁器。

陶磁器の中で眼立つのは矢張り七寶と九谷とだ。獨逸製の模造日本陶器を日本陶器だと此迄思つて居た西洋人は此處を一寸でものぞいて見たなら、屹度アツと感服するに相違ない。

この左側には漆器、蒔繪物などが陳列されて居る。

通路の正面に山林局出品の白木造りの日本座敷が建つて居る。座敷は十五疊敷かと思つた。承塵、違棚、高欄、いづれも結構な木材で造つてある。天井は黒塗の



合天井で、繪板が嵌めてある。  
此の座敷の右前に

### 日本郵船會社の出品

がある。四方低い竹垣を繞らした庭園で、その庭園には右方十本許りの櫻の大樹が植はつて居る。八重の櫻が散りも初めず咲きも残らずの満開で居る。造花とは思はれぬ上出来だ。眼もさめる許りだ。左の方には楓樹が七八本植はつて居る。これはまた紅燃ゆる許りである。そして櫻と楓の根本には庭をめぐつて菊花壇になつて居る。庭の中央には高い臺を置いて、それに郵船會社使用船の大模様が唯二つ載つて居る。出品はそれぎりだが、郵船會社なるものを西洋人に廣告するといふ點では非常の大成功だ。此の館へはいつたもので此の一區域を見逃すものは決して無い。それから言ひ落としたが、模型を載せた臺の下には又一面に菖蒲が植ゑてある。竹垣には朝顔がからましてある。實にうつくしい。それから臺の上には棚から紫藤が垂れて居る。これも實にうつくしい。向ひ側に大阪府と京都府(?)の出品區劃があつたが、何んだかごちやくして居

て、入つて見る氣にならなかつた。

その後ろの方に名古屋出品の提燈やら、ボンボリやら出して居る處がある。これも一寸眼に立つ。

山林局出品座敷の後ろの方に、柳行李や、剝製の鳥獸が出品になつて居る。それを通りぬけると、英國出品の機械部になる。

これは見ても分らぬから、真ん中の道を走るやうに通りぬけて四十九號館の出口から庭へ出た

大分疲れた。

僕と同様、疲れたらしい顔の東西洋人が庭の椅子に大分腰かけて居る。僕も腰かけて休む。

相撲取が通る。日本で見ると同じ服装で、毛脛を見せながら、下駄穿きで濶歩して行く。僕の横に休んでた西洋人が

### 『日本にも大きな女』

が居るな。然しみつとも無い顔だなあ』と話し合つてたのは滑稽だつた。



それから暫く間を置いて今度は眞物の女が通つた。白フンをちらつかせて宮重大根程の——そして大根程に白からぬ——眼脛を見せるのだ。黒襦子の襟のかゝつた半纏を袂衣紋に着て居て、首筋の黒いのが殊に目立つやうに、白ハンケチを襟へまとふて居る。そして兩手を袂へ突つ込んで、屈み氣味に日和下駄でキャラコロと通る。之に行き合ふ西洋人で、立ちどまつて振り顧みぬものは一人も無い。いやになつてしまふ。

四十九號館の後ろの方は

#### 一體に餘興物

ばかりある。旋回鐵道 *Spiral Railway* がある。Flip-flap がある。何んとか館、彼んとか館とある。その前をどん／＼行くと、もう會場の後ろ左隅になる。今せつせと藁葺の小屋を七つ八つ建て、居る。遠見に日本風の二階屋が出来て居る。これも見世物であらう。

この見世物小屋の前に小さい區域に、又一つ日本庭園が出来て居る。小徑を行くと石橋がある。石橋を渡ると小高い島になつて、その島の上に鐘樓のやうな

建物がある。此島を取り巻いて、池とも川ともつかぬものがある。そしてそれに臨んで小さな釣殿が二つ出来て居る。庭に植込んだ樹木は、丈の四五尺位のもの許りで、檜、楓、躑躅、それに竹(枯れかゝつた)といったやうなものだ。こゝの庭も、切り出した許りの石が、矢鱈にごちや／＼置いてある。少しも趣味が無い。

此の庭園よりも、もつと後ろの、場内でのすんどの場末に茶業組合の喫茶店がある。不利な處へ設けたものだと思ふ。

その先きの方にアイノ人陳列所(?)臺灣土人陳列所(?)があるらしい。仰山な背景の *mountain-railway* もある。*rilleringe* もある。*wiggle-waggle* もある。まるで淺草公園の六區だ。

會場の右奥隅に近く、大きな競走場 *Stadium* がある。

こんなものは何れその中のぞいて見ることにして、前と反對の側を逆もどりする。確か二十一號館と對立して居る二十六號館といふのが

#### 美術館

になつて居る。Fine Art Palace とある。



正面階段を上つて入ると入口が彫刻だ。大方英國側の出品許りである。品数は二十に足りぬと思つた。

向つて左の部屋へはいる。此處が日本出品の油繪である。和田三造氏の南風等大方は一度拜見した記憶にあるもの許り、數も至つて少い。

その左の數室が日本畫に當てゝある。屏風もあり、掛物用のもある。此の日本畫室の奥に、佛畫や古畫の室がある。然しもう足が棒のやうになつてしまつた。後日を期して出てしまふ。

此の美術館には、入口の彫刻物の次ぎに、日本古建築物の模型が出品されて居る。法隆寺、金閣寺、應天門、平等院、陽明門等。

右側のキングには英國側の畫が大分あるらしい。

それから更に表の方へ後と返りするといふと、最初の Tableaux のある部屋に連續した十五號十四號の二館がある。園藝ものが陳列してあるらしかつたが、これも後日と見ずにはしまつた。

博覽會の性質は本文冒頭に述べた。が然し假令一私人の計畫になつたものであつても、日本の政府と出品者とは多大の費用をかけて居る。そして日本の事物を英國人に紹介するには又と得られぬ好機會である。僕は此の博覽會の成功せんことを希望してやまぬ。眞に一切兩國側の出品の揃ふのは六月の半ば過ぎでもあらうかと思ふから、その折には又ゆつくり見物して詳しく御通信することにする。

(四十三年五月)

### 博覽會見物追記

今日——五月十六日——は表門から入つて見た。ホイトマンデイとあつて中の人込みだ。

東大寺の程の仁王が櫻の下に突つたつて居る。一番初めに眼に付くのはこれだ。

その次は左右とも賣店で、陶磁器、漆器、牙彫など即賣して居る。

五行に仕切つた階段を上ると、今度は植木屋だ。ドヲオフ、ドリイ／＼で、随分の人だかりだ。



その次が鐵道局の出品で、入口に宮島の模型がある。左右の壁を、客車を横から見た體裁に塗つて、その客車の窓に當る處へ日本各地の風景風俗の寫眞が出してある。寫眞は大きくもあり、色も着いて居り、出來も善いので頗る人目を惹く。日本の風景風俗を紹介するといふ點では、確に成功して居る。

その次は、狭い長い部屋で、左右バノラマ式に日本の雪景が示されて居る。日光だといふが日光の何の邊か分らぬ。上出來とは云へぬ。

次の大きな部屋には四方の壁にデオラマ式の覗き目鏡がずらりと續いて居る。風景と風俗とが多いやうだつたが、覗かすに行く。

次は又狭い長い部屋で、こゝには秋景色がバノラマ風に出來て居るが、野山の様子も家屋も支那西洋折衷風で、日本とは受取れぬ。

次の部屋が又もデオラマ式覗き目鏡。

次は英國の各鐵道會社の出品で、こゝも寫眞が多い。

次が英國海軍出品。

次が英國サイエンス、セクション。共に取り立て、言ふほどのものが眼につか

なかつた。

次が英國陸軍出品。砲車や小銃が眼につくばかり。

段を下りると、かの春日樓門になるのだ。

春日の樓門をはいつた處に、何か飾られたかと思つて、舞樂の羅陵王の舞人の姿であつた。説明が不完全だから外國人には、何の何だか分るまい。

今日もしみじく感じたが、日本の出品は總じて説明が殆んど無いと言つていい。だから西洋人は『オオブリッチイ』とか、『ワンドフル』とか、『オオナイス、インヂイド』とか言つて見て居るが、何を現はして居るのか、何で出來て居るのか、値段はいくらかと尋ねやうとして見ても、貼札が無い。あつても字が小さくて讀めかねる。

四十七號館の漆器の處で、僕の連れて行つた英國人が『こりや間違でせう』といふから、『何が』ときくと、『貼札の値段が十志四片とあるが四は六の間違だらう』といふ。別な處に八志七片とあつたら、これも八志六片の間違だらうと言つてた。貼り出した人は、日本での値段を正直に換算してつけたのであらうが、こつ



ちの人は四片や七片のハシタゼニに慣れぬので可笑しく見えたのだらうと思つた。然し斯んなのはまだいゝ分だ。Iyenaとか Gyan Eosenとかついで居るのがあつた。多數の西洋人には判るまいと思ふ。

農商務の出品に果物の圖誌がある。日本御自慢の柿が大分出て居るが、學名と和名とが記るしてある計りで、一向説明が無い。も少し親切であつて然るべきだと思ふ。

こんなことを言つた人があつた。三菱や、藤田組や、古河から、鑛山の寫眞精鍊所の寫眞、模型、鑛物いろ／＼と出て居る。日本の鑛業の現況を示すには遺憾無しである。處が英吉利には石炭はあり銅はある。あり餘る程ある。だから折角こんな出品をしても、それで購客を得るといふ譯には行かぬ。たゞ日本鑛業の進歩の非常なるを外人に示して彼等の警戒を買ふに過ぎはしまいか。博覽會後は、日本の技師などが鑛山視察に行つても、精鍊所や器械を見せないやうになりはしまいか。かういふのだ。如何さま尤もな次第で、餘り自慢に出品しない方がよかつたかも知れぬ。

今日は臺灣滿洲館と對立して居る日本陸海軍部の建物へ入つて見た。上野戦争、西南戦争、日清戦争のタプロオが一番の人ばかりだ。説明は農商務出品のよりはやゝ親切のやうだつた。

會場後方の餘興場(?)は大變な人だ。

糞草の汚い小屋の中で股引半纏で桶屋が桶を造つたり、傘屋が傘を張つたりして居る處がある。見料一人六ペンスだ。外國人は子供が動物園の象や虎でも見る氣ではいる。そして何れもその住居の狭苦しい汚ないのに驚く。妙チキリンな衣物に驚く。『チヨツブ、スチツキでポイルド、ライスを食ふ處も見せて呉れるといい』なんど言ふ。

奈良春日門の横のヒストリカル、ダプロオで『現今の日本』を見た西洋人は、ここに現はれて居る『現今の日本』の一部とそれと比較して、その懸隔の餘りに甚しきに驚いて不思議に思つて居る。どつちが本當かと聞かれると冷汗が流れる。アイヌ小屋、臺灣人小屋、共に見世物だ。

それから會場内で随分變挺な衣装をした日本人に出會ふ。今日も斯んなのが



あつた。羽織袴無し、角帯で、メリヤスのバツチ穿きで、御尻の見える許りに高く尻からげをして居て、そして山高帽を大阿彌陀にかぶつて居つた。僕の連れて行つた英國人は、たまらなかつたと見えて、吹き出して笑つた。僕も餘儀無く笑つた。すると「君が笑ふ程だから、僕の笑ふのも無理は無い。失禮だつたが許して呉れ」と詫びた。いやになつてしまふ。

四五日前に、倫敦の或る新聞に斯んな記事があつたといふ『シルクハットの價値が日本人の爲めに下落した』と。ブライスマチや無くて、そのブルウが下がつたといふのだ。失敬な記事だが、或る度までは許容しなきやならぬ。ことほど左様に各種各階級の日本人が倫敦に入り込んで來たのだ。

(四十三年五月十六日)

### カンタベリー往復

チヨオサアの「カンタベリー、テメルズ」の「カンタベリー」！英國第一位の寺院のあつたカンタベリー！往つて見たいとは豫て思つて居つた。

行くには大學の講義の無い日でなけりや都合が悪い。雨降りの日では都合が悪い。風起した日でなけりや都合が悪い。都合のいゝ日が僕には是迄無かつた。

處が昨日の土曜日は、どうした間違か七時に眼が覺めた。前日は一日雨だつたが今朝は曇つては居るが降りさうには思はれぬ。すは今日こそと朝食もそこそこに宅を飛び出したのが午前八時半。

ハイベリー停車場前迄歩いて其處からホウボオン迄電車。セント、ポオルス寺院に遠からぬホウボオン、グイヤダクト停車場へ飛込んで、カンタベリー、イイストへの三等片道切符を買求める。此の價五志二片、邦貨の二圓五十八錢だ。カンタベリー經由ドオヴァ行の汽車は九時四十五分發だといふ、時計を見ると、まだ九時十五分だ。そこでベンチに腰を下ろして、僕等の旅行虎の巻たるベデカアをポケットから出して讀む。

カンタベリーまでの里數は六十二哩、一時四十五分乃至二時間を要すとある。途中メドエエ河を見逃がすまい、チャタム町を能く見やう、カンタベリー停車場へ下



車して直ぐ停車場前のドンジョンが岡を見落とすまい、左へカスル、ストリートといふのを真直ぐにさへ行けば寺門へ行き着かれる、その門前にマアロ記念像がある、カシイドラルの見物が濟んだら、セントオオガستن學校内の古跡を尋ねて、それからセントマアチンス、チャアチへ登つて見やう、など、ベデカアを讀みながら私かに心積りして居るうちに、早や切符を切り始める。

定刻に汽車は南を指して動るぞ出る。合乗は獨逸人夫婦に英人二人。十人詰のだから頗る樂だ。そして座席は日本の二等のよりも坐り心地がいゝ。汽車はやがてテムズ川の鐵橋を渡る。六月も央ば近いのに、今日も淡くフオツグがかゝつて居る。川下のサウサアク橋、川上のヲオタルウ橋は見えるが、その次の橋々は見えぬ。左手に、幾層の家々を抽んでセントポオルスの大殿堂は聳えて見えるが、それに遠からぬ大火紀念碑は、これ亦霧で朧氣である。川にはいつもながら荷船が幾十艘と上り下りして居るのが見られた。

汽車は急行だから、小さな驛はすん／＼抜かして行く。エリフアント、アンド、カスルといふ停車場には、郊外遠足でもするのか、八つ九つから十二三歳位までの小

學生徒が、教師に率ひられてプラットフォオムに整列して居つた。ロオカルの汽車を待つて居るのであらう。いづれも小さな手籠や、カバンや、ハンケチ包みを提げて居る。おつかさんの心盡しのサンドキツチや、ケエキや、林檎密柑などが入つて居ることであらう。衣て居る物も晴衣に屬するものであらう。皆んな嬉しげな顔をして居る。素通りする僕等の列車に對して、手を振つたり、麥藁帽を振つたり、ハンケチを振つたりする。その可愛らしさに、何とは知らず、僕は涙ぐんだ。僕の小學時分には汽車は固より無かつた。然し遠足といふことはあつた。明日は遠足だと申渡されると、その夜は、いくら寝やうと思つても眠むられなかつた。その頃牛肉は高價物だつた。其高價な牛肉を十五匁か二十匁か細切りにしたのを煮て、それに筍の蟬の處、それに水露の煮染めか何か添へて竹の皮包みにして貰ふ。お結びには胡麻鹽がかゝつて居る。春の遠足の辨當はいつも斯んなだつた。そして身體に合はしては大き過ぎる此の辨當包を襌に背中へ背負つて、集合の時刻に二三時間も早く學校の運動場へ行つたものだ。樂しかつた。彼等も今頃は嘸かし楽しいことであらうなど、考へて居る中にヘルン、ヒルといふ小驛で汽車



は止つた。キクトリアから出た列車が向ひ側のプラットフォームに居る。これを僕等の列車の前部へ聯結して、それから、ひた走りに走る。

クリスタル、バレエスの長トンネルを抜けてからがいよいよケント州の田舎になる。八九月頃になると、此邊の野鳥はホップで綺麗だと聞いて居る。畑は日本の様に區劃しきりが小さい。大波のやうな高みはあるが、際立つた岡が無い。このたゞ広い野鳥が一面にホップの黄金色の花で蔽はれて居る光景を想像して見る如何にも綺麗に相違無い。

ケントは林檎と櫻實とがまた名産だ。だから處々林檎畑や櫻畑もある。雑草無しの芝生に、幾間置きにか實に規則正しく果樹が植ゑてある。そしてその果樹畑が幾町歩に及んでるのもある。到底も川崎の梨畑のやうな小つぼけなもんぢや無い。

汽車はベケナム、プロムレエ、ピクレエ、スワンレエなどいふ驛を素通りする。このプロムレエの南二哩半許りの處にヘエス、ブレエスといつて、キリアム、ピットの誕生地があるさうな。チャタムが亞米利加問題に就て大演説をやる前に、フラン

クリンが訪問したことがある。それも此のヘエス、ブレエスであつたさうな。それから二哩許りの處にまたシイザア、キャンプといつて、羅馬人移住の遺跡があるさうな。

汽車はなほもフォオカム、メオフラム、ソオル、ストリート素通りする。やがて前方に、線路と十文字に、野畑の間に一條の川が隠見する。メドエエ河なのだ。此のあたり、線路の土手に蕨が密生して居る。他の處では、マアガレットやバタカッブが生えて居て、たま／＼低い灌木もあつたが、故意と造つたものか此邊は綺麗に蕨ばかり生えて居る。金澤に居た昨年は、僕は蕨狩には四五度も行つた。獲物はいつもあり餘る程あつた。珍らしからうと思つて、その頃東京住居の父母へ鐵道便で送つたほどだ。金澤の蕨はいゝ。こつちの蕨はどうか知らん。蕨摘みに此處までは遠い。送るには餘りに遠い。しかも僕が當地へ來ることになつた爲めに、呼迎へて東京へ住まはしめた父と母は郷里へ還さなきやならぬことになつた。それも亦都合で此夏は、父ほどは、秋田に幾十日か暮らすのださうな。妻は東京に居る。弟は佐世保の艦ふねに居る。相訣るゝ時、蓮の實の飛ぶや東にあるは西と詠ん



だ時の光景が眼に浮ぶ。

それまでは野原に隠見して居たメドエエ河が野の平らなものと土手が低いので、左右ともうねりくねつて何處までも續いてるのが見えるやうになる。蕪村の春の川山なき國を流れけりだ。碧梧桐の春の川末は霞みてうねりけりだ。それに帆船のあちこち浮んでるのが見える。

川上に、右に、ロチエスタアの寺院と城とが見える。上ばかり見えて、下は青葉に埋れて居る。俳句には陳腐だが煉瓦堅く厚く積み上げた城の塔の、幾星霜の風雨に曝されて黒ずんで居るのに、オオクか、バアチか、根本から青葉の繁つて居る樹林が之を取圍んで居る實景は壯大であつた。

汽車は鐵橋を過ぎて、倫敦を去る三十四哩餘のチャタムでやつと停車した。十時前だ。

チャタムとロチエスタアとはもはや連續してしまつて居る。ロチエスタアは古風な静からしい町だが、チャタムは不整頓な騒々しげな町だ。造兵廠や兵營がある。河上に堡壘もある。千六百六十七年の戦争に和蘭の艦隊は此處まで侵入

したのでさうな。

汽車は此處を出てから、例によつて、ニユウ、ブロムトン、レイナム、ニユウイントン、シツチンボオンなどいふのを素通りにして、フェツバシヤムで二度目の停車をする。

それまで合乗の僕等五人は互に口一つきかずに居た。尤も獨逸人夫婦は向ひ合で獨逸語で何かたま／＼聞いたり答へたりして居たが、此處で停車した時に、亭主の方がカバンから繪葉書やうのものを取出した。横目で見て見ると、海戦が描いてある。軍艦が二三艘に水雷が四五艘、互に砲火を交へて居る様だ。空中にチエツペリン六と記るされて居る飛行機も飛んで居る。飛行機からも軍艦へ輕砲を打つて居る。何をするのかと見て居ると、吸ひさしの紙巻煙草の火を、右手に書いてある軍艦の艦首の大砲の口へつけた。するとピチ／＼と一直線に斜め左へ火が燃え進んで、チエビリンに届どいたと思ふと、バチツと音して飛行機が燃えくだけた。この獨逸人といふのはもう五十は越して居たが、こんな子供らしいことをして喜んで居る。見て居た細君も面白さうに笑ふ。僕等三人もお附合に微笑



む。すると今迄獨逸語の亭主が英語で、面白いでせう。あなたに一枚あげませうか」と、僕等三人に一枚づゝ呉れた。これが縁で、今まで淋しかつた車室は少しは相互の話で賑かになつた。汽車がその次の次のカンタベリーに着いた時僕一人は下車した。十一時卅五分だつた。

カンタベリーはストユア河に接した、人口二萬四五千の小さな町だ。町は小さいが、六世紀以來アアチビシヨツプの居所として世界に名を知られて居る。ヨオクにも大僧正が住居つて居るけれども、此處の大僧正が英國僧侶の首位を占めて居るのである。六世紀の末近く、女王ベルサは此處のセントマルチンが丘にさやかな耶蘇教の教會を建てた。異教徒を改宗せしめんとしてセント、オオガスチンが羅馬から英吉利へ來た時此處に滞在した。國王エセルベルトが一萬の人民を率ゐて耶蘇教に入つたのもセント、オオガスチンの力に依るのである。そんな來歴のある處ではあり、大寺院が建築せられて大僧正が住居ふことになつたので、チヨオサアの昔このかた巡拜者の絶え間が無いのは尤な譯である。

停車場を出ると、眞向ひに道路から三四十間離れて所謂ドン、ジョンが岡がある。その二方に残つて居る古い城壁は、石積み頑固なもので如何にも古風だ。岡そのものは小さな塚やうのものだつた。でも高さが十三間餘りあるのださうな。出がけに案内記で覺えて置いたやうに、少し左へ行つて、右へカスル、ストリートを何處までもと隨いて行く。四五町行くと、マアシレイ、エンといふ小路になる。町幅の狭い具合や、家の構造が、何となく伊太利のゼノアを懐はしめる。

此の小路を抜け終ると、眞向ひに、寺院境内へ導くクライスト、チャアチ門が見える。その古びさ加減が如何にもいゝ。所謂直立式の門で、幾多の人物の浮彫がそここゝ、缺げかゝつて居る。

此の門の前の廣場の中央に詩神リリックの大きからぬ銅像が立つて居る。それは此のカンタベリー生れのクリストファア、マアロオ——沙翁前の大劇曲家——

記念の爲めに建つたものだといふ。

寺門を潜ると眼前にカシイドラルが聳えて居る。直立式の宏壯な建物だ。といふより外に言ひ様が無い。建築に就いて無學な僕は實際かう言ふより外に仕



方が無い。

元と此處の寺院は、エセルベルト王が、その宮殿と共に、セント・オオガスタンに奉納したもので、後ち或は火災に遇ひ或はデエン人の侵掠に遇つたりして、一時は見る影も無いやうになり、ランフランクが再建したが、それも千百七十四年に焼けてしまつた。今のはキリアム、ラブ、センスが建築した部分はその大部を占めて居るといふことである。そんなことはどうでもいふ。とにかく全長八十六間足らず、音楽室の長さ許りでも三十間はあるし、本堂と脇道の幅が十二間あるといふ。そして中央の大塔の高さは三十九間あるといふ。これでその宏大なことほどは分らう。

僕は王や大僧正の像が無暗に壁龕に嵌め込んである南門を潜つて本堂へはいらる。壁なり色硝子窓なり、總てが古色を帯びて居て、奈良の御寺へ參つた時のやうな心地がする。

本堂正面の石段を上ると、音楽室を限る結界がある。結界は十五世紀の作だといふ。これにも壁龕やうな處があつて、英王六人の石像が嵌めてあつた。

この石段の左右に脇堂が一つづゝある。左側の西北脇堂と稱する處が、かのトマス・ベケットが千七百七十年十二月の二十九日慘殺された處なのだ。それで此の脇堂を殉教堂とも稱して居る。仰いで、窓の色硝子の繪を見る。ベケットの一代記が描いてある。

僕はそれから音楽室へ入り、西北脇堂を見、セント・アンドリュウスタを見、又も石段を登つてトリニチヤベルを見、奥正面のコロナを拜し、セント・トマスの奇蹟を現はした色硝子窓を見たり、此處へ葬られた、ヘンリー四世の大理石像を見たりして、今度は西南脇堂から地下のクリプトへ下りる。ノルマン初期の様式が窺はれるといふ。千五百七十六年頃に、時のエリザベス女王が此處を佛蘭西及びフランスから亡命者の用に供したものださうで、その爲め此處の南側の脇堂丈は、今猶ほ佛蘭西のチャアチとなつて居るのださうな。低いが仲々廣い。そしてアアチを美しいと見た。

今度は西北脇堂の小門からクロイスタアへ行つて見る。非常に大きなものだ。アアチの切交に色んな紋章がある。此の寺院の恩人共の紋章だといふことだ。



寺院の裏へ出て見る。ブリク、ヲオクといふ道だ。それに接して一列の高いアチがある。初期ノルマン式のものださうな。その頽廢の狀如何にも古を偲ばしむるものがある。

寺院の外は、小さな道の他は、例の英國特有の芝生だ。その芝生にはデイジイが一面に咲いて居た。僕は仰いで再び寺院の外形を眺める。壁は黒ずんで居る。石がぼろ／＼に剥げさうに見える。境内は森として居る。實にいゝ感じがする。僕は飽かず寺院を見上げて立つて居つた。

クライスト、チャアチ門を出て、マアロオの記念碑を右にして二三町行くと、左へ曲るモナストリイ町といふのがある。その町のはづれにセント、オオガスチンの舊跡がある。今此處は傳道學校になつて居る。境内に昔のアベエ、チャアチの廢址があり、オオガスチンが初めて建てた寺のセント、パンクラスの廢址もある。そしてオオガスチン、エセルベルト王、ベルザ女王、三人とも此處の墓地に埋葬されて居るのである。

門へ行き着いて見ると、

見物料六片。授業中は二時より五時半まで、休暇中は十一時より五時半までと揭示してある。時刻にはまだ少し早いので、後戻りしてロングボート町といふ坂道を上つて左へ折れてセント、マアチンス、チャアチ境内へはいる。

境内といつても實は墓地なのだ。小山の一端、四方生垣を繞らしてあつて、ロングボート町に面して、さゝやかな門があるに過ぎぬ。

この墓地の一番高みに小さな、極めて小さなお寺が見える。まさか斯んなのぢや無からうと思つて、折よく墓地を出で來た一少年に是がさうかと訊くと、「ザツ、ライト」といふ。

墓地の中の石がら小道を上つて行く。餘程高いと見えてカンタベリー町が眼下に展開して見える。いゝ景色だ。

寺へ行きつくと門扉は堅く鎖してあつて内部の一斑だも窺ふことの出来なかつたのは遺憾だつた。たゞセントオオガスチンの來ない前に既に女王ベルザが用ひたといふチャアチ、英國のマザア、チャアチと呼ばれて居る原始のチャアチ、エセルベルト王が洗禮を受けたチャアチと、斯う思つてその古風な外觀を



眺める許りであつた。

二時も過ぎたから、歸途オオガスチンの舊跡を訪ふた。傳道學校は近代風の綺麗な建物だ。セント、バンクラスの廢趾といふのは庭内の一部に在つて、苔蒸した斷礎のみ存して居る。いと懐古の想を深からしめる。殊に倫敦を出る時曇つてた空が、カンタベリーへ着く頃に少し霽れたのだが、寺院を出る時は雨でも降らしさうに又曇つて來た。此の曇つた空、この苔蒸した斷礎、いかにも取合せがいい。そして境内鳥聲人語もきこえぬ。カンタベリー寺院を見た時よりも一層いい感じがした。

歸りに繪葉書を買つて、郵便局へ行つて書いて出したりしたので、二時十分の汽車には固より間に合はぬ。大分待つて四時十八分のに乗つた。

曇つた空はまた晴れさうになつた。時々日光を洩すこともあつた。廣漠たる野畑、點綴するに平家または二階造りの農家を以てして居る野畑の景が、午前の淡靄の景と違つて別種の感を與へる。

朝は見なかつたが、土曜日の午後だからか、小川の岸に踞んで釣を垂れて居る洋服の大公望も見た。天氣になつたからか、幾町歩の芝原に幾百の綿羊の放してあるのも見た。ロチエスタアの古城は、曇つてた朝の方が却てよかつた。汽車は、六時三十分、非クトリア停車場へ着いた。此節の倫敦のこととして日はまだ高かつた。

(四十三年六月十二日)

### 女權擴張示威運動

婦人參政權問題は年と共に愈よ八釜敷くなつて來る。日本とは國體の異ふ、そして頗る婦人の自由を尊ぶ歐羅巴で、殊に學問技藝の上に於て遙かに男性を凌駕する女性の多い、そして獨立一家を爲して居る男子同様納税の義務を有しながら參政の權利を有たぬ女子の數が非常に多い英國で此の問題の愈よ八釜敷くなつて來るのは無理からぬ次第と云はねばならぬ。

昨日、夕暮れ、宿から遠からぬハイベリイ、フイイルヅへ散歩に行つて見た。此の



公園の東北の隅に接して三叉道がある。人がウヂャク／＼居るから、其方へ歩を移して行つて見ると、その三叉道の中央に一脚の椅子を置いて、その椅子の上に突立つて一婦人が大道演説を試みて居るのである。椅子を取巻いて十重二十重の人だ。婦人四分に男子六分の聴衆だ。言ふまでも無く、婦人參政權に關する演説である。辯士の後ろに大旗が立て、ある。それには

女子に投票權を與へよ、

六月十八日、土曜日、午後六時半示威運動舉行、

同感の女子は來つて之に加はれ。

と鮮かに書きつけてあるのが讀まれる。翌日の示威運動行列加入勸誘の大道演説が、倫敦で此夜四十八ヶ所で同時刻に催はされて居ると、警戒の警部が同じく警戒に來て居る巡查に話して居るのを小耳に挾んだ。忘れずに示威運動を見物しやうと思ひながら歸つた。

ハイド、パーク、コオナアのすぐ前の大通りの中央にエリントン侯の大銅像があ

る。その前あたりが見物に好都合と思つて行つて見ると、はや蟻の通る隙もなく人が立列んで居る。時は六時四十五分だつた。已むを得ず、北側の歩道フットパツに立つて待つことにする。幸ひ僕の前の處は見物が二人列びで、それも餘り丈せいの高からぬ女だから、肩越に行列は能く見えさうだ。

示威運動の行列はテムズ河畔、エストミンスター橋とヲタルウ橋との間で、正五時半集合、勢揃ひの上、正六時半發足、ノオサムバランド町、ベルメル通、セント、ジエムス町を経て、ピカデリーの大通りを西に進んで、ケンシングトン通りの倫敦第一の大會館、八千人は優に容れ得るアルバート公紀念會館に向ふのである。會館での開會は正八時半と聞いて居るから、先頭が此邊を通過するのは七時前後だらう。はや間もあるまいと思はれる。

僕の後ろが三四列も出來た。前から後ろから、右から左からと推されるので煙草も吸へぬ。

七時になつたが行列はまだ來ぬ。その中西から東へ、東から西へと、此の大通りを疾走しつゝ、あつた自動車馬車が影を收めてしまつた。危険を慮つて何れも横



町へでも避けしめたのであらう。言ふまでも無く、僕等見物の前には十間置き十五間置き位に巡査が立つて居る。騎馬の巡査も見える。

そのうち公園の中から衛生隊が列を組んで擔架を携へて出て來た。僕等の前を行列の通る時刻の近づいたのが知れる。

やがて來るのが見えると見えて、前列がざわつき出した。

笛と太鼓の音がきこえるやうになる。

來る／＼。時計を見ると七時二十分だ。

先頭第一に、騎馬の婦人が居る。丈の低い、肥えた、逞ましきやうな女だ。それが有名なドラモンド夫人なさうな。總指令官だと聞いた。

ドラモンド夫人の眞後に旌旗を高く捧げて堂々と進む女がある。僕の横に居た青年が、その横の連に「君、君、あれがシャアロット、マアシユ嬢だよ、三月入牢してた」と言つた。入牢なんか屁とも思はぬやうな顔をして居る。旗には「女子社會政治同盟」と縫ひあらはしてあつた。

次に四列を爲して、此の同盟軍が組織した婦人樂隊が行進する。紫が、つた揃

の衣裳で、樂器は笛と太鼓とだ。四五十人は居たらう、歩調を揃へて整々として進む。曲は特に作つたマアチだといふ。

その次に大隊長といふ格か、又一人の騎馬婦人が見える。中肉中丈の四十位の立派な女だつた。僕の前に居た女が「あれがヘヴンフィールド夫人ですよ」と隣の連れの女にさゝやいて居た。

その次に白衣白袴の婦人が同じく四列で行進する。いづれも右手に長さ一間はある長い銀色の棒を捧げて居る。棒の尖頭には銀色の鍔が着いて居る。四五百人は居た。聞けば此等はいづれも此の選舉權運動の爲めに一度入牢した連中ださうだ。それで名譽の先陣を承つて居るのだといふ。

それからはいづれも四列でいろんな團隊が通る。團體毎に大旗を先頭に立てて居る。銘々小旗を持つて居る隊もある。花束を手にして居る隊もある。そして大抵はみんな右肩から左脇へ厚い幅廣の襷をかけて居る。地は白で、それへ紫で「女子に投票權を與へよ」と縫ひ出してある。

通る／＼。續々幾組も通る。大旗には種々な銘が縫ひ出してある。銘には



「課税を爲して代議士を出さしめざるは虐政なり」

「忍耐せよ」

「希望は強固なり」

「婦人課税反抗同盟」

「精神一到何事か成らざらん」

「勝利は近し」

「更めず譲らず悔いず」

といふのがあつたのは確に記憶して居る。ノオザンプトンの女子隊であつたと思ふが、『ノオザンプトンより出したる四人』と大書して、その下にその六名の名前が書き列ねてある旗もあつた。大旗はいづれも立派なものだつた。

大隊(?)大隊の間には音楽隊が二組づゝ居て、交互に行進曲を奏して行列に元氣をつけて居る。佛國革命の歌を吹奏する隊が少なからずあつた。

小旗には三角形のもあれば、普通の長方形のものもある。緑、白、紫の三色旗が多い。それは、女子社會政治同盟の旗色なのである。中に一隊、監獄の壁を現はした小旗

を捧げて居たのもあつた。警官のボンチ繪を現はした小旗を捧げて居たのもあつた。

行列中、異彩を放つて居たのは、大學卒業の女子連であつた。醫學士連、文學士連、例のガウンを羽織つて、房のさがつたカッパを冠つて居る。いづれも肩を聳かして、何糞男共といった面魂をして居る。見物は此等に對して、『ブラチー』と叫んだり喝采したりする。

閨秀文士團體のうちには僕の辱知のハラデン女史を認めた。

看護婦の一團もあつた。看護婦の制服とそのカッパが小綺麗なので人目を惹いたやうだ。

工女の一團もあつた。選舉權を要求するのは是非は僕の此處で辯すべき限りでは無いが、豫て工場に使役せられて居る女の極めて薄遇なことを耳にして居る僕は、彼等の一團に對して覺えず憐憫の情に動かされた。

女子自由同盟ウイメンズ・フリース・アソシエーションといふ一團の先頭には白百合の大束を捧げて居る女が居た。歸つて聞いたのだが、それはデスバアドといふ知名の婦人ださうな。



美術家の一團はリボンと花とを結びつけたバレットを各々手にして居つた。ハムステッド團體は、いづれも青葉の枝を捧げて居た。「ハムステッド、セイスの折つて来たんだらう」と僕の横の男が笑つて話した。

女俳優連は銘々薔薇と青葉とを結びつけた杖を捧げて居た。

行列のどの邊だつたか今記憶して居らぬが、四輪小馬車を二頭の白馬に曳かしてゐるのも目に留つた。それには清楚な衣裳をつけた少女に圍まれて、囚人服をつけた女が乗つて居た。ホエエ嬢といふのださうな。

僕は行列の次第を一々書かうとは思はぬ。記憶しても居らぬ。

とにかく四列行進でもつて、遅からぬ歩調であつたが、それで居て後尾の馬上の某女將軍が僕の前を通りすぎたのが八時二十五分であつたといふのでその長さが推測されやう。一時間と五分かゝつた譯だ。盛んなものだ。

しかも行列はそれで終を告げて居るのでは無い。その徒歩隊の後には二人乗、四人乗、八人乗と人数は違ふが、或は馬車、或は自動車で徒歩に堪えぬ老婦人や貴女が従ふて居る。車にはいづれも例の三色旗をたてゝ居る。馭者がつけて居るリ

ボンも三色だ。或る自動車は座席を残す外花で満飾をやつて居た。綺麗だつた。試に數へて見たら、此の馬車自動車が七十六臺あつた。

最後に汽車の客車程の大きさの大馬車に、十二三以下の少女のみを満載して居たのが二臺、その後騎馬の警官が四名、それでいよいよ行列は通り終つたことになつた。時計を見ると八時三十三分だつた。

行列が通つてしまふと、今迄横町へ避けしめてあつた乗合馬車、乗合自動車、私用自動車が一時に姿を現したので、さらでだに交通繁き此のハイド、バーク、コオナアの前は車で動きのとれぬやうになつた。今迄立つてた見物共は人波を打つて四方八方へ散ずる。僕は車に轢かれはせぬかと、幾度か膽を寒からしめて、やつとハイドバークの中へ逃げおほせることが出来た。

附記。

今日の新聞を見ると、昨日先陣を承つた名譽の戦士、即ち斯道(?)の爲めに一度監獄の門を潜つた連中の數は六百十七人だつたとある。行列の全長八哩だつたとある。音楽隊の總數四十組だつたとある。大隊の數七箇だつたとあ



る。ニュウ、ジイランド、オオストラリア、カナダ、南亞非利加、亞米利加、佛蘭西、獨逸、和蘭、瑞典、那威、デンマアク、伊太利から一名以上の代表者が此の行列に加はつて居たとある。英國の各州で五人なり十人なり代表者を出さなかつた州は無いとある。總數一萬人以上だつたとある。アルバート、ホオルは此の女子軍で填まつたとある。バンカアスト夫人の『下院若し我等の要求を容れずんば、その地位の危きこと上院に譲らざるべし。總理大臣アスキス氏にして、若し國民の輿論たる下院の意見を輕侮するが如きことあらば、我等は奮起して何事か爲さざる可からず。革命必要あらば革命あれ』といふ演説は大會館が崩れはせぬかと思ふ程の大喝采を得たとある。運動費を醸出せねばならぬと説いたらエアトン夫人が筆頭に千磅と書き、ロオレンス君が次に同じく千磅と筆を染め、或る女は自己所有の小舟の二百磅に賣れるのがあるから、その全額をと、二百磅と認めるといふ勢ひで、即座に七萬三千五百磅、即ち七十三萬五千圓の運動費が出来たとある。當夜現金で得た額丈けでも二百十七磅十五志何片かであつた。

(四十三年六月十九日)

### リチモンド公園

周回八哩、二百七十六萬坪のリチモンド公園は僕等膝栗毛どもの行くべき處ぢや無かつた。

森もあり、池もあるが、牛の代りに鹿の居る廣大な牧場だと思へばいゝ。

ペムプロオク、ロッチと稱するラッセル卿邸宅の構内に、『顯理八世が岡』と名けられた小丘がある。八世はその上に佇立して、倫敦塔からアン、ボレン所刑執行濟の狼火の揚るのを待つてたと聞いて居る。僕もその丘へ上つて倫敦の町がどんな風に見えるか見て見やうと思つたが、邸内の縦覽禁止との掲示に失望して、ぶら／＼邸外の大道を傳ふて、林を左に廣野を右に、『ベン池』といふ大池まで歩いて行つた。

池の渚の芝生に踞して四方を望むと、近く遠く丘陵が起伏して居る。倫敦を二十里も三十里も離れた片山里に居るやうな氣がする。

人つ子一人見えぬ。たま／＼林の木立を過ぎ行くものに氣が付く。それは角



の美しい鹿だ。池は處々池畔の木立を靜かに映して居る。川柳の茂つた處もある。白鳥が二三羽づゝ悠々と遊びで居る。

池の對岸の小山の一つに、嘗ては國王の住まはれたことのある『ホワイト、ロッヂ』といふ建物があつて、それへ達するクインズ路といふ道は長さ一哩に近い立派な大並木路だと聞いては居たが、道を尋ねべき人の居らぬ此の大公園に歸路を失しては事だと、行つて見ることは中止にした。

公園よりか、リチモンド町の坂道を次第に上つて、公園正門に遠らぬ處にある『テレエス、ガアズン』からの眺望が遙かによかつた。此の高臺の東側は人家續きだが、西側は眼下に蜿蜒たるテムズの上流が見え、川土手の鬱蒼たる木立の絶間絶間に緑の牧場があつて、遠くトキケナムの町家が見える。實に美しい景色だ。停車場から此の高臺へ來る途中にリチモンド、チャアチといふ寺がある。『四季の歌』の作者トムソンは此處に葬られて居る。

それから、ジョオデ、エリオットが千八百五十五年から八年まで住んでた家がある。夫人の『僧生涯』と『アダム、ビイド』は此處で起草されたのである。日本

人で此家を訪ねた人は殆んどあるまいから、後の倫敦觀光客の爲め、町名と番地とを記して置かう。曰く、パーク町 (Park Street) 八番地。

(四十三年六月五日)

リチモンドから五哩ほど川上にキングストンといふ小さな古いサクソン町がある。市場に、鐵柵に圍れて古い石塊が一つ大事さうに置いてある。是は、英國古代の某々王が此地で即位式を行つた際、腰掛けたと稱せられるもので、キングストン (Kingston) といふ町名もこれから來て居るのである。此町から更に三哩ばかり川上にハムプトン、コオトがある。其間右岸はサアピトンといふ清らかな町で、左岸はハムプトン、コオトの公園だ。僕は六月の二十六日に晝餉入の手籠携帯で友人二人と朝早く此町へ來て、三人乗の短艇を賃してハムプトン、コオト迄流を遡り、更にハムプトン近くまで漕ぎ上つた。途中に木蔭涼しい小島が三四ある。とある小島の岸邊の柳に纜を繋いで、三人とも上衣を脱いだ儘で行厨を開いた。サンドキチ、鐘詰のサアデン、林檎、バナナなど平素なら左して旨いと思はぬものも、頗る旨く味ははれた。同じ島の他の側にも二艘短艇がつながれ



て居た。雀が人慣れて舷側へ来て食物の催促でもするやうチユ〜啼く。サ  
ンドキチの屑を島の芝生へ投つてやると争つて飛んで行く。無くなると再び  
舷側へやつて来る。

上り下る間、僕等を追越した短艇もあり、僕等が追越したのもあつた。三人乗も  
あり、五人乗もある。七人乗は尠なかつた。婦人の加はつてゐるのが多い。そし  
て婦人で舵手を勤めてたのもあつたが、男子同様漕いで居るのが珍らしく無か  
つた。尤も三人乗などは一人が両手で漕ぐので、權は至つて軽い權だ。八月に  
なるとキングストンの數多い貸短艇屋の數百艘の短艇が出拂ふほどの盛況だ  
といふことだ。

### ブライトン

英國の南海岸と東南海岸には随分避暑避寒地がある。東南海岸ではヘルン、ベ  
ユ、マアゲエト、ラムスゲエト、ブオオクストオン、サンドゲエト、南海岸では、ヘスチン  
グス、それと町つゞきのセント、レオナルズ、それから西へ數へてイイストポオン、シ

イフオオド、少し距つてリツルハムプトン、ボグノアサウスシイと枚舉に違が無い。  
ブライトンはシイフオオドとリツルハムプトンとの中間の、倫敦正南の最も當世  
風な海浴地兼避寒地である。

元ブライトンはたゞの漁村に過ぎなかつたが、松本順國手が海水浴を奨励して  
大磯を紹介したやうに、千七百五十年に、時の名醫リチャード、ラセルが『腺病に於  
る海水の效能』を著して此地を紹介して以來、次第に繁榮を來し、次いで千七百  
八十二年、當時皇太子であつたジョージ四世が離宮を此地に構へてから、俄然とし  
て立派な町となつたのである。

當時は倫敦へ又倫敦から、別な道を一日三臺のコオチが通つたぎり、乗車賃一  
人十四志だつたものさうなが、今ちや急行の汽車に乗ると五十一哩の距離を一時  
間で來られる。僕は七月三日の日曜の日がへり、汽車を利用したが、確か往復三志  
半であつたやうに思ふ。

海浴場としては倫敦に一番近いので、倫敦人は多く此處へ海浴に來たものだ。

従つて倫敦の流行もいち早く輸入された。それで『海邊の倫敦』London-by-the-Sea



とまで唱へられたものだが、悪口家がブライイトンは「風、炫光及び流行より成る町」といつた程で、風が強いし、海面と砂濱に輝く日光が激しかった。然し今ちや大規模な風の遮蔽物が諸處に設けられ、また日光の反射を和げるやうに幾百千の灌木が海近く植ゑられて、昔時とは餘程改良されたといふことだ。

僕は倫敦から無停車の急行に乗つてワアジングで下車した。ブライイトンの西十哩半の小海水浴地である。砂濱に沿ふて立派な遊歩道があり、納涼用の棧橋もある。折柄退潮と見えて一町餘りも遠淺が露はれて居た。海草が其處此處に残つて居る。砂濱のことだから、石花菜や海髪うみかみのやうなものは無かつた。神馬藻かまもや石蓴いそぐさの破片ばかりだつた。貝殻も至つて乏しかつた。

十一時過にブライイトン行の乗合自動車が出るときいて、一志出して乗つた。町を出外づれる頃から一天俄に擾曇つて、やがてのこと、銀箭を束ねたやうな大驟雨が沛然として襲ふて來た。自動車に幌はあつたが、見晴しの爲め前面は明放しになつてるので乗合一同、飛沫しぶきにびしょ濡ぬれになつた。が、それも一時のことだ。ブライイトンに着いた時はからりと霽れ上つて、日の光が冷く海を照らしたので、薄外套だ

ブライイトン海水浴場西棧橋



Brighton

けで蝙蝠傘の用意の無い僕は大に嬉しかつた。濱邊なみべに浴ふた遊歩道ユウポドウは素晴しく立派なものだ。長さ四哩あるといふ。殊にその東部の護岸石垣の如きは、如何なる巨浪怒濤をも防ぐべき堅牢なものだ。此の石垣だけに百萬圓を費したといふことだ。

此の遊歩道から海中へ遠く棧橋さんしが東西二つ突出して居る。僕は「西棧橋」といふへ行つて見た。中央に橋と平行に、屋根のある透し窓の板扉があつて、その板扉に浴ふて共同椅子が左右に幾百と並んで居る長さ百九十間餘の大鐵橋だと思へば間違は無い。突端だけ丁字形になつて、其處には小さな演藝館が建つて居る。午前午後夜間と、日に三回樂隊の吹奏がある。」



七月ながら暖いとも思へぬ日であつたが、それでもこの棧橋は納涼客で賑かだつた。殊に演藝館周囲の茶店は空席の無い大入で、近頃流行の裾すその窄しほんだスカアトを着け、駝鳥の毛の房々立つた日傘程の大きな帽をかぶつたそれ者らしいのを連れたハイカラ紳士——ゾボンの下へゲートル、赤革の靴、キチリと合つた薄色の脊廣、小脇に華奢なステッキ、ダブルカラアに赤の襟飾、片眼鏡、新調の麥藁帽といつたハイカラ紳士が尠すくなくなからぬ。貧書生の僕等は寄つけさうに無かつたから、海の景色も碌々見ずに引返した。

此の棧橋と平行して、七八丁東に「御殿棧橋」と稱するのがある。長さ二百八十五間許り。僕は是へは入らずに、橋の袂たもとの水族館へ入つて見た。

水槽は四十許りあるが格別珍らしい魚貝もなかつた。一番奥は羊齒畑になつて、畑中の壇上で四十人の樂手が管絃樂を奏して居つた。此の水族館は全部地下にあるのだが、入つて居る間は少しも地下に居るといふ氣がせぬ。贅澤なことをしたものだと思ふ。

水族館の近くに「ロオヤル、バギリオン」といふ東洋風な無趣味な建築がある。建

築は無趣味で、内部にも見るべきものが乏しいに拘らず、僕には是がジョオジ四世の離宮であつたことを思ふて頗る興味ある物と眺められた。今は市の所有になつて居る。

市は千八百五十年に五十三萬圓で買求めたと承知して居るが、初めジョオジ四世——當時皇太子であつた——が建築した時には非常な金を浪費したものに相違無い。バイロンの『ドン・ジュアン』の第十四篇八十三節に

Shut up——no, not the King, but the Pavilion,

Or else it will cost us all another million.

閉ぢよ——國王をには非ず、バギリオンを。

さらすば我等は更に百萬の金を亡うしなはん。

と詠まれて居る。

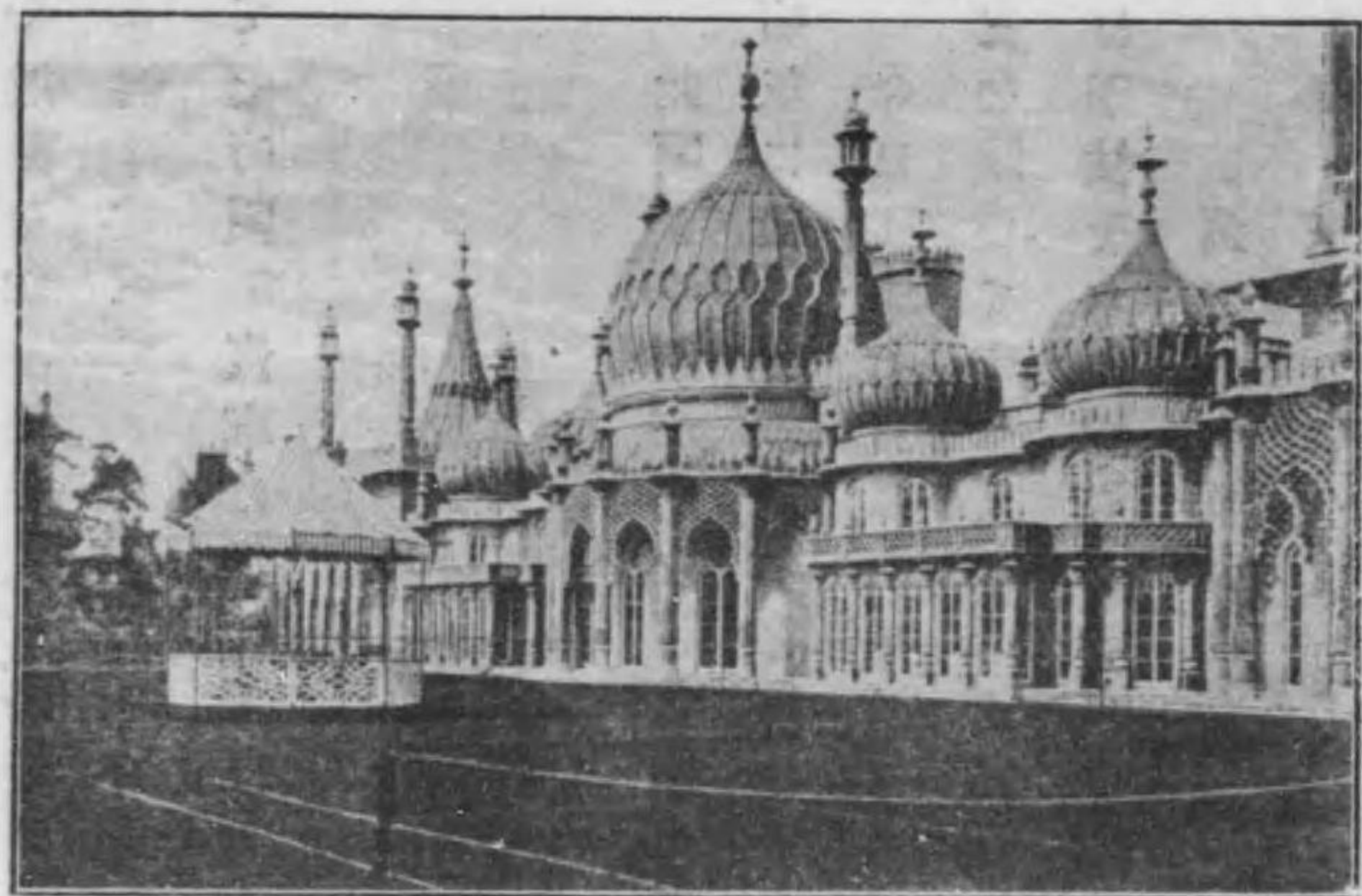
僕は此のバギリオンを取巻いて居る花園を逍遙しながら、不圖サッカーエの「四人のジョオジ王」で讀んだ四世王の逸話を想起した。

當時の大貴族にギルレアの諷刺畫にも描かれ、世間から「ノオフォオオクの競馬師」



と渾名されて居たノオフォオク侯といふは酒豪の聞えが高かつた。所謂民黨で、爲に皇太子と不和であつたが、仲裁調ふてこの離宮にも出入するやうになつた。もう老齡のことであるし、皇太子は一夜この侯爵を此の離宮へ招いて一泊させることにされた。老侯喜んで馬車を驅つて己がアランデルの城から當離宮へ馳せ参じた。

皇太子は弟達と謀し合して此老侯を酔つばらはさうと工まれた。食卓に列した者はいづれも豫て酒を老侯に強いと命せられて居る。強ひる。老侯何條否むべき。切りと傾ける。やがてその謀計に氣付いた。敗るものかと、注がせては互に飲み合ふ。美事敵數人を打倒した。終には葡萄酒ちや駄目だとブランドイの呑競となつた。皇太子の弟がナミ／＼と大杯に酌をされた。老侯立上つてグイと飲干す。『さあ。もう家へ歸ります。馬車を呼んで下さい』といふと、皇太子は、此處で泊ることにして來たのちや無いかと、尙ほも勧められる。『いや／＼と斷る。實は少々閉口氣味なのだ。尙ほも皇太子は勧められる。老侯最後には、すぐ歸ります。二度と御門はもう潜りません』とまで言つた。皇太子の係蹄にかゝつた



Royal Pavilion, Brighton.

のだ。

馬車を言つける。來た。が、その半時間の間に充分に酒が利いた。歸りますと歸りますと言つた老侯、食卓に白髪頭をつけて知覺を失つてしまつた。それでも、馬車の用意が出来ましたと云はれると、むつくと起き上つて、よろ／＼と車内へころげ込んだ。言ひ含めてあることだから、御者は、僕が今歩いて居る此の庭園の道を小一時間ぐる／＼廻つて居つた。車中の老侯は自分の城へ歸るものと安心して寝込んでしまつた。翌朝眼が覺めると、どうだ、身はブライイトンの皇太子のバギリヨンの一室の床に寝て居たのであつた。

要らぬ御世話かも知れぬが、ジョージ四世王



の逸話を知りたい人は、あのサツカレエの一文を読むが宜からうと思ふ。  
僕は電車でブレストン公園といふ綺麗な閑静な山の手の公園もぶらついて見  
て、七時頃の汽車に乗つて夜の八時に倫敦へ歸つた。

(四十三年七月)

## 病 氣

此頃よく頭が痛む。食慾が無い。たま／＼嘔氣がする。時々熱が出るやうだ。  
病氣に罹つたのかなと思ひ／＼幾日かを過ごした。

今日 七月の十九日 是殊に熱があるやうに思はれる。寒氣がする。晝  
食を斷つて床へ入る。頭痛がしてたまらぬ。自分で洗面臺の洗面器まで行つて  
は手拭を水に濡らして来て、寢て居て額を冷やす。

『到頭やられたんだ』  
と獨りでつぶやく。

三時頃宿の主婦が名刺を持つて僕の寢室へ入つて來た。O氏だ。昨年四高を

卒業して東京法科大学へ入つて居る男だ。一年間教へたことのある男だ。寢室  
でもよからうと案内を頼む。

四五日前さる人の随行員となつて着英しました二三日中に蘇格蘭を巡遊し、獨  
逸、璉馬、伊、埃、露を経て年末に歸朝します、といふ。頭が痛くて眼が開けられぬのを、  
強ひて三十分許り寢た儘話す。ケンシントンからわざ／＼訪ねて呉れたと思  
ふと感謝に堪へぬ。一年前の生徒が堂々たるホテルに宿泊して居て、當年の教師  
が場末の安下宿にくすぶつて居るのかと考へると妙な氣がせんでもなかつた。』  
歸つてから清心丹を日本から持出して居ることを思出して、それでも頭痛に効  
くまいものでも無いと、床を下りると、ぐら／＼と倒れさうになつた。

翌二十日は頗る心地がよい。外出しなきやならぬ用事があつたので朝食後出  
かけた。が晝も夜も食慾が無い。夕方から頻りに嘔氣を催はす。

二十一日は前日に増して食慾が無い。頭が痛む。

『どうも今日もまた加減が悪るいから、晝食は止めます。お茶にも下りませ  
まい。晩食には下りやうと思ひますが』



と断つて三階の自室へ引込んで床へ入る。寒氣がするから上衣、胴衣、ズボン、脱いだ丈で、その上へネルのナイト、シャアツを着て入つたのだが、なほ寒い。

頭痛が烈しくなる。次第に肩が張つて来る。ますます寒氣がつのる。しまひには胴震がする。困つたなあと思ふ。四階から誰か下りて来る氣合がする。毛布一枚貸して貰ふやう頼まうと思つて、割れるやうな頭を抱へて、ベッドを這り下りて、寐衣姿を見られぬやう、そつと扉を少し開けて見る。アングソン嬢だ。

『非常に寒氣がして堪りませんから毛布を今一枚貸して貰へませんでせうか』

『そりやお氣の毒です。ね。ぢや直ぐ』

と、縞の大毛布を持つて来て掛け足して呉れた。まだ寒いので、僕はその上へドレッシング、ガウンと薄い外套とを掛けた。元來が頑健を以て許して居る僕のことだから、日本を出る時、一向藥の用意はして出なかつた。でも清心丹の他に、風邪藥にとアンチピリンを十包許りカバンの底へ入れて出た。起きた序にと、探し出して含嗽水で一服嚥んだ。調合してから十ヶ月以上経つてゐるのだから、利くか利か

ぬか判つたものぢや無い。

ふと思ひ出したことがある。今夜はジャバン、ソサイチイの催で生駒の將校を招待してコンヴェルサツツオオニがある日だ。會員たる僕は、書記からの通知に接した際、參會と返事を出して置いたが、チナ、バアテイでも無いから、更めて不參と通知するにも及ぶまい。然し今日は、フイルド君から晚餐の招待を受けて居た。六時半迄に行つて、七時に晚餐を共にして、そして九時半にメトロポオル、ホテルでの前述のコンヴェルサツツオオニへ同行する約束がしてある。之へはいくら病氣で苦しいといつても、断り手紙を出さずには居れぬ。頭が痛いので眼を開けて居られぬやうなのを、強ひて机に向つて一封認める。手がブル／＼震ふので字が形を成さぬ。やつとユアス、シンシアライ……と書き終る。

すぐ床へはいる。悪寒は中々止みさうに無い。此の先きどうなることかと思ふ。床の上掛は少くは無いやうだが、日本のと異つて極めて軽い。日本の厚布圍が斯んな時には却ていゝがなあと思ふ。厚布圍も欲しいが、斯んな時に妻が居て呉れるといゝがなあと思ふ。其うち悪寒は薄らいだ。震ひも止つた。が頭は



依然として割れるやうに痛い。シャツは汗でビッシヨリになつて居る。そして舌がカラ／＼になつて素敵に喉が乾く。堪らぬ。清心丹を十粒許噛み碎いて含嗽水をグラスに半分許のむ。實に旨い。少し経つとまた乾いて来て堪らぬ。又水をのむ。密柑があれば、葡萄があればと思ふ。さう思ふと堪らなくなる。

いよ／＼欲しくて堪らぬので、階段の處まで出て行つて、アイセエ／＼と叫ぶ。聲を出すと頭へグワン／＼響く。宿の婆さんは晝間はグラウンド、プロアがアンダグラウンドの部屋に居るのだから、中々きこえぬと見える。じれったい。やつとのことでコト／＼上つて来る。

『渴いて仕様が無いから密柑を買つて来て下さい』

と頼む。そして序に先ツき認めた手紙の投函を託する。其時婆さん、郵便が来ましたといつて葉書を二枚呉れた。

一枚は東京を七月の二日に出した妻からの繪葉書だ。

父上様秋田へ御越し相なり候後も益々御元氣にて候一昨日小包にて御菓子を送り下され候御地へも御手紙ありしこと、存じ候私へもちよい／＼御手

紙下され候お國にても母上様御機嫌よく御暮しにて父上様御不在にても訪ね呉るゝ人もありて餘り淋しき事もなしと先日御手紙下され候……

とある。僕が此處で斯うして臥て居るとは固より知らう筈が無い。秋田といひ、國といひ、遠いと言つても倫敦から日本への事を考へれば、東京からは直ぐだ。病氣と知れば介抱にも行かれる。こんな知らぬ他國に居てはと、少々心淋しくなる。』

今一つの葉書は安藤君からなので、いよ／＼明日午後三時二十五分キングスグロス發の汽車にて倫敦出立、ヨオクに暫く滞在、リバプウルより汽船にて亞米利加へ渡り、同地見物の上歸朝との通知だ。見送りすべきだが、とても出来さうに無いから、頭は切りに痛むが、起きた序でに、病臥中だから見送りはせぬと葉書に書く。床へはいつて暫らくしてから婆さんやつて来た。

『季節はづれだもんですから、やつとこれ二つしかありませんでした』といふ。嘘つけ。いくら季節はづれだつて水菓子屋に密柑の十や二十無いことがあるもんかと思ふが仕方が無い。今書いた葉書の投函を頼む。皮を剥くのもどかしく一つ食つた。喉も舌も渴き切つて居るから焼石に水だ。も一つのも



瞬く間に食つてしまつた。

僕の宿からさう遠くも無い處にデエル君の住居つてることを不圖思ひ出した。一度味つてから密柑が欲しくて／＼堪らなくなつたから、又も頭の痛むのを堪へて葉書を書く。今夜中なら尙結構、明朝でもいゝから密柑のいゝのを十許買つて来て呉れ、と唯斯う書く。

それからベッドの横枕に近い處へ椅子を持つて来て、それへ水を八分許入れた洗面器を置いて、寢て居ながら、手拭を浸しては額を冷やすことにした。厄介なこゝと夥しいが、冷やさぬより冷やす方が心持がいゝから苦しいながら、生絞りにしては冷やす。

六時過にキャノン嬢かシチイから歸つて来た。僕の部屋へ入つて来て

『ワット、ワリス、ユウ』

と言ふ。斯う／＼だと、大儀ながら話す。すると急いで四階の自分の部屋へ行つて何んだか薬壺を持つてやつて来た。

『これを一粒飲んで御覽なさい』

と言ふ。大きな白い丸薬だ。幾那が入つて居るといふ。言はるゝ儘に水で一粒飲んだ。それから渴の止まる含嗽薬を造つてあげるといつてグラスに一パイ造つて呉れた。イヤに澁いばかりで渴はとまらぬ。善くはなからうと思つたが、堪らぬので、十五分置き位には、水を少しづゝ飲む。旨いつたら無い。

夜になつて頭痛はうすらいだ。渴はまだやまぬ。

九時前デエル君が遣つて来て呉れた。そして蜜柑を十一持つて来て呉れた。病状を話してきかしながら二つ食つた。病氣かも知れぬと思つて解熱劑も持つて来たといふ。

驗温器まで携へて来て居る。午後よりかづつと熱は下つた様だつたが、それでも三十七度五分あつた。九時半、僕の葉書を見て驚いたと言つて、燕尾服トップハットでフイールド君もやつて来て呉れた。コンゼルサツオオニは十一時半まであるのだから行き給へと勧めたが、止めると言つて十一時まで二人居て呉れて非常に心強く思つた。友人の有難さがしみ／＼感せられた。

翌くる二十二日は天氣だ。此頃は毎日／＼曇るか降るかで實に陰氣だつたが、



貧民町ベチコオト、レエンの日曜の朝



Petticoat Lane, London.

久し振りに青空が見える。でも僕は起きられぬのだ。悪寒はせぬが頭痛は相變らずだ。嘔氣もする。食慾は固より無い。それでも何も滋養物をとらんでとは、朝、晝、夜とも牛乳一グラスづゝ飲んだ。

十一時過にデエル君が葡萄の大きな房を二つ持つて来て呉れた。一房は見るまに貪り食つた。」

農相大浦兼武氏から、二十七日に當地出發渡米する筈だから留別のため粗餐を差上げたい、二十五日の午後八時にホテル、メトロポオルへ御來臨を仰ぎたい、といふ招待狀が來た。大浦さんの名は勿論知つてるが個人としては全く知らぬ人だ。勿論來られた時に迎へもしなかつた。早速同封の葉書に、御ことわりの文句を書いて、宿の者に投

函して貰つた。

次の二十三日も珍しく雨が降らなかつた。今日は前日よりも具合が餘程悪い。九時頃から又々悪寒を覚える。頭痛も相變らずだ。

九時半頃フイールド君が来て呉れて、醫者にかゝつたらといふ。日本人の醫者が居さうなもんだといふ。獨逸になら醫學士も唯の醫者も澤山行つてるが倫敦には居さうも無いと僕は答へる。デエル君と相談して探してやると言つて歸つた。友人の有難さが更にまたしみみんと感せられた。

獨りで又も濡れ手拭で額をひやす。表の通路を通る馬車や自動車の音がイヤに頭へひびく。

繪葉書が來た。ホテル、セシルに滞在してる田邊工學士からのだ。昨日蘇格蘭から歸つて來た。今夜クラリツヂ、ホテルで君と會ふのを楽しみにして居るとある。同君は僕より一年前に大學を出たんだが、同國ではあり、同じ中學に居たし、高等中學時分には同じ下宿で同じ部屋に居たこともある人で、僕とてもゆつくり會つて話をしてほしいは山々だ。さうく、懐ひ出すと斯んなこともあつた。同君が僕



等と共に京都の高等中學校から仙臺の高等學校へ轉校した時に、同君はその令兄が高等商業時代に着古るした制服を四五着貰つて仙臺へ行つた。

當時學校の制服を造るほどの餘裕の無かつた僕は、そのうち最も古いのを大枚五十錢で譲つて貰つて、ボタンをつけかへて着て居つたのだ。その令兄が即ち今の倫敦總領事坂田重次郎君だ。そして今夜は同君と令夫人とのアト、ホオムなのだ。病氣でさへ無ければ、僕も燕尾服で出掛けて、坂田君田邊君僕と、三人シャンペンを舉げて往事を談ずるのだのと思ふと、ナサケなくなつてしまふ。田邊君は六月の二十七日に倫敦へ着いた。然しお互に好機會が無くて屢々會談することが出来なかつた。たつた二度會つたばかりだ。二十六日には佛蘭西へ向けて出立すると聞いて居る。「病氣で今夜は行けぬから、今度は日本で會はう」と葉書を出した。

三時頃フイイルド君がまたやつて来て、水蜜桃、葡萄、蜜柑を澤山に置いて行つて呉れた。すぐ水蜜桃を二つ平らげた。

五時頃にヂェル君が來た。斯う言ふ。日本人俱樂部で、も聞けば或は分るか

と思つて試に聞いて見たら日本人の醫者が居ることが知れた。ハムステッドのハレエロオドに居るといふ。そこで今朝早くタキシイで駈けつけて行つて見たら、博覽會へ行つたといふ、博覽會で備ふた醫者なんださうな。

博覽會へ行つて見ると、もう歸つたと言ふ。また宅まで行つて見ると、まだ歸つて居らぬ。是非今夜來診されるやうにと置手紙をして來たといふのだ。友情感泣の至りである。それにしても若しや來ぬといかんから、一つ英吉利の醫者にも診て貰つてはといふ。よろしくと頼む。そこで宿の婆さんに聞いて、近所のスラックならぬ醫者へ電話をかけて貰ふ。夜の九時に來るといふ返事だといふ。同君はその時刻に又來て見るからといつて歸つた。

七時にコックとドアを敲くものがある。

「イエエス、カムイン」

とやる。娘が牛乳でも持つて來たのかと、寝ながら振むいて見ると、八字髭の猛烈な、五尺六寸は丈があらうと思ふ、プロックの大男がのさりのさりとはいつて來た。はてなと思つてると



『グツモオニン。ワツツザ、マタア、キズ、ユウ』

と言ひながら大きな右手を差し延べた。ハハア、御醫者さんだわいと、むつくり起きて、僕も右手をさし出して握手した。

それから僕は病氣の経過を説明する。七月の十六七日頃から食欲の減じて来たこと、十九日に少し悪寒を感じたこと、二十日は氣分がよかつたので錢湯へも行ったこと、など順次ゆつくり説明する。イエエス〜とドクトルは聽いて居る。

僕は、どうも發熱の具合がエエギユウのやうですがと言ふ。ドクトルはそれには何とも答へぬ。

脈を見る。舌を見る。そして驗溫器の小さいのを脇の下ちやなく、舌の下へ入れさせる。胸部の打診と聽診とをやる。頸部の聽診をやる。通じはと尋ねる。やがて

『やはりインフルエンザですな。』

といふ。僕は、渴いて〜仕様が無いんですが、そんな時に蜜柑や葡萄を啜つても宜うございますか、と尋ねる。

『サアテンリイ』

と言つたので大に安心する。薬は誰れか取りに上らせますか、ときくと、自分の方から届けるといふ。

『グツバイ』で握手をすますと、ドクトルはドシン〜と階段を下りて行つたが、やがて自動車の音けた、ましく去つた。

物の十分も経たぬ間に薬が来た。使小僧が持つて来たんだといふ。見ると水薬と散薬とある。

初めてこつちの醫者の薬といふものを飲むんだ。何んと書いて居るか、と水薬の罐を取り上げて見る。

ワシ、テ、エブルス、ブンフル、キズ、ゼ、セイム、ヲ、ウ、ヲ、オ、タ、ア。  
エ、ヴ、リ、イ、フ、オ、ア、ア、ワ、ア、ス。

とある。初めから水を交せて倍にして呉れ、ばい、に、厄介な、と思ふ。粉薬は立派な小さな紙箱に入つて居る。その箱に

ワン、ド、オ、ズ、ツ、ウ、ビ、テ、エ、ク、ン、ア、ト、ナ、イ、ト。



と貼紙がしてある。催眠剤らしい。指圖通りにして水薬ほど飲む。杏仁水に苦味丁幾それに何かと言つたものらしい。

九時に約束通りデエル君が来た。ドクトルは九時ちや無い、七時に来たよと僕が話して居ると、宿の婆さんが

『エ、チャバニイズ、ゼンツルマン、ヲンツ、ツウ、シイ、ユウ』  
と言ふ。

今頃誰れだらうと思つたが、

『病氣でベッドルームに居るから、失禮だがベッドルームで會ひますから、と言つて下さい』

と頼む。やがて入つて来たのは、シルクハット、フロックコオトの小柄な日本紳士だ。

『私は伊丹と申します』

と言ふ。醫學士君なのだ。デエル君も初對面の挨拶をする。

僕は學士へも、さつき洋醫に言つた通り繰返す。形の如く診察をすまして、なほ何か疑念があると見えて、シャツを脱がして、背部腰部も見る。瓦斯燈が反對の側

に點つてるので、デエル君カンドルを點して僕の背部に立て助手といつた役をやつて呉れる。日本ドクトルは、洋醫の呉れた水薬も粉薬も少し嘗めて見た。そして、英吉利は薬が舊式だから、よく判らぬといふ。とにかく悪性ならぬ熱病だ、熱病は始終發熱の上り下りを見て居なきやならぬのだが、自分には多忙でそれが出来ぬ、だから矢張り洋醫にかゝつて居て貰ひたいが、キニエネを四包造つて来たから、洋醫には内處で明後日早朝一包、明後日發熱したら、その翌々朝二包連服して見なさい、そして明朝から四時間置に驗温して、二三日経つて其結果を報道して下さい、と餘りたよりにならぬことを日本ドクトルは言ふ。

自動車で来たと見えて、これもけた、ましい音をさして歸る音が僕の三階の部屋から能くきこえた。

デエル君も歸つた。

瓦斯燈を消して、寢室は眞暗になつた。やはり渴く。手さぐりに葡萄をつまみとつては食ふ。十一時頃に粉薬をのんだが一向睡られぬ。二三時頃にやつと睡つた。



二十四日は頭痛はするが、熱は平温より低い位だ。朝の八時が三十六度一分、十二時が六度五分、午後四時が六度六分、八時が六度四分だ。安心はならぬ。

食慾は矢張り無い。三度とも牛乳一グラスづつだ。

二十五日は早朝日本醫のキニネ劑を飲むべき日だ。五時に服用した。熱の出るのを豫想して居たが果してだ。午前八時に六度九分なのが、十二時には七度になり、午後四時には八度五分まで上つた。でも夜八時には八度四分になり、十時には七度七分に下つた。頭痛もするし、肩も凝る。

二時に英吉利ドクトルが來診した。薬を變へて見るといふ。持たしてよこしたのを見ると、矢張り水薬と散薬となんだが、今迄の水薬は薄茶色のだつたが、今日のは薄乳色だ。そして散薬を水薬へ融かして服用せよと書いてある。早速試みて見る。散薬を入れると直ぐと沸騰する。苦いラムネを飲むやうな氣がする。

日暮に自動車が玄關に着いたやうだと思つたら、やがて田邊君が僕の部屋へはいつて來た。苦しいながら寝た儘話す。

『此の部屋には呼鈴がついて居るのかい』

『こんな下等な家にそんなシャレたものはあるもんか』

『何か物を頼む時に不便だらう』

『不便さ』

『便所は何處にあるんだい』

『グラウンド、フロアにある。階段を四つ下りて行くんだ』

『病氣の時にや殊に不便だらうな』

『不便さ』

『何處かで麥酒でも飲みながら緩くり君と話さうと思つてたが、實に残念だなあ』

『うん、僕も實に残念だ』

『僕は此處を明日か明後日立つ積りだが何か日本へ言付は無いか』

『だつて君はこれから佛蘭西獨逸伊太利と廻つて、マルセイユから船で歸るといふんだらう。日本へは十一月にならなきや着くまい。郵便で出しや、二十日で日本へ行くからな』



『うん、さうだな』

てな話で、談話は一向浮かぬ。タキシイが待たしてあるし、七時から兄の處へ訣別に行くのだといつて、二十分許居て呉れたきりで

『ちやこれで訣れやう。大事にして早くよくなり玉へ』

『君も無事で歸朝し給へ』

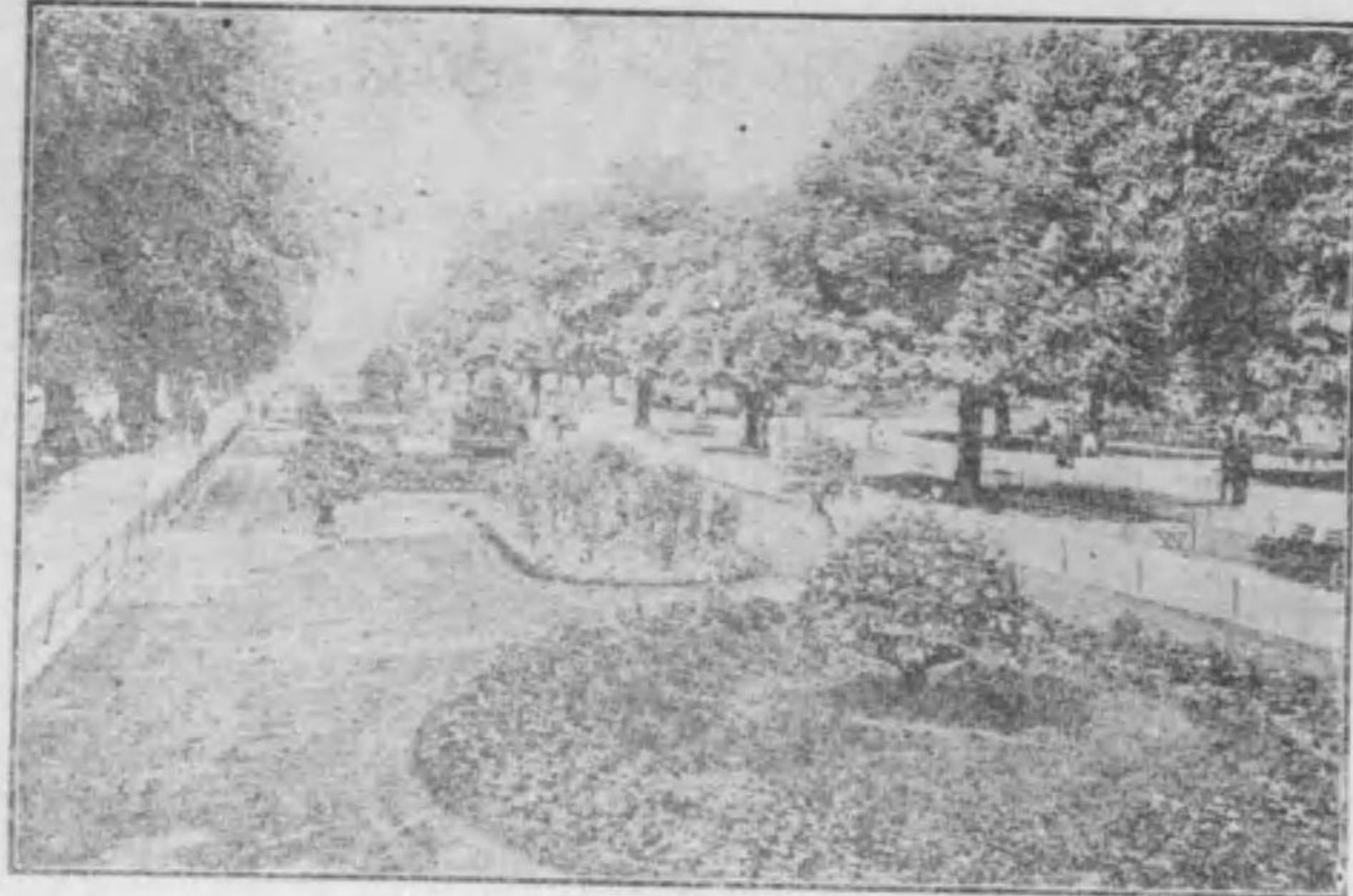
と堅く手を握り合はして別れを惜しんだ。異國に在つて親友と別れるのは更でだに、つらいのに、病床にあつて別離の辭を述べるなどは殊につらい。同君の眼もうるんで居たが僕の眼も潤るんだ。

今日は日本からの郵便日に當るので五通手紙が來た。その中に郷里の母からの一通あつた。假名澤山のその文には

六月十三日にお出しなされたしやしん七月の三十日にとゞきました。すこしふとりなされたやうにみえまして、うれしくおもひました

と書いてある。今は眼は窪み、頬骨は高く聳えて居る。涙がホロ／＼と流れた。

二十六日は久し振りに頭が痛く無い。熱も六度七八分を上下して居る。幾日



リセント公園の一部

Regent Park.

ぶりに煙草を喫つて見たい氣がした。一寸喫つて見たが、喫ふと嘔氣を催す。夜デエル君とフイイルド君とが話に來て呉れた。二人の談話へ嘴を容れる程の元氣が出た。

二十七日は日本ドクトルの指圖に従つて、朝五時にキニネ劑を二包連服した。その所爲か鼻がつまつて、耳が遠くなつた。然し發熱もせず頭痛もせぬ。もう大丈夫だわいといふ氣になる。

二十八日も頭痛もせず發熱もせぬ。渴くことは前々通りだ。朝フイイルド君が葡萄、林檎、蜜柑、莓を澤山持つて來て呉れたから、早速莓を三十箇計りむさぼり食つた。

妻から手紙が來た。東京を七月の十二日に



出したのだ。その中に

父上様此の七日に秋田より能代へ御越し相なり、二十六日頃迄同地御滞在、一たん御歸京の上御歸國相なり、本年は久々にて郷里にて盆會お取行ひあそばされ、それより鳥取へ暫くお越しにて、其後濱田へ御出になり、序に益田津和野へも御越しの由承り候

とある。六十に近い父が斯く元氣で日本を飛び廻つて居ると知ると心丈夫だ。病氣に罹つてゝも居れば當地に居る僕はどんなにか心配しなきやならぬだらう。それを思つて僕の今度の病氣も、父と母とへは知らすまい、決して／＼知らすまいと決心した。

二十九日は前日通りだが、氣分は餘程よくなつた。食慾も少し進んで來た。今日から魚肉ほどは食ふことにした。久しぶりに椅子に腰かけて見た。

三十日、今日だ、病氣は治つたやうだが、非常に衰弱して居るので部屋の外へ出る元氣はまだ無い。窮屈な洋服を着る元氣も無い。書物を見る勇氣は固より無い。然しじつと椅子に腰かけて居ては退屈で仕方が無い。そこで退屈凌ぎに此の一

文を認めた。

(四十三年七月三十日)

## 日本料理

『ああ、いつか連れて行つて上げる』とばかりで、三月四月も約束を履行せず居たんだが、九月の末に遭つた折に『日本料理屋へ連れてつてやると仰つたのは、ありや虚言?』と催促を蒙つたので、いよく十月の二日に同行しやうとネリイに約束した。ネリイは僕の最も親しいレディだ。序でにと思つて、毎度話しに行くキルソン氏の若夫婦も招くことにした。七時、エスト、エエマス、ストロイト五番地イクイネへ御來車を乞ふと。

二日は日曜日だ。英吉利の家では日曜の晩食は所謂サツバアで、至つて御馳走が無い。自然、有福な日本人は殊に日曜の夜、日本食をやりに出かける。倫敦には日本料理店が五六軒あるが、博覽會で來て居る人が多いので、日曜の夜は何處も満員の盛況だ。そこで早くいゝ部屋を占領しやうと思つて、五時にネリイを連れ出



しに行つた。日曜ではあるし、相客があるし、知らしてあつたから、大分御めかしで居る。

ネリイにはポリイといふ姉があり、母もある。二人とも隨行したさうな顔をして居たが、こつちの懐都合が許るさぬから、一通の挨拶をすましてから、早やコオトの鉤もキッチンとかけ、しやれたスカーフを胸に垂らして、白キツドの手袋もはめて待つて居るネリイに、

『アア、ユ、レデイ、ミス、……』

『イエエス』

『ゼン……グド、イヴニン、ミス、……グド、イヴニン、ミセス……』  
で出てしまつた。

見るとネリイはフアンシイ、シユウスを穿いて居る。長路歩るかせるのは氣の毒だ。ハンサムかキャツプか儼つて乗らしたいが、實は歸途タキシイで送つて行つてやる考で居るので、往復共ちや貧書生の僕にはちとこたへる。そこでモオタ、パス。ホオス、パス。ポオトランド、ロオドからエエマス、ストリート迄は徒歩で御

免蒙つた。

着いたのは五時五十分。二階の大きな部屋へ案内された。下の部屋には早や日本人の顔が見えて居た。

日本料理屋とは云ふものゝ、部屋も全く西洋式で、そして裝飾も立派ちや無い。三方は壁。一方の壁には爐が切り込んであつて、爐の飾り棚には黄菊白菊を無闇と詰め込んだ花瓶が大鏡に映つて居る。左右のレセスには一方には三越の廣告額が吊るしてあり、一方には瑞西風景の額が懸つて居る。この反對の壁には、東郷大將と英國先帝の肖像畫とが並んで懸つて居る。壁に接してサイド、ポオドがある。サイホンラムネ、タンサンなどの瓶が十本許り載してある。ドアのある壁にも三四枚額が吊るしてある。その反對の側は、通路が見られる窓が三つある。窓には、それでも氣の利いたカーテンが懸つて居る。

部屋の中央には純白のテーブル、クロオスのかゝつた食卓が据ゑられて、六七脚の椅子がある。安樂椅子長椅子が爐近にある。

タキシイドの給侍にメヌを持つて來させる。メヌは日本での料理屋のやうに



朱塗の板に墨で二段に書いてある。かうだ。

- 一 椀 盛
- 一 作 身
- 一 焼 肴
- 一 鰻蒲焼
- 一 甘 煮
- 一 みそ汁
- 一 奴豆腐
- 一 壽のもの
- 一 ぬ た
- 一 鯨酢みそ
- 一 生そば
- 一 鶏なべ、牛なべ
- 一 鯛 潮
- 一 口 取
- 一 金ぶら
- 一 海老の鬼殻焼
- 一 茶碗蒸
- 一 湯豆腐
- 一 佃かけ豆腐
- 一 胡瓜もみ
- 一 蒲鉾わさび醤油
- ざるそば、おかめそば、その他御好

生稻特製しるこ

あれを、これと思つたが、如かず料理人に任せるにはと、作り身丈けは止めにして見繕つて西洋人向の物を出して呉れど頼んでしまつた。

『私し座敷は日本風なのかと思つてましたよ。日本風にしたなら——マツトを敷いて坐つたらいいぢやありませんか。その方がクワイト、アト、ホオムでいゝでせう』

と言ふ。日本人倶楽部ですら、疊敷く程までに國粹を發揮しちや居らぬのだ。

『でも洋服着て居て日本風に坐るのはアンコンフォタブルだね』

『ウエエタアが洋服着て居ますね。キモノで給侍すりやいゝに』

『でも外へ出る時に一々衣換へるのは厄介だからね』

『それにウエエトレスにしたらいゝでせうにね、ムスメの』

これは如何にも御尤もだ。ムスメでも給侍に出さうものなら、それこそ千客萬來だらう。

『此處の女將は英國人だよ。亭主は所用で此間日本へ一寸歸つて行つた』



が。』

『へエ』

『あの額の鬚のはえてる人、あれがミカドですか』

『あれが有名なアドミラルトオゴオ』

てな話をして居る中に給侍が御膳を持つて来た。お膳は會食膳だ。天麩羅のツユのはいつてる小皿とチョコクが載つてる。

ネリイは安樂椅子から、つと立つてチョコクを取あげて見た。鯉が中に繪いてある。

『これ、何にするもの？』

『それでサケを飲むんです』

『これは？』

『そりや、後で御皿が出てから話す』

やがて正七時にキルソン夫妻がやつて来た。西洋人のバンクチュアルなのは何時も感心する。

ネリイを二人に紹介する。

『私し日本の御料理は始めてですよ』

『私も』

『ですから、私し此間から鉛筆でチョコブスチックスの稽古をしたんですよ』

とキルソン夫人が言ふ。實は御主人たる僕は箸を取扱ふこと頗る不器用だ。却て西洋人に笑はれはせぬかと危ぶむ。

會食の席次は八釜敷いのだが、まあいゝやと僕はネリイを窓の方、それに向き合せて壁の方へキルソン夫人、ファイアブレエスを脊に僕と眞向ひにキルソン氏に坐つて貰らう。

第一に持ち出したのは吸物だ。

『さあ、どうかめし上つて下さい。西洋料理のやうに一度／＼皿を下げませんから、ゆつくりあれこれめしあがれ』

と挨拶する。そして故意と僕は箸を取上げた儘、碗の蓋を取らずに居ると、三人ともきよろ／＼して居る。



「これは、斯うやつて割ると二本の箸になります」  
と割つて見せる。三人とも僕に真似て割箸を割る。ネリイが

「ヒヤア」

と小聲で何かに驚いた風だ。そしてサアギエツトの上を何か探して居る。

「ん、箸の中にトウウスビツクが入つて居ますよ」

と説明する。ネリイは箸を割る機勢に、胸のあたりへ飛んで来た小楊子に驚いたのである。キルソン夫人は箸の中をつくつく見ながら

「アイセエ」

とか何とか言つてる。三人はまだ蓋を取らぬ。給侍が皆んなに銚子から酒を注ぐ。三人はスプンが無いがと言つた顔をして居る。罪だから

「こりや、蓋を取つて椀から直かに吸ふんです」

と言ふと、三人ともおづく／＼と蓋を取る。そして上から中を覗き込んで居る。

「汁も吸ひ、中の物も食ふんです」

と僕眞つ先きに椀をとりあげる。見るとネリイは箸が旨く持てぬので大分困却

の體だ。

「フオオクとスプンとを取りよせませうか」

「いや、よございます」

と言ふ。キルソン夫人は御稽古の效空しからずで、機巧に中の物をつゝいて居る。汁の身はハンペンと小さな全の松茸だ。ネリイははさめぬので、箸一本で松茸を突きさして、

「こりや何です」

「マシユルウムの一種です」

口へ入れて嚙んでたが、

「變なものね」

といふ。キルソン氏も同じくハンペンを箸でつきさして何かと聞く。説明が一寸困難だ。

「そりや、その、フィシユのフレツシユをハツシユして、モオタアに入れてブレエして、それを小さい塊りにしてポイルしたんです」



と説明が六かしい。みんな旨く無ささうな顔をして居る。キルソン夫人は両手で腕を取り上げて嘔つて居たが、

『スープは實においしい』

といふ。他の二人も吸つて見て、これはいゝと言つた。感心にネリイ一人は中の身も汁も平らげてしまった。

『サケはどうです』

といふと、キルソン氏は少し嘔つて見て、

『ホット／＼』

といつて眉を顰めて

『どうも餘り感心しません』

と言ふから、サイホンを取つてやつた。でも細君の方はチクリ／＼一猪口あけてしまった。僕は獨酌でグビ／＼やる。

鬼殻焼が出た。大きな伊勢鰻だ。丹波栗のキントンが添はつて居る。次に鰻と魚との天麩羅が出た。

『その膳の上の、小さなソオサアに入つてるソイをつけて食べるんです』と説明してやる。此の二皿は大分評判がよかつた。

次に酢のものが出た。鯖の身の入つた胡瓜もみだ。どうかと思つてたら、案外に

『こりやいゝ、酢の加減がいゝ』

といふ。見ると、いつの間にかネリイの杯は乾て居る。

『もーバイ注ぎませうか』

と御愛想に言つたら、

『え、注いで下さい』

といふ。そしてグイと半分許りのんだ。

次に鰻の蒲焼が出た。皆んな、妙な顔をして皿を眺めて居る。こつちぢや鰻はシチュにはするが、蒲焼なんて物は固より無い。タレが鹽辛過ぎて居るやうだが、

『フライド、ロブスターよりも旨う御座いますね』



とネリイが言つた。キルソン夫妻は、まづくは無いといふ顔して居た。

次にウマニが出た。何んだか色んなもののはいつてるやうだ。僕の右横のネリイは箸でさぐつて見ると、これは何、これは何と尋ねる。キルソン夫妻もこれは何、これは何と来る。

「それ？、そりや、バンプウ、シユウ。それ？、あゝ、そりや、ジンセングの一種。それ？、そりや、バアドックの根です。ブルドッグちやありませんよ。」

「私しや、バアドックといふ字は知つてますが、食べたことはありません」

「毒にやなりやしませんから食べて御覧なさい。少し堅いかも知れんが」

「これは？、栗？」

「いゝえ、そりや、アロオ、ヘツドの根です」

三人とも、一品一切づゝ味つた許りのやうだ。

その次に茄子の鳴焼が出た。長たらしい説明をして、旨いから食つて御覧なさいと言つたが、

「エグブラント？」

と珍らしがりながら、一口試みて三人とも箸を置いてしまった。

ネリイの猪口はまた干て居る。注いでやると又ナミ／＼と受けた。どうかと聞くと、シャンベンよりもいゝと言ふ。そして又半分ばかり飲んだ。

「今に酔が出来ますよ」

と威かしたら

「眞實？」

と顔の色を變へたのは可笑しかった。

それから賽の目豆腐入りの味噌汁と御飯とが出た。味噌汁は不評判で、ほんの甜めずつた許りだつたが、飯はいゝといふ。その筈だ。當地でライスブデンやカレエライスに使ふ米は印度米のバサ／＼ので、それに煮き様が下手と來て居るので心がある。出したのは粘りがあつて軟かい。日本でも一寸した料理屋では出さぬ程の上等米なのだ。香の物はキャベツと蕪の新漬、それに奈良漬瓜。

純日本式に食後番茶を出した。臭いと言ふだらうともつたら、さうでも無かつた。



御膳を下げさしてから、梨子、林檎、無花果を侷めた。キルソン氏は満腹だといふ。ネリイは梨子を果物皿から取つて、

『半分づゝ食べませう』

と言ふ。こつちの梨は日本のに比べるとまづい。グシヤ／＼して居る。變な甘味だ。砂が後へ残る。ぞつとはせぬが、レデイが折角言つて呉れるのにと思つて我慢して半分食べた。考へて見ると、僕が我慢して此の梨を食べると同じで、三人とも我慢して折角の御馳走を食べて居たのかも知れぬ。でも好奇心だけは充分に満足さしたらしい。など思つて居ると、大きな林檎を一つ食べ終つたキルソン夫人が

『あなただから無遠慮に申しますが、實はこれでやつとお腹が張りました』と言つた。聞けば今日は腹を空かして置かないと、といふんで晝飯は節するし、御茶は抜きにして來たんださうな。處が矢張り日本料理は口に適せぬかして、キルソン夫人丈けは、どの皿もつゝいただけであつたのだ。

キルソン夫婦は迎の馬車で歸られた。僕はタキシイでネリイを宅まで送つて行つた。

その翌日ネリイからの手紙の中に、次のやうな文句があつた。

Very many thanks for your kindness to me yesterday. I really enjoyed myself very much; and, in spite of the queer things, I am still alive, and feel no ill effects.

(四十三年十月)

## 黄色 白菊

食堂の飾花に客間の飾床マニルレイスの花瓶用にと花物の需要が多いし、庭園といへば日本では常磐木の松や花を主とせぬ樹木を植うることだが、當地では庭園は羊齒類と草本植物とだから、自然園藝趣味が一般に洽なく行渡つて居り、出来もよく、價段も割合に廉いやうに思ふ。日本では此節ダリヤなどが流行ると新聞で承知して居るが、當地で日本の菊が盛に培養せられて居るのは意外であつた。

今日は 天長節に相當するので、自分の部屋の花瓶にも生け、宿の食卓の花瓶用に預けてもやらうと思つて、近處の花屋へ行つて莖の長さ三尺に餘る大輪の黄菊



十一月の五日

白菊を十三本買求めた。花は満開とまでは至らぬが、大きな含嗽茶碗程はある。立派なものだ。十三本で二志半即ち一圓二十五錢だった。

此間バツタシイ公園の温室で開かれた菊花展覽會へ行つて見たが、大菊もあり、中菊もあり、小菊もあり、萬菊もあつた。實生のもあつた。總じて團子坂の菊など顔色無しの出来榮であつた。

(四十三年十一月三日)

## 十一月の五日

夕食を済ましてから、久し振りにゴールド君をチヨオク、フアアムの寓居に訪ふと、外出の衣装で、ステッキを手にして居る。

『やあ、暫らく。行つて見やうちや無いか、一所に』と言ふ。

『何處へ?』

『ハムステド、ヒイスへ』

『何があるんだい』

『今日は君、ガイ、フオオクス、デイだよ』

僕は忘れて居たのだ。さうだ、今日は十一月の五日だ。千六百五年、ガイ、フオクが三十六樽の彈藥を議院の床下へ埋め置いて一舉して爆破せんと企てたその計略が見事露顯して、勿論の事死刑に處せられたが、爆破の災害を免れたのを記念する爲め、毎年十一月の五日には町々で花火を揚げ、郊外の小山では祝火ホッファイアを焚くことになり來つて居る。尤も近年は花火も祝火も下火になつたと言ふことだが、でもその花火見をかこつけに野次馬が騒ぎに出るのだ。僕も野次馬の一人となつてゴールド君と共に出かけることにした。

チヨオク、フアアムからチユウブに乗ると、二つ目がハムステド停車場だ。乗客の九分通りは此處で下車した。僕等二人は直ぐとヒイスへ足をむける。

ハムステド、ヒイスといふのは、倫敦の西北隅にある大公園で、花壇や植込は無いが、その造り飾りの無い、ワイルドなイルレギュラな處に野趣を偲ぶことが出来て、却てたゞの公園よりも散策逍遙に適するのである。海拔四百四十呎で、廣さは約二十九萬三千八百坪ある。東は約三十二萬四千四百坪の廣表を有するバアリ

十一月の五日



メント、ヒルに接し、西は一萬一千坪に餘るゴルダアス、ヒルに連続して居るのだが、非常に廣いもんだ。池がある、ブラクベリイなどの繁茂して谷合もある。樫樺などの雲突く許りに立ち並んで居る小山もある。砂利の堅くしまつて居る道の他は雑草の交じらぬ綺麗な芝生だ。飛鳥山の規模の素敵に大きいものと思へばいゝ。人波について、初の小池を右に芝生をつつきつて、西北へと進んで、ヒイスの中の最も高い處へ出た。其處に、幅四五間のアスファルト敷きの車道クルマを中に、同じくアスファルト敷きの人道が兩側に在るヒイス、ロオドといふ坦々たる大道がある。其處から北は傾斜の緩い谷になつて、灌木が其處此處にこもりと茂つて居る。此の谷をエエル、ラヴ、ヘルスと呼んで居る。

居るは、此のエエルは人で埋められて居るやうだ。僕等が今出たヒイス、ロオドも動きのとれぬ程の人出だ。然し暗いから能くは見えぬ。

路傍に聲高の物賣りの男が居る。近よつて見ると、こわい白毛で造つた、日本の拂塵はたきやうの物を幾束と抱へて居るのだ。この拂塵で、女の襟や顔をくすぐるのださうな。ゴオールド君は一ベニイはづんで一本買った。

僕等二人は、暗がりのダラ／＼小道をエエルへ下りて見る。

やがて其處此處から花火が揚がり出した。花火といつても本式のものぢや無い。大筆の軸位な筒のを、手に持つて、揚げるのだ。高くて四五間しか揚がらない。シュシュウ、ボン／＼と矢鱈に揚げる。中には巻線香の大きな形したのに火をつけて、處擇ばず投げつける奴が居る。シュウ／＼と粉火こなびを吹いてはボン／＼と八九回爆竹のやうな音をさせる物だ。何處から、何時いつ投げつけられるか判らぬから、絶えず注意して居なきやならぬ。險呑なことだ。僕等のつい一間許り前に居た或る男は、飛んで來た巻線香的花火が外套のカクシへ引懸つたのを氣付かずに居て、大きな焼け焦げを出來した。

また直径二三寸位の圓板まきいたを中心にして、同じく巻線香的になつたのがある。これはその圓板をビンで木の幹へ挿し留めて置いて、そして口火をつける。すると粉火こなびを吹いてクル／＼廻轉しながら、ボン／＼玉火を出す。

大變高い處で花火が上がると見て居ると、何んだ、何處のいたづら小僧か、松の木の上へ登つて、あげて居るのであつた。さうかと思ふと、線香花火の長いのをス



十一月の五日

ツテキの先へ結びつけてシユウノ言はしてゐる奴もある。右を見ても左を見ても、前も後もシユウノボンノで、あぶなくて仕方が無い。

向ふからイイスト、エンド者らしい廿歳許の女が来た。女だてらに例の拂塵を持つて、僕の顔を横から櫛ぐりあがつた。

『シリイ、エンチ』

と言つてやつた。すると僕の眞後で、その女がキャアツと叫んだから、何事かと振りむいて見ると、獨逸人らしい二十三四の若者が三人、その女を捕まへて、無理矢理代り番に接吻して居るのであつた。

人出は倍々多くなるやうだ。此處へ出る奴は、貧民暴漢で有名なイイスト、エンドの者が多いときいたから、間違でも起るとつまらぬと思つて、切りと拂塵を利用したがつて居るゴールド君を促して歸途に就くことにした。

ヒイス、ロオドの西詰に、かの有名なチャク、ストロオ、カスルといふ居酒屋がある。晝間、天氣のいゝ日には、此邊からの四方の眺望は仲々に棄て難い。南は幾萬千の家を距て、遠くセントポオルスの堂が見え、その先き、霞にうすくサレイの山々が

十一月の五日

朧氣に見える。西の方は森や野のづつと遠くにハロオ、オン、ゼ、ヒルが見える。東は、すぐハイゲエトの小山が眼界を遮つて居るが、北はトタリツヂ、パアネットあたりまで、百姓家や牧場が森の間に隠見してゐるのが廣く眺め渡される。

此のチャク、ストロオ、カスルの前の廣場は、眞に肩摩殺撃だ。それでも流行歌をマンドリンに合はして歌つて一文二文の憐を乞ふ大道音樂師も少なからず居る。人と人との間を縫ひ、ザ、グロオブ町へ下りると、歩道から少し引込んだ處で、パンチ、アンド、ヂユデイをやつて居つた。駝背の鼻の大きなパンチが女房のヂユデイと喧嘩するといふ、くだらぬ人形芝居だ。その横を通る時に、妙な面をかぶつた、十一二と覺しき男の子が、

『チャバニイズ、セントルマン、ベニイ、ブライズ。』

と言ひつゝ、つきまとふて来た。ポケットから銅貨一枚出してやつたら、

『サンキュウ、カヅノオ』

と、飛んで行つた。斯んなこととして六ペンスも溜めて花火の錢にするのであらう。一時二時頃迄も賑ふといふことだ。道理でグロオブ町はヒイスの方へ向ふ人



許りであつた。

(十一月八日)

### 市長就任式行列

倫敦第五十四回目の市長<sup>ロイヤル・メヨア</sup>長<sup>サア</sup>、タマス、エジイ、ストロング Sir Thomas Vezey Strong 氏の就任式<sup>イノキエレシヨン</sup>に先だつて行はるゝ行列は、舊慣に依つて、今日——十一月九日の正午十二時を以て開始された。

朝食をしたゝめながら、新聞の天氣豫報欄を見ると、

『寒し、雨又は霰又は霰、西の軟風』

とある。然し庭の芝生は眞白の霜で、寒いには寒いが、空はからりと霽れて居る。

食事を終へて——九時前——窓の外<sup>そと</sup>の寒暖計を覗いて見ると正に華氏三十五度。寒い筈だ。一年に一度しか無い此の市長就任式の行列、來年は折能く見られるかどうか分らぬ。今日の見外づしてはと、厚い外套を着こんで、ステッキ片手に停車場へ駆けつける。

オルダアスゲエトの停車場を出たのは九時半頃だつた。南へ舊郵便本局前進んでセント、ポオルス寺院の方へ行つて見る。

雑沓の爲めに破損されてはとの懸念からか、店頭<sup>かた</sup>のシヨオガラスの前を厚板で圍つてある店が多い。二階三階の窓からは縫模様のある毛氈を垂らして、斜めに國旗を出して居る。そして此邊では、三階の窓から向ひ側の家の三階の窓へ綱を張り渡して、それへ萬國旗を數多く垂らして居る。街燈は、柱<sup>むす</sup>の人長より少し上の處に、八方へ垂れるやうにユニオンジャックの小旗を結びつけて、飾られて居る。景氣がいゝ。

さて何處で見物したがよからう。三時間も四時間も立ちづくめで待たなきやならんやうでは困るがと、セント、ポオルスの裏通りを歩いて居ると、幸ひ

『オフイシャル、プログレム、ハ』

と叫んで通行人に賣りつけて居る婆さんが居たから、一片<sup>ペニイ</sup>出して一枚貰つた。

『正十一時四十五分を以て先頭ギルドホオルを出發し市長は正十二時に出發すべし。通路は左の如し。』



とあつて、グレシヤム町、セント、マルチンス、ル、グラン、オルダアスゲエト町、パアピカ  
ン以下十八の町の名が列記してある。フリイト、ストリイトからして式場たるロ  
オヤル、コオツ、ヲヴ、ヂヤスチスに入るのだといふ。尤も歸途はストラランドから町  
を五つ、近路を取つてギルドホオルへ歸るのである。

通行人は多いが、眞の見物人はまだ少いらしいから出がけの處で見ることには決  
定して後と戻りする。そしてグレシヤム町から右へセント、マルチンス、ル、グラン  
へ曲る、その向ひ側の石敷の人道に陣取ることにした。グレシヤム町から進んで  
來るのが遠くから見えて、曲つて行つた後まで見えるから、頗る形勝の地である。』  
車馬道を直ぐ前にしてスナツキを突いて立つて居る。退屈だ。寒い。煙草を  
一本ふかす。追々と僕の右にも左にも同類が立つ。向ひ側の人道にも次第に同  
類が出來た。車馬道は、往來止めにならぬうちにと、石炭の袋を山と積んだ荷車、品  
物配達の車、バン屋牛乳屋の車、ホオスバス、キャツプ、モオタア、遅いの、迅いの、織るや  
うに往來する。

僕の後ろは二列になつた。やがて三列になつた。向ひ側の人道も二列になり、

三列になつた。

十一時を過ぎると車馬は往來止めになつた。車馬が車馬道を通らぬ代りに四  
五丁北のオルダアスゲエト停車場から一分置き二分置きに吐き出す見物人が、何  
處か明いた場處は無いかと、續々北から車馬道をあるいて來る。僕の左側には十  
四五のお店ものらしい男が立つて居る。右隣には二十三四の女が居る。その後  
ろには其の連れの二十七八のが居る。切りとベチャクチャしやべる。

横丁から砂利車を曳いて山高帽の人夫が二人出た。一人は梶棒をもつて居る。  
一人はシャブルで砂をすくつて程能く往來へ撒いて進む。小豆粒程の砂利の少  
し交じつた綺麗な砂だ。その後から、大きな塵取とブラシユを提げた子供が、往來  
に散らばつて居る紙切れや屑切れを掃きとつて行く。郵便馬車が此の車馬止めの  
道を己れ許りはと轆々と走る。

『カント、ストツブ、ザ、ロオヤル、メエル』

『ノウ、ゼエ、カント、カンゼイ』

時々走り雲が日を遮る。



紀元千二百年頃の倫敦市長の行列



『イツツ、ダル、アゲエン』

雲が通りすぎるとカッと日があたる。

『ゼ、サン、イズ、ゴ、オイン、アウト、アゲエン』

騎馬巡査が出て来て、道をうろついている奴を去らせやうとする。道の両側は、もう三重四重の人垣になつてゐるから、行き場が無い。左側のを追ひちらすと右側をうろつく。右側へ巡査が行くと、左側へ行く。

『ゼ、エ、ア、ア、スタンヂン、バ、ア、バスリ』

『エ、エ、ス、ア、イ、ノ、オ、ゼ、エ、ア、ア』

『ウ、フ、——ゼ、エ、ア、ア、ラ、フ、イ、ン、グ』

應援の騎馬巡査が来た。

『モ、ア、ボ、リス、メ、ン、カ、ミ、ン、ツ、ド、ロ、オ、ゼ、ム、バ、ツ、ク』

そのうち向側の二階三階の窓々には、見物客の

顔が見えて来た。子供が多い。三本目の巻煙草をふかしながら、其見物客を眺めて見る。

『ル、ツ、ク、ア、ブ、ゼ、ア』

『エ、ア、？——オ、オ、イ、エ、エ、ス、ア、リ、トル、ネ、ク、ト、オ、リ、ア』

如何にも可愛い、下げ髪、濃茶天鵝絨の服を着た女の子が、真向ひの二階の窓から首を出して居る。

僕等三重四重の人垣の後ろを、まだ物賣りの女が、歩るいてるやうだ。

『ブ、ロ、グ、レ、ム、ア、ガ、イ、ド』

『チ、ヨ、コ、レ、ツ、チ、ヨ、コ、レ、ツ——ベ、ネ、イ、イ、チ』

僕の右側の女は之に對しても

『デ、ア、——ホ、ワ、ツ、ト、ア、ヂ、イ、ス』

前をぶらついてた連中は、到頭多數の巡査に、何處へか追ひやられた。ガタアに七八間置きに立つてる巡査が能く見えるやうになる。そのうち遠くで樂隊の音がする。



『ゼ、バンド、イズ、カミン、——ヒア』  
『イエエス、アイ、ヒア』  
いかにも来るわい。

先頭は、服と同じ色の紺のナボレオン帽を冠つた騎馬巡査一分隊だ。

次は、肋骨の黄な、白帽の第七驃騎兵の分隊。次は赤の飾り毛の立つた黒帽の砲兵乗馬隊。こいつは服は浅黄で肋骨は黒い。次が倫敦テリトリアル、トルウブ。倫敦市ヨオマンリイ樂隊。白毛の立つた黒帽の、肋骨の黄な名譽砲兵隊の乗馬隊一小隊。同じく名譽砲兵隊の徒歩半小队。倫敦市ヨオマンリイ(ラフ、ライダア)半中隊。倫敦市第一旅團野戰砲兵隊一分隊。倫敦市フュジイル兵第一、第二、第三、第四大隊が半中隊づつ。倫敦市旋條銃第六大隊の半中隊と第七大隊の一中隊。倫敦乘馬旅團(輸重糧食縦列)の分隊。第一、第二、第三倫敦市野戰病院の一分隊づつ。第一、第二倫敦ゼネラル、ホスピタル分隊。第一倫敦衛生中隊の分隊と順次ゆるやかに行進する。

次が、キングス、ロオヤル、ライフル、コアの第一カデット大隊の樂隊。それに續い

て熊毛の大きな帽を冠つた、赤服のロオヤル、フュジイル兵の第一カデット大隊の一中隊。黒服のロオヤル、ライフル、コアの第一カデット大隊一中隊。

次がマリオン、ソサイテイの練習艦ワアスバイトの樂隊と生徒だ。笛と太鼓とから成つて此の樂隊はビクビクビクビクドンドンと仲々賑かだ。水兵の服をつけて居るので非常に可愛らしい。

この後は諸組合役員の行列だ。第一が履物製造組合だ。八旗の大旗の次に、組合のビイドルが居る。組合の役員の乗つて居る馬車に次いで、チャブレンとクラアクを同乗せしめて組合頭取と副頭取とが四頭曳の馬車で堂々と進む。運動會の時にかぶるやうな紺の烏打をかぶつた、赤服の馭者の方が見る眼には綺麗だつた。尤もチャブレンもクラアクも式服を着て居るのである。

次は馬具商組合の役員。バンナアは十二旗あつた。こいつはクラアクが別な馬車に居た。頭取はその次の同じく四頭曳の馬車に居たんだがスタッフを捧げたビイドルは徒歩で隨行して居た。

次は果物商組合役員。旅宿組合役員。



その次にテリトリアル軍の第一倫敦アアミイ、サアギス、コアの樂隊に續いて、鉛工組合のバンナア、前市長ニル氏のバンナアが進む。

次は私立消防隊の蒸汽ポンプ。次が倫敦消防隊の分隊。眞鍮のナボレオン帽形の兜が勇ましく日に輝く。

次が倫敦チャレンジ、シイルドのコオボレエション。その後が、倫敦聯隊(ホストオフェイス、ライフルス)第八大隊の樂隊。それから革商組合のバンナア、倫敦市のバンナア、ユニオンチャックと三旋續いて、この組合の役員の馬車。それから、ロンドン、コオボレエションが保管して居るオオブン、スベエスの大旗が五旋。大きさ疊三疊はあらう。銀金絲の縫ひ美しいものだ。エストハム、バアク、エツピン、フオレスト、バナム、ビイチエス、グルスドン及びサレエコンモンズ、ハイゲエトウツツの旗だといふことだ。旗持はいづれも天鷲絨の、ビイファイターアの着て居るやうな古風な衣物を着て居る。次がファニングガムの少年樂隊。

その次が有名な少年斥候隊ボーイスカウトの一隊だ。先頭にブッスバンドを置いて、カアキ色の可愛いのが歩調を揃へて進む。鍛工、大工、自轉車隊、乗馬隊、信號兵、野戰病院隊其

他各種の少年兵を四人八人づゝと選抜して出したものらしい。今迄無言で行列を見て居た見物は

『オオ、ラヅリイ』

『ブリッテイ』

と賞めそやす。向ひ側の家々の窓から見て居た女子供は拍手したり、ハンケチを振つたりする。今迄の行列のうちで、これが一番人氣があつた。

それから倫敦監督教會が組織して居る少年隊ラッパブリグエドの分隊、ロオマン、カソリックの少年隊イストブリグエドの分隊に續いて、軍樂隊を先頭にしたロオド、ロバアツボオイスの少年隊が進む。野戰機關銃や、諸處で得た勝利記念牌を載した砲車が幾つか通つて、コンミツシヨネエル隊の樂隊、倫敦フュジイル聯隊第二大隊の樂隊とで、兵隊の行列は終つた。

この後が沙翁記念會の催しにかゝる時代行列だ。沙翁の戯曲中、場を倫敦にとつた劇中に現はれる代表的人物を出したのである。四組ある。

第一は千四百十五年、顯理五世がアチャクウル戦後倫敦へ歸つて來る時の有



様を現はした行列だ。沙翁の「顯理五世」の五幕目には

And solemnly see him set on to London,  
So swift a pace hath thought that even now  
You may imagine him upon Blackheath;  
Where that his lords desire him to have borne  
His brushed helmet and his bended sword,  
Before him, through the City; he forbids it,  
Being free from vainness and self-glorious pride;  
Giving full trophy, signal and ostent,  
Quite from himself, to God. But now behold,  
In the quick forge and working-house of thought,  
How London doth pour out her citizens!

とある。正に之を現はさんと試みたのである。

最初に旗持が四人、手銃持が四人、バンナアを持つたメン、アト、アアムズが九人、鋼鐵の兜を冠つて、紋章のある楯を左手にしたナイトとノオブルが九人、ガモイス侯、古風な弓を手にして居るロングボオメン六人、矛を肩にしたバイクマンが四人、

捕獲した敵の軍旗を捧げて居るメン、アト、アアムズが三人、貴族が三人、將軍サア、タマス、エルビンガム、ヘラルドが二人、ワアキツク伯、その次に四人の轎夫がかついでる昇床に乗つたグロスタ侯、エスクワイアを供に連れた盛装のノオブル六人、戦場で翻へした軍旗四旗をかついだ旗持四人、王旗を捧げてるのが一人、エスクワイアを連れたヘンリー五世、バンナアを持つたメン、アト、アアムズが二人、スタンダアードをかついでるのが四人。かういふ順序だ。

鎖帷子に身をかためて、紋章鮮やかな楯を手にしたナイトや、メリヤスのズボン下めいた物を穿つて、赤黄色のんだら直垂様の上衣を着た轎夫など、古繪巻を見るやうな心地がした。見物の歡呼喝采は言はずものごとである。

第二のは、サア、ジョン、フォルスタフが、イイスト、チイブの『ボアス、ヘッド』を出かけた時の様を現はしたものだ。沙翁の「顯理四世」第一、初幕二齣目だ。フォルスタフ、近侍、其他の七八人の後から軍旗を捧げたのが四人。

第三が、千四百八十三年グロスタア侯リチャアドがエドワアド五世並に、ヨオク侯と共に倫敦塔に向ふ行列を現はしたものだ。オルダマン六人が先頭で、王の侍臣た



りし貴族三人、バキンガム侯、時の倫敦市長、ヘラルド二人、グレイハウンドを曳いて侍臣、グロスタア侯、エドワード五世、ヨオク侯、サア、キリアム、ケエツビイ、矛兵十二人、貴族三人、四人の旗持といふ次第。沙翁劇の『リチャード三世』三幕目第一齣の

Welcome, sweet Prince, to London, to your chamber. といふ、あの幕に出る人物を現はしたのである。

第四が、恰も目下ヒズ、マジエステイ座で興行中の『顯理八世』の二幕目第四齣、時は千五百二十八年、女王カザリンに關する裁判へ、王とウルジイとが出向く行列を現はしたものの。戟兵が二人、それに次いで頭から長い黒い衣をかぶつて居るモンクが六人、ヘラルドが二人、貴族が十人、近侍、チャブレン、劔を捧げて居る者、大僧正ウルジイ、大僧正カムベイウス、顯理八世、四人の旗持といふ一行である。

此の間芝居で見たのよりも趣味が深い。衣服が總て古色を帯びて居る。見物の喝采は殊に四番目のに注がれた。

少し間を置いてカウンテイ、ラブ、ロンドン第十一大隊の軍隊、文房具組合の役員



の乗つた馬車が幾輛か續いて、さてそれから市参事會員の旗下級助役が乗つてゐる馬車、他の高級助役員の馬車と續く、馬車が次第に美しくなる。馭者の服装も漸次華美のになる。

次がチャブレン同乗で、シエリフのバキンガム氏、四頭立の公式馬車だ。

次が、同じくチャブレン同乗で、オルダマン兼シエリフのジョンストン氏、これも亦同じく四頭の公式馬車。

その後、に居残りになつた市参事會員と、書記長と、退職になつた市参事會員との馬車が續いて、第七驃騎兵の樂隊を前に前市長ニル氏の公式馬車。その次に第一近衛兵の乘馬樂隊を前にいよいよ、新市長ストロング氏の六頭曳の公



式馬車が来る。

道の両側の見物は、ハンケチヲ振り、帽を振つて喝采する。車中のストロング氏は左右を顧みつゝ會釋の絶え間無しである。

華美なものだ。馬車の前にはトランベターが徒歩して居る。その後には馬上のシチイ、マアシャルが居る。馭者は盛装だ。三者とも服装は異ふが金光燦として人目を射る。劔持ち、メエス持が隨行して居る。メエス持の服装が日本の勅任官の正装に一寸似て居る。他は推して知るべしである。

馬車は第七驃騎兵の分隊に後方を警戒されて緩々と進む。市長就任式行列はこれで終つたのであつた。

行列は、物珍らしい僕には、どの部分も面白く美しく眺められたが、新市長の前後を護つて居た騎兵——黒い帽に白い房を立て、胸には黄な肋骨をつけた驃騎兵と、紺天鵝絨の烏打めいた帽をかぶつて、赤地のフロック風な上衣へ、地の見えぬ許りに金糸の縫模様あるのを着て居た近衛兵、それと少年斥候隊、それと時代行列、この四つは長く長く僕の記憶に残ることであらう。

行列が通つてしまふと、今迄神妙に見て居た兩側人道の見物は、いづれも車馬道へ推し出て、南へ北へと歸路に就く。僕も人込みのせぬうちに、何處か近い停車場へ行かうとしたが、初めからでは三時間も立ち詰めで居たので、兩膝頭が強張つて歩くけなかつた。

此の行列の起源は餘程古いもので、極の古昔は樂人馬上のビイドル、市參事會員、市吏員より成つた質素な行列であつた。千四百一年に市長になつたジョン、ワルコットは、出が雜貨商人だつたので、雜貨商組合が奮發して、六人の樂人に四十志、途中それ等に食はした晝飯と葡萄酒とに二十一片、ビイドルの馬代に四片支拂つたといふことが記録に残つて居る。質素な行列といふことは之でも窺はれる。

行列が華美を極めたのは、エリザベス治世中で、此時分には、ギルドホオルへの歸り途に、頗る手のこんだ寓意のある見世物を用意しなきやならぬことになつて居つた。勢ひその見世物に就ての相談手を要することになり、文士に依頼して、歌を作つて貰つたり、餘興の趣向を考へて貰つたりするが常となつた。ベン、ジョンソンもタマス、ヘエウツドも依頼を受けて餘興の趣向を考へたことがあるといふ



ことだ。

それから、水上行列も屢々行はれた。深紅の揃ひの衣装をつけた漕手が乗った公有の傳馬船が出る。文房具組合、染物屋組合、其他の私有の傳馬船が出る。そして市長の乗った公式の船に随従して、テムズ川をエストミンスターへと漕いで行つたものださうな。が、水上行列は次第に行はれぬやうになつて、千八百五十六年にマス、グエスタド、フイニス氏が行つたのが最後の水上行列であつたといふ。

その後は騎馬行列ばかりになつて、それも近道を行つたものださうなが、千七百十二年に初めて公式の馬車を用ひることになつた。現時の様式の馬車は、千七百五十七年から用ひたので、その當時のは、下級助役が醸金して六十磅で造つたものださうな。それからはオルダマンに就職したものは、必ず馬車修復料とし、六十磅、市長は百磅寄附しなきやならぬ掟になつて、次第に壯麗な物に改造修復せられて来た。今はゼネラル、バアバセス、コミチイが馬車修繕を司つて居る。古昔はエストミンスターにロオヤル、コオツ、ワヅ、チャスチスがあつたのだが、ストランドへ移轉したので、道程が非常に近くなつてしまつた。本道を行つては餘りにあつけないので、それで現今のやうな道順で、大廻りに練つてあるくんだといふ。

年俸一萬磅即ち十萬圓の倫敦市長は、別に一年十萬圓以上の自腹を切らなきや、勤まらぬと聞いて居る。此行列の素ばらしいのを見ても萬事が窺はれる

(四十三卷十一月九日)

### 神秘劇を観る

十二月の二日、閨秀作家ハラデン女史 (Bartrice Harraden) の招待で、始めて神秘劇といふものを観た。藝題は『渴仰』。作者はバクトン (Buckton) 場所はラツセル、スクエア停車場近くの『バスマリア、エドワヅ』といふ極めて小さな會館。演者は總て素人。

神秘劇は英國最初の劇である。僕は何も演劇史を書く積りは無いが、後セント、オルバンズ寺院の住持となつたジェフレエといふが發企して、千百十年頃に興行されたのが抑も英國での演劇なるものの縁起である。英國でも希臘や他の世界各國の劇と等しく劇は宗教に源を發して居る。日本でも二十五座の御神樂三十



五座の御神樂と宗教劇があつたやうに、基督の教旨、傳説などを文字を解せぬ當時の人民に洽ねく知らせる爲に、聖書中の事實や使徒に關する物語を材料にして粗笨な宗教劇を作つたのだ。これが即ち神秘劇である。勿論最初は舞臺は寺院で、役者は僧侶であつたが、段々流行もし、脚色も複雑になり、寺院では不都合、僧侶では間に合ひかぬるので、興行場も出來、僧侶で無い者の專業の役者も出來るやうになつた。千二百六十五年前後のことである。千三百年頃から千六百年頃まで行はれた脚本で、現存して居るのが九十五種ある。散佚したものは固より之に數倍することであらう。

この神秘劇が一變して教訓劇モラル・プレエとなつた。人間の善徳と惡徳とを比喩的人物にして、善徳が勝つて惡徳の敗けるが筋であつた。それが登場人名が抽象名詞の知慧だとか不義だとか姦淫だとかちや看客の同情を惹かなくなつたので、歴史中の人名を借りて諸徳の抽象名詞の代理をさした。これが史劇の、即ち正劇の端緒となり、別に宴樂の餘興に、問の狂言として演ずることの流行つた間劇イタラックが喜劇の端緒となつたのである。

斯んな講釋めいたことは措いて、名ばかり知つて、神秘劇とは何んな風なもので、何んな風に演せらるゝものか知らずに居らるゝ人もあらうかと思ふから、當夜見た『渴仰』の筋書所作を記憶して居る限り詳細に書いて御目にかけてやう。

拍子木が開幕を観客に知らすと、いづことも知れぬ遠くからオオボオ、笛、絃樂器より成るオオケストラが聞こえる。それに合せて『神汝等を安んじ給はん、樂しき人達』*God rest you, merry gentlemen!* のカロールが多く、男子の聲で聞こえる。歌が止むと、黒衣黒帽の老人の序詞プロローグが緞帳の前へ現はれる。緞帳は渴仰の住家の門を現はして居るのである。序詞は

『見よや大地が夜を徹して年月を測るがごと、油斷無き精靈は眠りもやらで日を記し給ふ。今宵は國民ども、悲歎を捨て、神を讚美の聲高くクリスマス祭クリスマスの祭祭りすなり。されば、生命と光榮との大神が渴仰を厚遇せんとて來り給ふ物語を、品よき技わざもて描き出さん此夜の催もよほはし、観客士女の眷顧を希ふになん』と述べて、舞臺から下りて見物席へ入る。



眼に見えぬオオケストラがバストラル、シムフォニーを奏する。終ると緞帳が緩やかに揚る。

渴仰女は左手の低い白い寢臺に近く立つて居る。右手には小さな食卓があつて、その上にパンと葡萄酒の罇と盃が載つて居る。食卓に近く床の上に水差と小盥がある。刺繡の枠と其前に床几が一脚。神龕の前に小さなラムズが吊るされて居り、一方の壁には隅に何やらの繪が一枚、それに近く鳩の籠が吊るされて居る。背景には淺黄の紗の幕が張つてあるのであつた。

渴仰は、『今宵は疲れし此世もいと静かなり。野には牧羊者羊を守れど、町に住む我等は門を開いて二千年この方我等の王なる神子の來り給はんを待つなり。來ませども來ますとは知らず見もせねど、今宵は幾多の道を辿り給ふことにやあらん。年毎に、今宵此の時刻に此の世に現れ給ふとか、生れ給ひし折宿らん家も無かりしかば、獸類の秣槽を乞ひ給へりしその古昔のことを偲びて。此日は左はあらせじ。陋しくはあれど我が此の寐床に來給へ。歩を狂げて我が家の食をみそなはせ給へ。朝の一食を節して残し置きし此の貧しき食を。あゝ神よ、神を宿さ

ん程の身にてあらんことを。渴仰は斯く言ひながら神龕を見上げて、ラムズの光を明くし、門口を見たり、身の周邊を眺めたりして、小聲で『夜は暗し、星の無き夜、家無き者外にあり。心して、主の爲に隠れ場構へん』云々の歌をマックス、カロールの節で歌ひながら刺繡の枠に向つて坐る。渴仰は質素な清々しい衣物を着て居る。小聲ではあるがいゝ聲だ。カロールの節が面白い。僕は一種云ふに言へぬ清い神神しい感に打たれた。

『玉を鏤めし殿居には非じ、されど静かなり我が小屋は。王の宿りませしことはなけねど、愛は常に棲めり。神の御子よ。夜は暗し、我に來給へ。我が渴ける心を、今宵汝がベスレヘムとし給へ』

と穏やかに歌ひ續けて居る處へ、上手下手から、その姉妹の欲望と名譽とが現れる。欲望は華麗眼もさむる許りの衣裳をつけて居り、名譽は甲冑に身を固めて居る。欲望が先に入つて來て、夜遅くまで仕事して歌を歌ひ居るとはどうした理由かと思ひ、王を迎へる歌だ、胸が充ちて居るから手が忙しいのだと答へる。名譽はまた、馬車も通り得ぬ斯んな裏町へどうして王が來らるゝことがあらう。王が貧し



き者の家を音づれ給ふたことは古昔のことである。氣まぐれ者よ 主府の露臺へ行つて死せる英雄の事業を語る城壁の紋章を見よ。名譽は金の喇叭を口にして、世界を吹き廻る風を支配して居る。人は驚いて叩頭して名譽を崇めると斯う言ふ。渴仰は疑はしげに、自分は多くを願はぬ。見えぬ聲が神の子來ますといふが耳にきこえると答へて覺束無げに周圍を見廻す。慾望は、肉は食はで月の光を食ひ、空想に餓死するのかと食卓の方へ行つて嘲り氣に、能くもまあ斯んな子供らしい食物を備へて置くことか。水とパン！ハハ、と葡萄酒の壺を取上げてラムプに透し見ながら、すこうし赤くなつて居る。自分で壁へ這はした葡萄を摘んで來て、自分の手で押潰したんだらう、ハハハと笑つて、ふと遠くの音楽に耳を敬て、密柑の森の中の宮殿へ行かう。衣物が無くば衣物も寶石も貸さうと唖かし、渴仰の頭に手をやつて、王冠をも冠るべき頭である、無邪氣の呼吸吹く此の胸は毛皮をまとい天鵝絨を着くべき胸である。男の子の崇拜も受くべき身なるにと、渴仰の心を動かすやう力め、名譽の方を向いて、自分は慾一方で他人に寛大で無いとは言はれまいと言ふと、渴仰は、打やつて置いて呉れ。これで満足だ。華麗な衣物着れば眼

が眩まう、と言つて、

『彼は來ます、といひし彼の聲は！耳近くきこえしことよ』  
とつぶやく。名譽は

『甲斐無しよ。いざ去らん。汝は宮殿の宴樂に、妾は城壘に』  
と勇ましげに右手へ入る。慾望は恍惚して居る渴仰を見返つて再び手を差伸べて誘ふが、渴仰は首を振つて物を言はぬ。諦めて、慾望は肩を聳かして左手へ入る。後に残つた渴仰は、

『機は失したれども望は保てり。夜明くるまで失ふまじ』  
と言つて耳を敬てる。夜は静かだ。門口へ出て空を見上る。

『御空の星のみ珍らしくも近く見ゆ。遠き樂の音に耳をばだつるやう』  
と囁くと、遠くに「グロリア、イン、エキセルシス」の聲樂が嚴そかにきこえる。

『俄に響く彼の樂の音。彼を導ぐにやあらん。左なり、來ませるなり。彼と共に行き給ふ國王達の鯨波なりしよ。妾も行いて加はらん。瞬時なりと我が家に憩ひ給へと乞はん。』



と、神龕へ行つて小さなラムプを外す。

『許させ給へ。肉の御ん身に會はんとてなれば』

と、段を下りると、右手から貧しげな道路修繕の夫が一人、ぼろ／＼の衣物に匙鍬と右手籠を肩にして出て来る。後から、同じくぼろ／＼な衣装の女が破靴をひきすり／＼現はれる。古いシヨオルに赤子を包んで抱いて居る。

『乙女子よ、我等に一夜の宿を貸し給へ。飢と渴に呼吸も絶ゆべかめり。人みな出で去りて町は空しきに、我等の力は竭きんとす』

と男が言ふ。渴仰驚きながら、

『旅人に見ゆ。衣服は古りて外國の姿なり。いづこよりか來給へる』

と問ふ。此國の海邊へ漂ひついたが、國王にも奴隸にも拒まれて宿るべき家が無い。寝ぬべき床にあらば納屋の隅にても今宵一夜の宿をと頼む。渴仰は家中を見返りながら、寢床もあり、パンと葡萄酒もあれどもと言ひ淀むと、男は手を揚げて、

『躊躇ひたまふは！仔細は知れり』

といふと、

『いなとよ聴き給へ。我家に有てるもの他には無し。備へし物は他し客の爲なり』

と、昨夜來たなら備へた物悉く供したことであらうが、今夜は希望があるので、と言溢る。どんな希望かと訊ねると、王が此の時刻に國內を巡遊される。その古昔赤子の折宿するものも無いので牛馬と同じ小舎に眠られたことを僥びて、今夜は誰にも承認された王となつて巡遊をさるゝ。野をよぎる時その行列に遭ひはしなかつたかと訊く。男は途中そんな行列には遇はなんだが、疲れた牧羊者には遇つた。牧羊者は羊欄の戸を閉めかゝつて居たが、わざ／＼自分等の爲に麵包と乳とを呉れたと語る。渴仰は、でも人々の鯨波の聲を聞きはしなかつたか、獸舎を寢床とし給ふた王の歌を歌つて歓迎する人々の聲を、と尋ねると、その男は、

『獸舎にても我等には事足らん』

と言ふ。渴仰は猶ほ躊躇するので、女は男の顔を見上げる。二人とも嘆息をついて去りさうにする。渴仰は彼等が二三步行き過ぎるのを見て、手を擴げて



『停り給へ。來給ふ時宮殿を見給はざりしや、密柑の林の中に建てる金銀珠玉の宮殿を。笛の音、ヴァイオルの音楽しかりけん』

といふと、男は振返つて、

『笛の音をきゝたり。我等は門に立ちて案内を乞ひしも、宴樂のかしましさにきこえでやありけん』

『さらば、主府の城門を過ぎ給はざりしや。批難と賞讃とを願ち、人の所行の大を量りて我が姉居たらんに。おん身の物語に何とか言ひつる』

と問ふと、

『一言言ひしが解しかねたり。喇叭の音喧しく、我等が乞ひ求むる聲を没したり。獨りおん身を——おん身一人我が言葉を解し給ふことを知りぬ。されど去りなん。我等が砂埃の足はおん身の家を汚さん』

と言ふと、渴仰は熱心に

『再びのたまうな。恥しきかな。許させ給へ。麵包も水も葡萄酒もおん身等に捧げん。我が主の君を休ましめんと思ひし床も捧げん。快よく一夜の宿

を貸し申すべし。忘れさせ給へ我がなめげなりしことを。愚かなりしよ。』

と渴仰は段を下りて女に手を貸して室内へ招する。男は後から静かに隨いて段を上る。と、更に一層盛んにグロリアの唱歌が遠くできこえる。渴仰は客の男女が衣服の粗末なのに似げ無く威嚴のあるのに愕く。二人は床の上に腰を下ろしそれから男は立つて食卓へ行つて葡萄酒の罎を取つて來て女に侷める。まるで長く此家に居た人のやうな素振である。渴仰は暫くの間留守を頼むから休む用意をして呉れ、自分は野原でのあの歡呼の場へ行つて、せめて王の姿でも拜みたいからと言つて、いそ／＼出かけて振返つて見ると、男は無言の儘その手をもたげると、緞帳がゆるやかに下りる。

緞帳の下りたのは、渴仰の家の門口が鎖つたことを表すのである。渴仰は星を見上げながら

『御空の星！何とて斯くは静に、斯くは清く、斯くは高き！何とて今宵斯くは近き！我に輝くは憐みてにや、歡びてにや。あゝ、樂しげなり彼の樂の音。いざ行かん』



と言つて右手へ入る。

幕の下りて居る間遠くで唱歌の聲がする。「眠り給へや、神の御子、休み給へや」  
云々の唱歌であつた。

その唱歌の終る頃、絨帳が揚る。星月夜の野原だ。二人の牧羊者が地上に横になつて居る。例の牧羊者が持つ杖を有つた、丈夫さうな髯の長い老人だ。二人の他に年の若い男が居る。これは小枝を搔よせては焚火を消さじと力めて居る。今一人、鬚の長い老人が居る。是は牧羊者と青年との間に、岩に腰かけて、じつと正面を見つめて居つた。左手に羊欄の一端が見えて居る。背景は例の淺黄の紗の幕で、處々銀紙の星が吊るしてあるのは却て趣味を添へた。

青年が、子羊が羊欄で生れたが、でも乳を吸ふやうだ、親の牝羊は初のうちは非道く鳴いたが、もう静まつたやうだ、と言ふと、老人は、今夜は何處も静かだ、あそこに希望の星が輝いて居る、クリスマスの表示だ、古昔から同じだ、嗚呼、あれを見てから、これこれ七十になると、斯う言つて右手の星を見上ると、第一の牧羊者は笑ひながら、古めかしい譚は止めよ、乾いた乳房のやうなもので役に立たぬ、知慧の實に齒を折

らせまいと旨い乳でこれ迄長く賺し欺されたものだと言ふ。老人は、若い者！汝も年がよらうから、希望の光を手頼らぬと、前は眞暗だと警める。若者は、今夜は嘗て自ら牧羊者と言はれた王が此世の羊欄を見舞はれるといふぢや無いかと言ふと、第二の牧羊者が、そんなことが一度あつたにしても、今彼を見る人は無い。そんな徴候が何處にあるか。徴候がありや信じてもいゝが、今迄彼を信じて待つて待つて死んだ者が幾千人と數知れぬと言ふ。老人は、渴仰と共に其後を追はゞ必ず見出すと告げる。すると第一の牧羊者が、何處へ隨いて行かう。飢渴と富貴とが全土を二分して居る。一方にはあり餘る逸樂があり、一方には貧賤がある。つい先刻通つた土方らしい旅の夫婦者、麵包の屑を與つたら涙流して喜んだ。あんなのも居る。王は此の世界は巡遊なさらぬと言ふと、老人は、此の世界を巡遊なさるに定つて居る。いつかは渴仰と共に己が家に無言で客となつて來て居給ふことが知れやうと言ふ。青年はその時、渴仰がラムプの光を手頼に此方へ野原を辿り來るのを見つけて、幽靈か、道に迷ふた乙女かと怪しみ見る。渴仰は右手から出て來て舞臺の中央に立つ。そして、何事を語つて居るか、と實は怪みながら立聞き



て居たのだが、何んといふ不祥な話をして居ることか。初めて未明の光明を齎らした牧羊者とも思へぬ。牧羊者とは眞實かと詰ると、第二の牧羊者が、光明を齎らした古昔もあつたが、今は困苦の爲に耳もきこえぬ。遠くの歌のきこえる人もあらうが、自分等は夜半後夜番をして居るが何の音もきこえぬと言ふ。渴仰は、きこえぬ筈は無い、耳をすまして聴けと言ふ。すると遠くではあるが、グロオリアの唱歌がフル、ゴオラスを爲してきこえる。舞臺は暫時の間光明が射す。

三人の牧羊者は飛立つて渴仰の顔を審しげに眺める。渴仰は、たゞ耳を欷てた儘で見物の方を見て居る。牧羊者のうち、誰一人唱歌の聞こえ来る方向を見て居るものが無い。光明は歌と共に漸次消え失せる。

第一の牧羊者がこりや不思議だと老人の方を見ると、老人は全く無感覺なやうにじつとした儘で居る。あの恍惚たらしむる天樂がきこえなかつたかと老人に問ふと、町にも野にも充ち満ちた天樂は自分は夜もすがら聞いて居ると老人は答へる。青年は、急いで彼の後を追はう。道案内して、と乙女を促す。渴仰之に應じてラムブを手に左手へ行く。第一の牧羊者は立上つて、一所に行かうと老人を促す。

すと、老人は何處へ行くのかと訊く。三人とも、王を迎へん爲め、といふと、自分等が無駄話して居る間に、王は前を過ぎられた。自分は御顔を拜んだ、といふ。三人驚愕の素振をする。青年は、年齢の加減で見えぬ物を見たのであらう。残して置いて急いで行かう。胸は燃える許りだと、左手へ去る。

と舞臺正面紗の幕を透して天使の一群が見えそめる。そして聖歌を合唱する。『汝が年よれる下僕を受容れ給へ、此世去らせ給へ、汝がいたましましき此世に、うるはしき御顔の過ぎ行くを拜みたれば、』

といふやうな聖歌だ。老人は、両手を空高く差上げて何物か空に認むるやう仰ぎ見ながら、仰向けに倒れて岩の上に呼吸絶えてしまふ。

音楽が終ると、右手から紫衣金装の王が、黄金の頭縷に統治者たるを示して静々と出て来る。そして此世の王なるものの、更に一層偉大なる王に比すれば、月鼈も音ならぬことを獨語しつゝ、之に廻り會ひたしと長科白を言ふ。左手から第二の王が登場する。これは哲學者を表はす蛇の頭縷を纏ふて居て、手に小箱を携て居る。互に問答あつて、第二の王は、世界の秘密を知るとも心の煩悶は絶えぬことを



語る。其處へ第三の王が左手から登場する。鬚は無い。インスピレーションを表はすスパイクの上に寶石の燦めく圓環を頂いて居て、香の煙る香爐を鎖で手に提げて居る。二人の王に挨拶して、自分は失神中王を見たが、王の衣服に、誰も了解出来る國語で生ける文字が現はれて居た。それは平和の二字であつたといふこと、平和は讓歩して統治するに依つて得られ、知つて而して愛することによつて得らるゝこと、彼の身は暗きも光明の發せることを述べてその出現を祈ると、天使の唱歌隊がグロリアを歌ふがきこえて漸次微かになる。三人耳を傾けながら互に顔を見合す。王を歓迎する聲のやうであつたと第一の王が言ふ。第二の王も左のやうだと言つて不圖牧羊者の倒れて居るのを認める。第一の王はその牧羊者が王らしい顔をして居ることを語り、第二の王もその淳樸な顔を見て、我等に先つて天國に達したものだ、と崇めて叩頭する。夢みる人の如く靜に近よる第三の王は、その牧羊者の手を執つて、此手は七十年の勞苦を爲した手である、此足は王の事業を踏んだ足である、余は汝を崇めるといつて香爐を遺骸の上に振動かして、そして汝に王住み給ふ上からは、王は此野に居給ふに相違無い。あの美しい星が

我等に告げ知らすやうであると右手の星を仰ぐ。第一の王はその上衣を脱いで牧羊者の上へ掛ける。そして三人右手へ連立つて王を求めに去る。と、緞帳がさらくと垂れた。

垂れた緞帳は、渴仰の家の門を表はして居ることは前の通りだ。アルトの聲で『備へや心を、子供等』*Prepare your hearts, children, with tenderest wo ship, the purest, the fairest, this hour to see!* の歌が銀鈴を振る如く朗かにきこえる。止むと直ぐ『如何にせばふさはしく汝に會ふべし』*How shall I fitly meet Thee?* の唱歌がフルコイラスで其に應へる。

渴仰、左手から登場。二人の牧羊者と青年と後から隨いて出て、疑はしげに立停る。

渴仰は、歌の導く儘に來たのにこれは不思議だ！自分の住家のある町だ。そして靜閑して居ると審しがる。牧羊者も心の迷ちや無かつたかと言ふ。と、青年は右手を見て、あれに寶玉美々しい冠をつけた紫衣の人が見える。たゞ人ではあるまいと叫ぶ。



三人の王は、一道の白光を放つて居る空の星を仰ぎ見ながら右手から登場する。彼の前に進むかの星を見よ。巡禮の星なり、と第三の王が言ふ。その光我等を射る王近きに居給はんと第一の王が前へ進む。渴仰は恭しく王に禮して、共に王を求めんと連れ立つ。此家は誰の家かと、渴仰に第二の王が訊ねる。

『見ぐるしき家なり。名も無き乙女の住家なり』と答へると、第一の王が、此家らしいから家の人に戸を明けさせやうと言ふ。そこで渴仰は、實は自分の家だが、御覽になるやうな物は無いと答へる。國王は互に眼と眼と見合して驚く。第二の王が、知慧の名を以てして是非とも門を開けと命ずる。渴仰はそこで王の足下にひれ伏して、見も知らぬ旅人が、幼子を連れて母と共に宿り居ること、王の爲にと貧しき食を備置きしも飢渴に迫れるものを拒むは無慈悲と、終に宿を貸したといふことを、面目なげに語ると、三人の王は皆な兩手を揚げて驚愕を示す。そして第三の王が畏敬と歡喜に充ちた顔をして、渴仰を立上らせ、『幸福なる乙女よ。我等汝に哀願す。汝の名は何と呼ぶぞ』と訊ねると、『渴仰と人は呼ぶなり』と答へる。『渴仰とや。乙女には悦ばしき極みの名なり。愛の名にて願ふ門を開け。入つ

て崇めん。王汝が家に居ませば』と第三の王が頼む。

渴仰は意外の言葉に身を震はし逡巡するが、と、恐るゝ進み寄つて幕に手を觸れると幕は左右に開く。見よ、基督を抱いたマリアが、自分が家を去つた時に見たと同じ場所に後光まばゆく腰かけて居るでは無いか。渴仰は覺えず跪いて平伏する。マリアは雪白の衣裳神々しく、光明は抱き居る基督から八方に射出して居るのである。かの男は、ジョセフは、右手を前へ伸ばして、半ば靜かにと制し、

僕は此時ばかり美しいと思つた芝居は無い。マリアに扮した女は二十七八の實に美しい神々しい女であつた。繪を見るよりも美しかつた。僕は國民美術館のラファエルの「マドンナ」も見た。ドレスデン畫堂のラファエルの「マドンナ、チサンシスト」を見た。ルウヴルのカンタリニの聖族に描かれて居るマドンナも見た。フイレンツエ畫堂のラファエルの「マドンナ、デル、カルデリノ」も見た。が、刹那の感じでは、矢張り此の *In the Flesh* の(血ある)素人芝居の「マドンナ」が遙か美しく遙か神々しかつた。幕が明いて、後光眩き此の「マドンナ」が突然僕の眸裏に映じた時は、言ふ



可からざる崇高の念に打たれたのであつた。  
何處とも無く、一人の聲で

『我は當らず。我と住まんとて天降り給ふことあるべしや。名譽と愉快を措きて、渴仰の客と來り給ふことあるべしや』

といふ歌がきこえる。終ると、同じく何處からと無く

『知らず識らずで神意に従ひし單純なる心よ。彼の喜を示さんとて王汝に來ませり』

といふ合唱がきこえる。渴仰は舞臺中央に平伏した儘で居ると、王と牧羊者は順次上段して服従尊敬の意を表明する。先づ第一の王が進み出でて、己が王冠を脱いで前へ捧げる。と、『此世の王を見よ』の唱歌がきこえる。國王は寢床の頭に近く左手へ立つ。次に第二の王が歸敬する。その時は、『死の不滅の敵を見よ』の合唱がきこえる。王は第一の王の横へ立つ。第三の王は右手を揚げ、左手に香爐を携へて上段、基督の寢顔を無限の歡喜を以て拜する。その間、『全世界の平和を見よ』の合唱がきこえる。王は第二の王の次に起立して第一の牧羊者に來れ

とうなづき示す。牧羊者は『歌はん歌はん喜び歌はん』を唱ふて寢床の尻の方へ立つ。次で第二の牧羊者が上つて跪いて『再びは無し、つらき戦は』云々の歌を唱ひ、第一牧羊者の次に立つ。次に青年も立つて跪いて歌ふ。顧みると渴仰は平伏した儘で居るので、第三の王と青年と下へ下りて乙女を扶け起す。そして聖族を指示すと、マリアは微笑んで來れと慫慂る。國王と牧羊者は下段する。そして渴仰は驚と喜に兩手を前に伸べて恐るゝ進むと、正面の紗の幕の後に一隊の天使の姿が朧氣に見える。そしてバストラル、シンフォニイの最後の十六節を合唱する。渴仰も、王も、牧羊者も初て此んな示現を眼にしたのである。

渴仰は兩手を擴げて基督の前に跪く。と、緞帳がゆるくその上に垂れ下つた。實に美しい光景であつた。

牧羊者と王とは恍惚として渴仰の姿を見て居るのであつたが、緞帳は此等の人達を舞臺の上へ残した。音樂は次第に微かになる。王と牧羊者は嘆息しつゝ、表の道路へ出ると、左右から名譽と慾望が走り出るが、王の姿を見て、だち／＼と退く。慾望はそれから家内へ入らんとすると、第三の王と青年とが手を舉げて推止める。』



何を求めるのかと王が訊ねると、名譽は慌しく、王が此方向へ来たといふ噂がある。乞食が二人来たさうだが、その言ふ言葉が分らなかつたといふこと、女の抱へて居た幼子の頭には冠があつたといふが、どうした譯かと訊く。慾望はまた蜜柑林の宴會で、給侍が来て表側に人の歎く聲がすると言つたら、突然果實は色を失ひ燈光も臙になつたといふことを語り、二人とも王に會ひたいといふと、『遅し〜』。戸は鎖されたり。神惠の時刻は過ぎたり。汝等の門に乞ふて入れられざりし王は、渴仰の家に入り給ひぬ』と言はれる。二人とも名譽と慾望の愚を思ふて悔悟の涙にかきくれる。

と、『この驕れる心内に嵩まりて』云々の合唱がきこえる。王と牧羊者は二人を憫れんで、第三の王が名譽の手を執り、歎いても甲斐は無いから行爲で罪を償へよ、それには智と愛の神にふさはしい玉座を門内に建てよと勧め、第一の牧羊者は慾望に、美酒佳肴は人間の辛苦に成つたものだから、神を迎へんとならば他の愉樂をせよと忠告する。第三の王と第一牧羊者が手を舉げて神を讚美の言葉を述べ、勞苦の裡にも精神は幸福だと語り合ふと、初めは微かだが、グロオリアの歌が段々

高くきこえて来る。

一同退場すると、歓迎するかのやう、グロオリア、イン、エキセルシス』の歌が次第次第に高まり、やがてまた次第に低く遠くなる。

これで此の劇は終つたのであつた。

突然見物席から、かのプロオグが舞臺へ上つて、

『劇は終れり。此のクリスマスに際し、郷等の爐の準備成れりや。門戸は開放

されありや。互に祈らん、渴仰と共に』云々

と述べた。そこで僕等見物人は一同起立して、樂の音に合はして、『エニ、エムマニエ、エル』の聖歌を歌つた。

言ひ忘れてはならぬ。千二三百頃年の神秘劇は、こんな上品な物ぢや無かつた。趣向も下手、言葉も下品なのが多かつた。『渴仰』は二十世紀の基督教徒に適するやう、二十世紀の人が書下ろしたものである。

(四十三年十二月)



## クリスマス

## ○クリスマス、カコロ

十二月二十二日の夜九時頃、夕食を済まして家の人達と表の食堂で世間話して居ると、突然玄関のドアの邊で歌の聲がきこえた。

『何處で歌つてるんです？　ありや何ですか？』

と訊ねると、G嬢が

『宅のドアの處でせう。クリスマス、カコロです』

といふ。ヂケンスの『クリスマス、カコロ』以来御馴染の言葉だが、實地に耳に聞くのは今日の今が初めてだ。

食堂をホオルへ出て見ると、ドアの上半部に嵌めてある厚い色硝子に、ベエグメントの街燈から射る光を遮つて、小さい頭の影が四つ見えて居る。

子供らしい可愛い、聲だ。朗らかな聲ぢや無い。おつかさんの前で讀本の下讀でもしてるやうな、小さい可愛い、聲だ。抑揚の餘りに無い歌だ。

僕はドアに身を寄せて耳をすまます。

ハア、ザ、ヘエラア、エンゼル、シン

グロオリイ、ツ、ザ、ニユウボオン、キン

と判然分る。

Hark! the herald angels sing

Glory to the new-born king;

Peace on earth, and mery mild,

God and sinners reconciled!

Joyful, all ye nations, rise,

Join the triumph of the skies;

Universal nature say,

Christ the Lord is born to-day.

と他の三つのスタンザから成つてゐる、一番普通なカコロを歌つてゐるのだ。いくらか貰ふまでは去らぬと見えて、それがすむと、

ワイル、シエバア、ヲツチ、ザア、プロツクス、バイ、ナイ

と更に歌ひ初めた。ソイルからシエ、バアと順に聲を上げて、ヲツチを下げ、ザア



イを又下げ、フロックス、バイ、ナイと一音づゝ上げて行く。極めて平易なチュウソウだ。少し習つたら僕にも歌へさうだ。

オオル、シイテッ、オン、ザ、グラウン

ナイよりも一音(？)下げてオオルとやる。一音あげてシイ、二音下けてテッド、二音揚げてオン。それからザ、グラウンドと順次尻を揚げる。文句程は僕も見たとのある歌だ。

While shepherds watch'd their flocks by night,

All seated on the ground,

The angel of Lord came down,

And glory shone around.

を第一のスタンザにした六スタンザの歌だ。

餘り長く歌はせるのは氣の毒だ。一文づゝやらうと、そつとドアを開けると、僕の顔を見上げた儘、矢張り歌ひ續けて居る。右の端のが七つ位の女の子、その次が六つ位の女の子、その次は八つ九つの女の子、一番左が十一二の男の子だ。ズボンのポケットから銅貨を出して、銘々に一片づゝやると、小さな手を出して、

『サンキュ、サア』と言つて歌をやめた。

『上手に歌ふね』

と言つたら、女の子だけは嬉しさうに、につこり笑つた。

『だれに教はつたの？』

と訊くと、

『テイチャ、サア』

とかすかな聲で、一番小さな女の子が答へた。そして靴音もさせずに玄關を下りて行つた。霧雨が降つて、外は暗かつた。

食堂へ歸るとG嬢が

『どうでした』

といふ。僕は一時間位ゆつくり聴きたい、と言つて居ると隣の玄關へ行つたと見えて、又も

ハア、ザ、ヘエラア、エンゼル、シン

グロオリイ、ツ、ザ、ニユウボオン、キン



と歌つて居る聲が夢のやうにきこえた。

○クリスマス、カード

十二月の初めから、文房具店はクリスマス、カードを賣り出す。廉いのは半片からある。高いのは六片のも一志のもある。中に刷り出してある文句は、

With all Good Wishes for a Merry Xmas and a Bright New Year.

だの

With Best Wishes for a Merry Christmas and a Bright and Prosperous New Year.

だの

All Christmas Joys and Happiness be Yours.

だの

With all Kind Thoughts and Best Wishes for Christmas

だのいふ、簡單なものもあれば、テニスンやシェエクスピアの長たらしい詩句を冒頭にしたものもある。それが多くは色文字か金文字だから美しい。

カードの形と表面の繪とは固より千態萬狀だ。その綺麗なこと日本の繪葉書

などは比べ物にならぬ。

今年のクリスマスは日曜日とちか合つたので、前日中に着くやうにいづれも發送する。僕は餘り人とは交際せぬ方だが、それでも二十二日頃から郵便の配達毎に三枚や五枚は屹度來た。

クロオヂヤア博士からののは、表面はホリイの花環に金の蹄鐵。花環の中は池を隔て、雪の森の繪だ。内側はクリスマスの祝儀の文句の他に

The years go speeding past,

And changes come with years

But Friendship aye will last,

Time but endears.

といふ、ファンサイドの詩の句が刷つてある。

オスマンエドワヅ氏からののは、忘れな草を縁にして、雪に埋れた教會が表側の繪で、内側は祝儀の文句の上に

Take this tribute, may it wake Memories sweet for auld time's sake.

といふシイルの文句が、小さく金文字で刷つてある。



ネリイ嬢からののは、表は四つ葉の酸漿かたはひが金で大きく浮かしてあつて、内側には  
 I count myself in nothing else so happy as in a soul remembering my good friends.  
 といふ沙翁の句が古代文字で色美しく刷られて居る。

賀 正

だの

謹賀新年

だの書くほかには、

なほ平素の疎情を謝し

併せて倍舊の厚誼を祈る

なんてなこと位、それも何の趣向も無く、平たの葉書に印刷されたのを見馴れて居る僕には、送つて来たクリスマス、カードがどれもこれも珍らしく又趣味あるものやうに感じられた。

### ○クリスマス、プレゼント

親しい間柄、親類縁者の間では、互にクリスマスの贈物をする。貰ふ方で重寶な

なやうなものをと趣向を凝らす。

僕の今居る家庭には三人娘がある。J嬢G嬢O嬢と。小包が届くと、

『私へのは無いの？』

『あたしへは三包よ』

なんて、三人とも頗るエキサイトする。手にとるなり、直ぐ糸を切つて、包紙を開く。

『オオ、デア——ハンカチツプス、アゲン』

『イズント、ヂス、ナイス』

『ビユウチフル——フヅリイ』

『ルツク——エリイ、ブリツチイ、イズントイット』

と三人が我れ勝に僕に見せる。餘り上等の品でなくとも

『イエス、ゼリイ、ブリツチイ』

『アイヴ、ネヴ、シン、サツチ、ア、ビユウチフル、ツン』

など、心にも無く賞めてやらなきや御機嫌が悪るいらしい。



娘へは書物は餘り來なかつた。然し本屋の前へ立つて見ると、進物用の美装のが、夥しく飾つてある。

ワリス、ミルスの水彩畫挿繪の模寫が十枚入つてゐる。半牛皮、リネン表紙、金縁、十卷本のゼエン、オオスチン集の綺麗なものが眼につく。いくらかと思つて見ると、七十志即ち三十五圓。

半ゼラム、リネン表紙金縁で、脊皮に草花模様の清楚な七卷本のジヨオジ、エリオット小説集がある。價はと見ると八十志、即ち四十圓。

三十八卷のラスキンのライブラリー、エディションがある。サリストン、クロオス製のが三十九磅十八志、即ち三百九十九圓、半モロッコのが五十九磅十七志、即ち五百九十八圓五十錢と札がついて居る。

尤も安い物もある。オオマア、カイヤムのルバイヤットなどは、ジエムスの色繪の入つてゐるのは二十二志六片だが半ゼラム、リネン表紙、金縁で七志のものもある。

安いといつても僕等貧書生には斯んな美装のは到底買へはせぬ。

僕には二十四日に小包が四つ來た。一つはゴランツ教授からなので、先生自ら監

修出版せられて居るキングスクラシックス中の、ブイツツジエラルドのボロニアス。今一つはロオス嬢からのだ。黒皮表紙の沙翁ソネット集。前述のゴランツ先生の緒言と語解が添はつてゐる本だ。今一つは、エリザベス、ビズランド夫人からので、自著の Japanese Letters of Lafcadio Hearn。今一つはキアノン嬢からなので、メエタアリンクのキズダム、アンド、デスチニイであつた。

### ○クリスマス、デコレイション

九時半、ゴングンといふ銅羅の音を聞いて、二階の僕の部屋を出て朝食にと階段を下りる。

昨夜のクリスマス、イヴには、別に何の催ほしも家では無かつたが、娘三人それに息子と老父とが、十一時過ぎまで下でガタ／＼コト／＼言はして居たから、屹度クリスマス、の御飾りをするのだらうと思ひながら床へ僕は入つた。果して御飾が出来て居る。

僕の今居る家は、玄關のドアを開けてはいると、幅一間半許り、奥行四間許りのホールがある。



此のホオルの中程から右側の壁に接して、絨氈の敷いてある階段がある。左側に腰丈位の手摺が附いて居る。階段は十段上ると、向ひの壁に突き當る。そして左に折れて八段で二階へ達する。此の手摺がイングリッシュ、ロオレルの小枝で巻き包まれて居る。

ホオルの左側の壁にはキスラアの鉛筆書が二枚額になつて掛つて居る。額縁が見ると、蔦で巻かれて居る。

此の左側の壁に食堂へはいる扉があるのだが、この扉の四周もロオレルを繞ぐらしてある。

階段の左に折れた手摺から、徑二尺許りの心臓形の物が吊るしてある。緋羅紗を貼りつけて、其上へ綿で

## CHRISTMAS GREETING

の文字が表はしてある。縁も綿で出来て居る。ホオルは薄暗いから、文字が判然目にうつる。

階段の左に折れる處で、手摺から食堂の扉の上部へ、糸につるした金文字がキラ

して居る。厚紙へ金紙を貼つて、それをきりぬいて文字にしたのだ。手間のかゝつたものだらう。文字の上の方へ糸を通して、瓔珞のやうにしたのだ。弓形に曲つて居る。文字は

## GLORIA IN EXCELSIS DEO

と讀まれる。

クリスマスにはホリイを使ふ筈だがと思つて見たが、ホリイは使つて無い。ホリイといふ木は、南天の實のやうな赤い實の生る柊だ。

ホオルの中央に、天井から瓦斯燈が吊るしてある。これにはミズルトオが一枝結び下げてある。ミズルトオといふのは主に、林檎の木に出来る寄生木で、二又二又にと枝が分れて居る。末端には楓の實に似た物がついて居る。さう掛時計の振に似た形のものだ。そしてその末の小枝の二又になつた處に、水色の珠數玉のやうな實が生つて居る。此のミズルトオの下でなら女は男を、男は女を、クリスマスの日に限つて接吻勝手といふ話は豫て聞いて居たが、今はそんな習慣は廢れたといふことだ。接吻された男は皮の手袋を女に、女はタイを男に、買つてやらなき



やならぬものだなど何かで讀んだことかあるが、そんな馬鹿な真似は今はせぬといふ。

一わたり此の飾を見て僕は食堂へはいる。

娘は三人とも早や食卓に就いて居る。息子はまだ寝て居るらしい。互に「メリイ、クリスマス」を言ひ交はす。何んとなく、いつもより陽氣だ。

見るとフアエア、ブレイスには盛に火が燃えて居る。マントルピースには諸方からのクリスマス、カードが綺麗に並べ飾つてある。

食卓はいつも通りで、別に飾りが無い。花瓶にはジョンクイルを心にして同じ様なナアシッサスがその周圍に八九本挿してあるきりだ。

「御飾りが立派に出来ましたね」と言ふと。

『今年や、ホリイが稀れで買へませんでした』

と、尋ねもせぬのに、丁嬢が辯解した。

○クリスマス、デナア

小説「夜行く船 Ships that pass in the Night」で文名一時に揚つた閨秀作家ハラデン女史 Beatrice Harraden から十七日によこされた手紙のうちに

Will you give me the pleasure of dining with me and my sister on Sunday, Christmas Day, at two o'clock?

とあつた。僕は有難く之を承諾して置いた。

そこでクリスマス當日の午後二時十五分には僕は女史の食堂の人となつて居た。通路が見下ろされる窓を背に僕が坐る。爐を背に僕の右に、女史の妹のガートルウド嬢。嬢の向側僕の左にハラデン女史がサイド、ボオドを背に坐られる。僕の向側には、御客のS嬢。雪白のナエブル、クロオスの中央にはナルシッサスの花瓶。花瓶の四方にクラツカアスが程能く積んである。銀のナイフ、フォーク、スプンが各自の前に光つて居る。

小間使がスープを持つて出る。女史は和蘭焼の茶碗へ大きなスプンで汲んで、皿へその茶碗を載して配られる。何といふスープか僕は分らなかつた。スプンを取り上げて、みんな謹ましやかに吸ふ。



女史はやがて背後の呼鈴を推される。

小間使——上衣も袴も黒い上へ、眞白のエプロンを掛けて、眞白のキャップを着けた小間使がスウプ皿を下げに来る。そして七面鳥のヂッシュを捧げて来た。女史は肉切りナイフを使ひつけぬからとて、妹の君に切り方を託される。

妹のガートルウド嬢、やをらナイフを取つて七面鳥の胸の邊から巧みに肉を切取つて皿へ盛りられる。そして姉君へ渡される。姉君はサイドボードから馬鈴薯やスブラウツをそれへ添へて、先づ第一に僕に呉られる。僕はソオスを自分で添へる。

四人の皿が渡つてから、女史は手づからスバアクリング、バルガンデイの口を抜いて、四人の盃へなみなみと注がれる。お互に楽しきクリスマスを祝ひませうとの挨拶があつて、各自同時に盃を舉げて、メリイクリスマスを飲んだ。

「日本では一月の一日を祝ふといふことですが、どんな飾りをして、どんな御馳走をたべるのです？」

との質問を受ける。ヘルン先生はその「アンファミリアル、ジャパン」に旨く書いて

て居られるが、僕の口では容易に説明が出来かねる。

此の皿が濟むと所謂クリスマスブデンが出る。皿へブランデイをそゝいで、それへ火をつけて、ポツポと青い火の燃えてるのを持つて来る。ブデンの中央にホライが一枝つき挿してあつた。

次には、これもクリスマスには附物の「ミンズバイ」が出た。松の樹の皮のやうなカサ／＼の旨く無いものだが、食はなきやならぬことになつてゐるから、據なく二つ頂戴する。その代り、すゝめらるゝまゝ、ブルガンデイは更にブルムフルに注いで貰つた。

御馳走はこれ限りだ。それからクラツカアを一本つゝ呉られる。四人が四人とも、右手に一本もつて、両手を胸の前で左右へ十文字にする。そして左手で、右側の人差し指を出して、クラツカアの一端を握るのだ。すると、みんなが左右両手にクラツカアの一端を握つてゐることになる。そして一、二、三で強く互に引張り合ふと、クラツカアは眞ん中から切れて、ボンと大きな音で破裂する。二三度やつて見た。



クラツカアはボンボンともいふ。極薄い馬糞紙を一二枚帯心程の丸さ長さに巻いて色紙に包んで、兩端が振ちてある。引張りちぎると、ボンと音を出す仕掛が中なかにしてあるのだ。そして何か景物が入れてある。

女史は有名なサフレゼットだ。だから景物がサフレエジに因んだもの許りだったのは面白かつた。監獄服に着いてる三つ矢、その三つ矢を女子社會政治同盟の旗印たる紫白緑に染めたのが附いてるプロオチも出た。葉を此の三色に染め分けた三つ葉カタバミの附いたプロオチも出た。ブラウニングの詩句の

*One fight more, the last and the best.*

の印刷してある紙片も出た。

シエレエの詩句の

*I always go on till I am stopped, and I never am stopped.*

が書いてある紙片も出た。

沙翁の「キンタアス、テエル」中の

*Sweet lady,*

*No court in Europe is too good for thee, what dost thou, then, in prison?*

が刷つてある紙片も出た。

女が監獄でかぶらされる、三つ矢のついた帽子の色紙製のものも出、巡査の帽子の色紙製のものも出た。

『みんな之をかぶつて話さうではありませんか』

とのことで、女三人は女囚徒の帽、僕は——フロックコオトの僕は巡査の帽を冠つて、御茶の時刻まで話しつゝ居た。

### ○クリスマス、ボックス

クリスマスの翌日をボクシングデイと稱する。一年に四度しか無いバンク、ホリデイの一日である。今年はクリスマスが日曜とかち合つたので、例年よりも一日休暇日が減つた譯なので、勅令でボクシングデイの翌日、即ち二十七日(火曜)をバンク、ホリデイにすることになつた。で今年は三日くっか休日が続くことになつた。

ボクシングデイには下男、下女、郵便配達、牛乳配達などが、所謂ボックスを貰ひに来る。推しかけて来るのだから面白い。



僕の家庭には十八九の丈の高いベシイといふ下女が居る。今一人舊居た下女で、今ちやミシスになつて二十四五の女が朝早く来て、部屋の掃除や臺所の用事を手傳つて正午に歸つて行く。アリスといふ女だ。此の二人には、クリスマスの三日前にボックスをやつた。日本雜貨店で求めた、唐縮緬の衣物着た小さな日本の人形と、三枚續きの錦繪と、それに六志を封筒に入れて遣つた。「マツチ、オブライジト、サアでにこくして居つた。」

クリスマスの前日、一寸用事があつて、友人M君を訪ねた。

『内に居ますか』

と、ドアを明けたメリイといふ下女にきくと、

『イエス、サア。キル、ユウ、カム、アブステアス？』

といふから、外套着た儘二階へ上らうとして

『さうだ、よく来て世話になるから、少しややらなきやなるまい』

と、かう思つて階段途中で、地下室の臺處へ行かうとして居たその下女に

『アイ、セイ』

と言つたら、こつちから何かやらうとも言はぬのに、下から手を出して、僕がカクシから金を出すのを待つて居つた。

二十六日には郵便屋が来た。二十六日は休日だが、午前に一度郵便物を配達する。この配達してあるくにはやらんでもいゝ、今に別に集めに來るのが來るか、と聞いたので、食堂で新聞を讀んでたら、正午前に郵便屋が一人玄關へ來た。

『クリスマス、ボックス、ブライズ』

と請求する。家の者一同からも一包み遣つた。僕へは、日本からの郵便日(月)木土の三日毎に何かしら郵便が來るし、殆んど毎日彼等の手を煩はさぬことは無い程だから、三志包んで渡してやつた。

『サンキュ、サア』

で歸つて行つた。聞けば配達管區を一軒／＼あるいて、貰つた包を局へ持ち歸つて、悉皆の金額を、局内の配達夫へ平分するのださうな。

クリスマス前には雑誌はいづれも美裝した、そして多くは附録の繪があるクリスマス號を發行する。僕は二十九日にキングル、ピアソン、カツセル、ベルメル、スト



ランド、ロンドンなど十八種を雑誌屋へ注文した。すると翌三十日の朝食過に、女の子のベシイが雑誌の大紙包を僕の部屋へ持つて来た。そして

『文房具店の小僧がボックスを下さいと言つてます』  
といふ。そこでその小僧に一志包んでやつた。

一志や二志遣るのは何んでも無いが、向ふからして『下さい』と請求するのは何だか僕等には變に思はれる。

(四十三年十二月三十一日)

## 正月元日

一夜明けて、千九百十一年の一月一日、日本での明治四十四年正月の元日と相成つたのだが、門松も無けりや、飾も無い外國のことだから、一向元日の感じがせぬ。食事に朝下りした時、家の人に「新年御芽出たう」と挨拶すると、御目出度うと形式的に言はれる丈で、平常と同じにベエコンエツグの皿が食卓に載つて居る。今年の元日は日曜日に相當するので、屋外は平常よりか人通が少い。尙更以て淋しい。

頗る不景氣だ。

去年の元日はビスケイ灣で迎へた。海は油を流したやうに平らで、船は疊の上を行くが如くであつた。夜の明けきらぬうちに蹶起して、東の方佛蘭西の地、平線上其處此處に豆粒を三つ四つ置いた程に見える佛蘭西西南の海角の横から躍り出る大初日の出を拜んだ。船員船客二等室の食堂に一座して屠蘇を酌んで君が代を合唱した。雑煮も喰つた。歌骨牌も遣つた。海上ながら實に元月らしく一日を送つた。それが今年は全く正月らしい感じが起らぬ。

霧のやうな雨が降つて居る。薄暗い。陰氣だ。

大使館での拜賀式は十一時卅分と案内状にあつたから、ゆつくり身仕度して十一時に絹帽フロックで宿を出た。

大使館へ參集して居る日本人は五十人に足らぬやうであつた。七分が陸海軍人で二分が正金郵船三井などの高級店員、残る一分が文官のやうだ。

一階の一室で、兩陛下、皇太子殿下の御眞影を拜した。軍人が前で、僕等がどん尻だつた。拜賀のすんだものから、次室で順次屠蘇が出る。銚子と三つ組の盃



は本物だ。大使は拜賀室に起立した居て年賀を受けられるのだが、夫人令嬢は此の次室で受けられる。

一同拜賀終つて下室の食堂へ案内される。此處には熱燭もあり、数の子、ゴマメ、煮染など、正月御馳走が数々用意してあつた。正月らしい氣が少しした。

五時頃に日本人會へ行つて見た。僕は實は會員ぢやないのだが構はず行く。地階から汚い階段を一階へ上ると、日本では感じぬ醬油くさい香が鼻を撲つ。上つて直ぐ左手の食堂で二三人ハツハと笑つてる聲がする。

給仕女が出て來たので、扉の開いた折ちらと室内を瞥見した。K文學士とO海軍大尉とK男爵との顔ほどは判つた。

その給仕女に夕食をと注文して置いて、階段を上つて右に突當つた談話室へ入る。

爐の近くで將棋をさして居る二人。立つてて其を眺めて居る者三四人。室の中央の大圓卓に向つて、新聞の綴込を翻して居る者が二人。長椅子の上に横坐り

して五目並に夢中のもの二人。これ切りしか居らぬ。察するに多くは晝食に來たので、此處に居る人達は居残なんだらう。M東北大學教授の他は未知の人だが、黙りで椅子にかけるのも變だから、誰にと無く、

『おめでたう』

と言つて、とある肱掛椅子へかける。いづれも振むいて、

『おめでたう』

『おめでたう』

と言つて呉れる。稍や元日らしい氣分になる。巻煙草ふかしながら、グラフィックやタトラアの繪ばかり見て見る。

I博士が入つて來た。

『やあ、おめでたう』

『おめでたう』

『昨夜は來なかつたねい』

『手紙に書いたやうに、舞踏會の方に先約があつたもんだから』



正月元日

『三人で盛にやつたよ』

『それから豫定通りセント、ポオルスへ行けたかい』

『酔つてしまつてそんな勇氣はなかつた。それでもミドナイト、サアギス見に近處のお寺へ——君知つてるだらう、あのベルサイズ、バアク停車場へ行く途中の、あの寺へ行つて見たものさ。後の方で見て居る積だつたが、こちらへこちらへと案内して讚美歌の本まで貸して呉れるぢや無いか。よわつたね。しかも一番前列へ行かせたぢやないか。K君と二人真面目な顔をしてたが、歌の時に立たなきやならんのだらう。酔つてるのだから、ふら／＼するので、實によわつたねい』

とI博士は言ふ。僕はまた舞踏會での話をする。

食堂に居た晝食から居續の連中はやつと引上ると見えて、階段の上り口の外套置場でわあ／＼話す聲がする。

K文學士が入つて來た。眞赤な顔をして居る。

『おめでたう、大分上機嫌だな』

と言ふと、

『一寸一休してから又やらう。君はこれからかい』

『僕は先刻來た許りた。僕は夕食だ』

そのうち、五目並連、將棋連は歸つた。

一番ささうかとK學士とI博士と盤に向ふ。僕はイラストレエテッド、ニユウスやスケッチの繪を今度は見て見る。クリスマス號にはいゝ繪がある。

見知らぬ人が一人來、二人來る。いづれも『おめでたう』といふ。七時には十人餘になつた。

『もうよろしう御座います』

と給仕女——ルビイといふツンとした給仕女が來て言ふ。皆んな食堂へ行く。日本人會の食堂は頗る殺風景なものだ。神田邊の廉西洋料理屋の一室といつた體だ。

不景氣なマントルルビイスがある。大鏡ほどはあるが、花瓶に挿してある櫻は固より造花だ。花瓣に砂埃がかゝつて居さうだ。でもその花瓶の横に、お供が飾ら

正月元日



れて居るのは嬉しい。徑一尺許りのへ八寸許りのを重ねて、上へ昆布を掛けて伊勢鰯とレモンが一つ載してある。

『うん、正月だな』

といふ氣が少しはするが、洋服でテエブルに對つて居るのだから充分に正月心にはなれぬ。

卓上の膳部を見る。仲々御馳走がある。大に飲めさうだ。ルビイが横へ来て

『トッ』

と小聲で言ふ。そして本場の銚子を捧げて居る。カフスもエプロンも新規な眞白いのを着て居る。

膳には日本盃と硝子盃と二つ置いてある。日本盃で受ける。正銘擬無しの屠蘇だ。稍や正月らしくなる。

『ア、ハビイ、ニエウ、ヤア、ツ、ユウ』

と思出して言つてやると

『ザ、セイム、ツ、ユサア』

と微笑んで居る。烟酒一本注文する。

シエリイがいゝの、ソオタアンがいゝの、ポルドオがいゝのと言つても、矢張り日本酒には敵はぬ。グビリ〜と傾ける。

御馳走は、先づ吸物代りに雑煮碗がある。鳥肉菜、小推茸、蒲鉾入りと御鄭寧だ。

雑煮碗の右が大根と胡蘿蔔の膾。魚は鮪だ。二た切か三切しか入つて居ない。

膾皿の上に刺身皿がある。白髪大根、白髪胡蘿蔔のツマをうんと盛つて、その上へ鮪の薄片が行儀よく並んで居る。日本ぢや珍らしくも無いのだが、倫敦で食ふ

鮪は遙々印度洋から氷詰で来るのだと聞くと珍品だ。御粗末にしては相すまぬ譯である。風味も仙臺鮪よりかいゝ。日本酒の肴には無くちやならぬ品物だ。

刺身皿のお隣が煮染だ。蒲鉾、酢午莠、干鰯、凍蒟蒻が至つて輕少に盛つてある。

輕少ではあるが、いづれも倫敦ぢや珍品だ。蒲鉾は魚の氣が少しして居る許りだ。など、我儘は言へぬ。

壺は、花がつをを溢るゝ許りに盛つたオロシ大根だ。開けば大根ぢや無くて蕪菁ださうな。オロシ蕪だ。然し仲々辛い。



お膳に載り切らぬ皿が横に三つ置いてある。

一つは午蒭、慈姑、大根、馬鈴薯、胡蘿蔔が一切れ又は二切れづゝ入つてる中皿だ。東京のおセチだ。それへゴマメも添へてある。

今一つの皿には鮭の粕漬の焼いたのが一切れ、それに酢蕪が添はつて居る。

今一つの皿は、正月の御馳走に無くて叶はぬカズノコだ。

一盃又一盃と傾ける。いゝ氣持になるわい。

僕の食卓には二人づゝ、差向に坐つてたのだが、三人とも知らぬ人だ。正金か三井かの人らしい。平常なら僕は黙つて居るのだが、正月とあつて

『どうです、注ぎませうか』

と徳利を取上る。僕も注いで貰つた。そして四人互に「目出度き新年」を飲んだ。

筋向の食卓には、鼻鬚の濃い、五十恰好の、春廣の紳士が一人居る。オロシと數の子ばかり、幾度もお代を命じてグイ／＼獨りで飲んで居る。

その隣の、一番隅の食卓にはモオニング揃の海軍士官が三人、盛んにぱくつき盛んに飲んで居る。○部の○○生と交際すると貧乏風が傳染るからといつて、彼等

は非道く高く止まつて居ると聞いて居る。

將棋の勝負がついたのか、暫くしてK文學士とI博士が入つて來た。そして鼻鬚の濃い紳士の向側へ並んで腰かけた。

僕は御馳走を平らげて終つたから、香物鉢からキャベツ、蕪菁の新漬と蕪とをウンと茶碗の蓋へ取つて、これを菜に飯を一膳かきこんだ。

『もう飯をやるのかい。こちへ來給へ』

と切りにK文學士が勧めるので、二膳目の箸を置いて、徳利片手に盃さげて、鼻鬚紳士の横へ坐る。I陸軍中佐だと紹介される。其處へ二階の球突場からS高商教授が下りて來て僕と中佐の間へ割込んだが、スケエチングの約束があるからと言つて急いで歸つてしまつた。

僕等四人は話しながら大に傾けた。

『セイ、ミス——。アナザ、ボツル、ヅ、サケ、ブライズ』

が幾度繰返されたか分らぬ。斯くて全く正月ムウドになつて去つたのは九時半過であつた。



屋外は晝に勝して人通が稀だ。小雨が降つて居つた。

(四十四年一月)

### 舞踏會

毎年除夜にはセント、ポオルス寺院の前庭は人で埋まるといふ。九分九厘までは蘇格蘭人でそれが銘々キスキイ、ワインの罐を用意して出て居るのださうな。そして正夜半の、舊年を送り新年を迎へる鐘が寺院から鳴り出すのを合圖に、銘々の四周の人に向つて既知、未知の構ひ無く、

「ア、ハツビイ、ニユウ、イア」

を叫んで、豫て用意のキスキイ、ワインの盃を侷める。そして『オオールド、ラング、ザイン』を合唱するのだといふ。此の盛んな景色も見たいには見たいが、友人キルソン君が案内しやうといふ舞踏會も見たい。どつちを見やうかと迷つた揚句、ダンスング、バアテイへ行つて見ることに決めた。

夕食はキルソン氏宅で御馳走になる。食後煙草をふかしながら、

『何處であるんです、そして何時から？』

『なに、スクエアの向側のミス、ジイの處だ。八時半からといふんだが、九時過ぎで行きや宜からう』

と緩くり構へて居る。キルソン氏方に寄宿して居る英人のハンタ君、佛人のフラゼリイ君も同行するのだといふ。二人は食後、衣物を換へに二階へ上つた。

『ダンスングの會だから、矢張りイイヴニングで来りやよかつたといふと、

『ブライエエトの小會だから、黒い着物でさへありや宜いんです。僕も之れで行きます』

といふ。モオニングを着て居る。二階から下りた二人を見ると、これも脊廣をモオニングに換へた許りである。フロッコオトの僕いさゝか安堵した。キルソン君の妹のエダ君、化粧に仲々手間取る。カフェエも飲まずに自分の部屋へ駆け上つたのだが、かれこれ小一時間も経つに下りて來ぬ。やつと九時少し前に、スカアの音シャラ／＼と食堂の扉を明け、入つて來た。夜會服を着て居る。裾を一



尺餘りも曳きすつて居る。リライ、ラヴ、ザ、グレイの香ひが馥郁として食堂に漲る。」

『さ、出掛けやう。つい其處だから、外套も帽子も家内に置いて行かう』

といふ。五人共、帽子無しで、スクエアのベエグメントを辿る。

空は曇つては居るが降りさうには無い。風も餘り寒くは無い。ミス、ジイの玄關のノツカアを敲く。内からドアを明けた下女が

『どうか御入り下さい』

とホオルに沿ふた部屋の扉を明けて案内して呉れた。もう始まつたと見えて、ピアノの音に連れて、舞踏の足摺の音がして居たが、それがハタと歌んだ。

部屋の入口迄出て来たジイ嬢が、キルソン君の紹介を待つて、僕等野郎三人に握手する。

『よく来て下さいました。折角男の方の数が足りませんで、困つて居ました』といふ。

『いえ、私しや、ダンスは出来ません。唯だ拜見さして頂かうと思つて参りました』

と、實の所を打ち明ける。

部屋へはいつて見ると、天井から下がつて居る三組の花瓦斯燈で晝の如く明るい。いさゝか面はゆい氣がする。部屋は五間に六間位の廣さだ。

右側は壁で、中央三尺許り引込んで居るレセスに安樂椅子が置いてある。其れには丈の高い、燕尾服着た若い男が、廿一二の女二人と腰かけて居た。

正面の壁の中央はフアイア、ブレイスで、石炭が盛んに燃えて居る。その爐の右側のレセスにも、安樂椅子があつて、十七八の娘と、廿二三の女とが腰かけて居た。

左側のレセスの處には、大きなマホガニの圓卓が据ゑてあつて、ワイン、キスキイ、シエリイと見ゆるボトルが四五本、ソオダ、ヲオタアの罐が四五本、御菓子の盛つてある大皿が二つ三つ、二十枚も積み重ねた小皿などが載してある。そして罐や皿の間にはクラツカアが隙間無く置いてある。

左側はスクエアの見える窓が四つある。そして窓際の長椅子にスモオキングを着た二十五六の男と、派手な着物着た五十許りの女とが腰かけて居た。

部屋の左の隅、食卓と反對の側に、斜めにピアノが一臺置いてある。左右に立て



た二本の大蠟燭に顔を照らされて、これも五十許りの女がピアノに向つて坐つて居た。

主人のミス、ジイといふのは、ミスは、ミスだが五十近い嬢だつた。

僕等が部屋へ入ると、皆んな座を立つて寄つて來た。僕はキルソン君の紹介や主婦の紹介で、此の八人一人一人に握手する。ハンタ君、フラゼリイ君も同様だから、『ハウ、ド、エ、ドウ』が幾度か繰返へされる。一々やるのは厄介だが、然し日本で偶ま見るやうな、同席して居ながら最後まで睨み合ひで居るやうな、あんな變な窮屈は無くつて、紹介されて一度握手すると、十年の舊友の如く、親しく話し合ふ此地の習慣は僕には甚だ心地がいゝ。

僕はピアノの横の入口の扉つゞきの壁に沿ふて置いてあつた椅子の一つに腰かけた。

『さあ、ワルツを』

と言ふので、ハンタ君、フラゼリイ君、それに今二人の紳士が、若い女四人と二人づつ組み合つて踊り出した。ワルツは一番普通な踊だ。何處の舞踏會でも十番踊

があれば七番はワルツだ、こと程普通な踊だ。男の左手と女の右手と握り合つて、多くの場合肩と水平に保つ。男は右手で、女の腋下から軽く腰を抱く。女の左手は男の右肩を抑えて居るのもあるが、裳の長い女は男の右腕を抱へつゝ、裳を裏けて居るのもある。音楽は先刻ピアノに坐つてたのがやつた。音楽の拍子に連れて、女を抱へながら、いつも右足を引いてグル／＼舞をやつてさへ居ればいゝやうに見える。六つかしいもんだと言ふことだが、見て居る眼には左うとも思へぬ。女は多く澄ました顔して、男の足取に隨いて唯クル／＼廻つて居るやうに見える。舞ひながら——音楽の音で聴こえぬが——男は切りと何か女の御機嫌に入るやうなことを言ふと見える。時々女はニコと微笑む。僕の前へ、あの組この組と舞ひながら通る度毎にワイトロオズ、リリイ、ラヴ、ザ、グレイ、ヘリオトロオズ、ヴイオレットと芳香鼻を撲つ。女の白皙の顔が櫻色になる。いゝ色だ。一番すむ。女共は男の進むる椅子に腰をかける。そして或は牙骨、或は塗骨の房の垂れた扇子を軽やかに使ふ。

『おゝ、あつ』



なんて言つて居る。フラゼリイ君と、今一人の丈せうの高い何とか言つた男とが、女の  
前へ一々行つて、

『何か上げませうか。ラムネ？ソオダ水？』

なんて言つてる。

『えゝ。私にやソオダ水を下さい』

『有難う。そんなにや渴きませんからまづ……』

てなことを女共は返事する。紳士二人は、食卓へ行つて、ソオダ水やラムネやらを  
注いで、その御盆を恭しく女共の前へ持つて行く。

その次にもワルツが一番あつて、其の次にはボルカが始まつた。

『大谷さん、おやりなさい。』

『とても〜』

『スリイ、ステツプスですから、すぐ覚えられるでせう』

と主人のミス、ジイが来て言ふ。平に御断りする。

『ワインを上げませうか、シェリイを上げませうか』

と言ふ。ポットワインを一とコップ貰つて啜りながらダンスを見物して居る。

此のボルカがすむと、下女が二人で、臺處からカフエを連んで来た。先づ若い女  
の方から飲まして、僕等へは最後に持つて来る。サンドキチも持つて来た。ハン  
タ君が僕の隣の椅子に腰かけに来て、巻煙草を呉れる。

『どうです、君も加はりたまへ』

『だつて僕は一度も経験が無いのだから。少しでも習つてるとやるんだが』

『なに、皆んな下手だから、クル〜廻つてさへ居りやいゝ』

と真面目で言ふ。

カフエを下女に下げさしてから、さつき爐の右側の安樂椅子に居た十七八の  
非常に美しいのが、座を立つて、僕の前を

『エキスキユス、ミイ』

で通つてピアノの前にして立つた。そして突然朗々と歌ひ出した。文句は少し  
も判らぬ。佛蘭西語でも無く、獨逸語でも無い。伊太利語らしくきこえる。文句  
は判らぬが、確に歌は旨い。歌ひ終つて、皆んなの拍手中に舊もとの席へ歸つた。



僕は左隣に居るエダ嬢に

『何處の歌？何んとかいつたね、あの娘の名は』

『伊太利の歌。あれがリライ、バエル。今、それ、あの扇を使つてるの、あれがリ

ライの姉さんのガートルウド』

と、さゝやく。僕が初めて部屋に入つた時、燕尾服の若い男と同じ椅子に腰かけてた二人のうちの一人がその姉の方だと知る。その時の今一人の廿一二の女の名を聞くと、

『アンナ！佛蘭西の人ですよ』

といふ。そして今一人の、二十二三の圓顔の中肉中丈のが、ミニイといふ獨逸の女だといふことも知つた。アンナ嬢もミニイ嬢も少しも自國語のアクセントが無い。僕は自分の英語に省みて赧顔せざるを得なかつた。

次にエダ嬢が主婦に促されてピアノに向つた。そして英吉利の田舎歌の短かいのを、自分で弾きながら歌つた。リライ嬢には遙かに及ばぬやうだつたが、それでも皆んな拍手した。

その次には、またダンスに還つて、ワルツを一としきり踊つた。踊の時はいつもの、五十近い女がピアノに向つた。

それがすむと、皆んなのやれる遊びをしやうといふことになつて、ミュージカル、チエアといふのをやることになつた。僕も之には加はつた。

遊戯者が十一人居れば椅子を十脚部屋の中央に一列に並べる。第一の椅子を左向きに置けば、第二のは右向き、第三のは左向き、その次のは又右向きといふ具合に、腰掛ける處を交互に反對の側へ向けて置く。そして可成その十一人の遊戯者をば、女男女男と交互にして十脚の一系列の椅子の周圍に一方向きに立たせる。音樂に連れて一同足踏み面白く踊りながら椅子の周圍を廻るのだ。すると突然音樂が歌む。歌むが早いか、一番身近の椅子に腰かけるのだ。十一人に十脚しか椅子が無いのだから、一人は腰かけはぐれる。その一人は退けられることになる。今度は椅子を一脚減して、残つた十人でやる。その次には更に一脚減して、九人でやる。到頭終には二人で一脚の椅子を争ふことになるのである。狼狽へて坐らうとするから、男と女とが一つ椅子に半々に腰かけることもある。誤つて女の腰



かけた上へ男が腰かけることがある。音楽が突然歌んだ時はキャツキャといふ騒ぎだ。此の遊戯は二度やつたが二度とも僕は初の三四回のうちに退け者にされてしまった。

一と休息してからガートルウド——妹のリリイ程には無いが、でも美人の部に属するガートルウド嬢が滑稽演説をやると自分で言ひ出した。そして部屋の扉近くの處へ行つて立つた。そしてジェスチュア巧みに辯じ出した。佛蘭西人の遣ふプロオクン、イングリシユの真似をするのださうな。如何さま、文法も滅茶、そして全くのフランス、アクセントだ。言ひ詰ると佛蘭西語を出す。嬢は生粹の英國人だが、その英語は全く佛蘭西人の英語に聞こえる。

「マ、ジェリイ。ダツ、インボッシブル。デア、イス、ノ、レエズン、ド、……」  
とかいふやうな文句の處では本當の佛蘭西人たるフラゼリイ君苦笑して聽いて居る。

濟んでから嬢はフラゼリイ君に向つて

「どうでした。間に挿んだ私の佛蘭西語は分りましたか」

「私の英語よりかあなたの佛蘭西語の方が旨い」  
なんて言つて居る。

「序にも一つ遣りませうか——  
と、嬢は臆せず始める。演題は「スモオキング」といふのだといふ。今度は獨逸人下手な英語を真似するのだといふ。こいつも面白かつた。

「デン、ヒイ、リインド、アゲンスト、ダ、チオル、ウント、ビガン、ツウ、シユモオク、プッフ、ウント、プッフ」

なんといふ處もある。これも大喝采だつた。これも濟んでから、座中の獨逸人たるミニイ嬢に向つて

「御氣の毒さま。怒つちやいやよ」

「私しやそんな英語はつかやしなくてよ」

僕はエダ嬢に

「實に旨いね」

とさうやくと、嬢も